
ネギま！ ～魂狩り～

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～魂狩り～

【Nコード】

N0786Y

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

テンプレ的な転生というやつです。ね解ります。はあ、ぼくは男なのに女になっちゃうし、突然女の子……っというか豹子が降ってくるし……。ていうかこの神様をどうにかしてほしい……。ああもう、儘だ。このまま原作介入してやろうじゃねえか。原作ブレイク。fキャラ崩壊。作者の休み時間に作ったてきとー小説。作者の文才なし。これら全てを許せる人におススメします。

思い通りになるなんて思いたくもありません。

ネギま！ 三十五巻。

ぼくが買った漫画一冊。それが周囲に曝け出された。白黒のペー
ジが血に染まっていく。なんでかなあ。痛みは不思議と無かった。
それどころか心地が良いとさえ思えた。視界が霞んでいく。音が聞
こえなくなる。鉄の臭いが消えていく。宙に浮かんでいる様な感覚
が生まれる。

こうしてぼく、

は死んだ。

心地が良いままに流れていく。川の流れに逆らわず、ただ流れて
いく。そんな感覚。

そして、それは唐突だった。

「痛っ！」

急に、落ちた様な感覚。それから腹部に衝撃。

肺の中にあつた空気が強制的に排出された。今、ぼくは目を開け
ているのだろうか。暗い。もしかして、目を開けてないのかもしれない。
じゃあ、この重い瞼を持ち上げよう。あれ、目の開け方って、
どうやるんだっけ。

息ができない、けど苦しくない。体中が痛くて、体中が心地良い。
矛盾だらけだった。

(……なんなんだろうなあ。ぼく、死んだはずなのに)

そう、死んだはずなのだ。ぼくは死んだ。漫画を買ったその日の帰りに、トラックに轢かれて、それで死んだはずだ。ここが病室じゃなければ、死んだはずだ。

ええ、確かに貴方は死んだ

……誰だ。

若い女の声。残念だけど、ぼくは一生涯女性となんらかの関係を持ったことが無い。それこそ、先生と生徒。或いはクラスメイトという関係が限界。友達なんていう関係を持った女性は、誰ひとりしていない。

私だって、なにも貴方の様なやつと友達になりたくて来たわけではないのよ？

知ってるよ。答えたいけど言えない。でもどうやらこちらの意思は伝わっているそうだ。それはなにより。しかし、一体なんなのだろうか。地べたに這い蹲ったまま、動けない。いや、ここが地べたかどうかも分からない。

どうも貴方は私の部下のミスで死んじゃったみたいだね。だから貴方にチャンスってわけよ

ベタっすね。

そういうもんよ。世の中なんてベタで埋め尽くされてるわ

否定はしませんよ。たった十九年の命でしたけど。

それにしても、なんだかこの声は心地が良い。脳に直接伝わってくるような、変な感覚だけでも、不思議と心地が良いのだ。現実味

のない声だと思った。

まあ、とりあえずよ。貴方は生き帰る。いえ、生き返るだけね。だって貴方、自分の世界に帰れないもの

どういうことだろうか。ぼくが自分の世界に帰れない？ それなら、ぼくはどんなチャンスが与えられるというのか。

貴方は、私の祖父が創造した世界に送るわ。貴方が持ってた漫画、この世界が基盤なのよ

ここまで言えば、分かるかしら？

ああ、どうせあのネギまの世界に送り込まれるんでしょ。

そう
物分かりがいい子は好きよ。だけでも貴方は好きになれなさ

なんでまた。

そう
だって貴方、怖いんですもの。貴方と話していると死んじやい

神様も、死ぬんですね。
少し意外だ。

当たり前よ。この世には死なないものなんてないの。不老不死の存在だって殺すことくらい安易なものよ

さいですか。とりあえず、なんですか。チャンスって言うなら、特殊な力くらいいくれるんですよね。

そうね。貴方の望み通りにしましょう。できるだけね。

できるだけ、ですか。まあいいです。

それじゃあぼくの魔力値はあのナギ以上。殺気の出し方会得済み。魔法詠唱は勿論できる。あと、何か武器が欲しいですね。ぼくが見たあの世界。武器がなくちゃ、キツイなんてものじゃない。魔法の射手で死んじやいます。

それから《戦いの旋律》 《魔法の射手》 はデフォで扱えるように知識をください。

そう。把握したわ。武器はこちらで決めるわね。

ああ、それから注意事項ね。貴方、女になるから

……すみません、幻聴に邪魔されて聞こえませんでした。もう一度言ってください。

そう。把握したわ。武器はこちらで決めるわね。

ああ、それから注意事項ね。貴方、女になるから

態々全文リピートサンキューです。ですが残念です。また幻聴が聞こえました。

現実逃避は感心しないわよ。仕方ないじゃない。自然とそうなっちゃうのよ。男は女に、女は男に、ね

そんなバカな。

そんなことがあつては堪ったもんじゃない。

断りたい。今すぐ断りたい。断ろう。

もうダメよ。矛盾が無い様に世界を修正させちゃったから

じゃあ元に戻してくださいよ。

あんた私のこと嘗めてる？ どんだけ疲れることさせる気なのよ、あんた。ただでさえ疲れが溜まってぶっ倒れそうなのに

……………すいません。

だが待つてほしい。ぼくが女？ 男なら誰もが夢見るシチュエーションと言えばハーレムだ。

だが、自分が女になるだと？ ふざけないでほしい。それは苦痛だ。日常生活に支障が出る。

別に良いじゃない。女の体で遊んでれば。あんあん言ってなさいよ

あんた神様の癖に下品ですよ。

神様だからって糞も尿も屁も出ないって訳じゃないのよ

知りませんよそんなこと。

もう鬱陶しいわ。私のこと偏見持つて見てる人

あんた有名人なんですか。アイドルなんですかこのヤロー！。

やるつじゃないわ。アマよ

その訂正もどうかと思います。

もついいわ。話ばかりしても面倒なだけ。……さよなら、

……バイバイ、ぼくの

さあ、ぼくの転生物語。始まり始まり。

思い通りになるなんて思いたくもありません。(後書き)

次から本気出す。とでも思ったか!!

これはぼくの完・全・趣・味・小・説だ!

感想で「こんな感じにストーリーを進めてえ」とか言うのも五十パーセントの確率で却下だああ!

タイピングミス・誤字・誤変換なんて日常茶飯事!

……うん、普通に読んでくれると嬉しい。

希望は悉く達成困難であるべきだ。

目が覚めた。体を動かさず思考を働かせる。無駄に動いて命のピンチなんてご免だ。そんなことあり得ないだろうけど。だけでも念には念を、だ。ここは魔法の世界。なにが起こっても、不思議じゃない。

体に変な違和感を感じるが、周囲はまったくと言って良い程に違和感たるものを感じない。人の気配も全くないし、視線も感じない。半径百メートルまでなら、視線に気づける自信はある。昔から臆病だったから。……ここまで何も感じないと、逆に不安が募る。いつも人ごみのなかで過ごしてきたからね。

さて、と。そんなことはどうでもいい。今は状況把握と行こうか。周囲に違和感がないなら体を起しても大丈夫だろう。上体をゆつくりと持ち上げる。周囲を見渡すが……見事なまでなにもなかった。

「あのヤロー……じゃなかった。あのアマ。一体ぼくをどこに放り落としてくれたんだ？」

見た感じは普通の森。……だが聞こえてくる動物の鳴き声が普通じゃない。

びぎやーとかぶぎやーとか。

時たま聞こえてくる普通の鳥の囀りが少し救いになった。

しかし、ぼくの体。あまりにも違和感の塊すぎる。あるはずのものが無くて、無いはずのものがある。とんでもない違和感。どうも、本来無かった臓器があるというのは不可思議極まりない感覚だった。

「……傑作だな」

まあ、性別がないよりはマシだろう。精神が男で身体は女。……変態爆誕の瞬間なのではないだろうか。いや、だがしかし待て。この世には性転換手術をしている人もいる。ならば不可抗力にこうなつたぼくは変態じゃない。あ、いや。性変換手術した人が変態って言いたいわけじゃないんだけど。

そつだ。やましい心なんてものを持つてるから変に思つてしまうんだ。

ここは、前向きに行こう。

まず女の身体ならば、男を落とすくらい容易いのではないだろうか。今の自分のスペックなんて知らないけど。とりあえず、並の女と同等レベルであれば十分だ。男から情報を聞き出すことくらい他愛もないはず。

「だけど、こんな森の中じゃあなあ……」

自分の喉から出てる声とは思えない可愛らしい声に少し動揺してしまう。さつきまで違和感がなかったのに、意識するとかなり変だ。前までの低い声はいずれ。」

ま、まあいい。本当は良くなかないけど、この際どうでもいいとしておこう。

ぼくの視界で捉えることのできる自分のスペックを調べよう。

身長的には小学生から中学生だろうか。比較物がないから分からないけれど、男だった頃の身長との違和感からしてまず間違いない。胸は……ない。いや、微妙に盛ってある感じか。下半身部分の違和感は仕方ないと割り切る他にない。

とにかく、だ。森を出よう。そういえば、魔法発動媒体の杖や指輪は……あ、あった。ぼくの唯一のアクセサリー。シンプルなデザインのブレスレット。確か、ネギまの世界には浮遊術があつたはず

だ。今のぼくにできるとは思えないが、その内必要となってくるだろう。ならばこそ、誰かに会うべきだ。

この森からしてここは魔法世界だろうか。ならば魔法を知らない人なんていないはずだ。早く森を出て、誰かと接する機会を貰おう。魔法熟練者がぼくに良い。魔法の師匠となる人を探すのだから、当たり前だ。

森を進んでいく。なにもない。見事になにもない。途中通った湖でタコみたいなやつと会ったが……。如何せん大きすぎて、今のぼくには倒せそうにない。故に逃げた。湖から離れば良いだけだったから簡単だった。

そして逃げ切った後で思い出したことがある。
武器だ。

あの神様はぼくに武器を持たせてくれているはず。だが見てみる。今のぼくの持ち物はどうかの学校の制服みたいな服と魔法発動媒体と思われるブレスレットだけ。

「……騙されたのかな」

神様が人を騙すだなんて、あり得ん。

だがこれが一番あり得るというのもまた事実。なんせ神様は死ぬのだ。死ぬものは、騙して騙して騙して生き長らえようとする。ここから考えられる可能性からすれば、願いを叶えることに、神様の寿命が減っていく。疲れが溜まっていると言っていた。それは願いを叶えすぎてもうすぐ死にそうだと言っていたのではないだろうか。或いは、ぼくの願いの中で「武器が欲しい」という願いを叶えることもできずに死んだのか。なら、少し酷いことをしただろうか。と、罪悪感を感じていると、ぼくの頭上になにかがひらりと

降ってきた。ぼくは呆然とそれを見る。必然、それはぼくの目の前の地面に落ちてしまう。

「……………紙？」

紙だった。

しかし、こんなところで紙なんてものが降ってくるなんて、あまりにも不可解だ。なにかの意図があつて落とされたのか、定かではない。だけでも紙を拾ってもなにもバチが当たるわけでもないだろう。

腰を低くして紙を拾う。白紙だった。裏を見る。なんか書かれてた。

やつほー、ぼくちゃん元気ー？ 元気じゃないかそうか。私あれね。さつきまで一緒に話してた神様。んで、武器ね。すっかり忘れてたわ。めんごめんご。だから、渡すわ。

そうそう。浮気なんてしちゃだめだよ。ほっぺにちゅーまでなら許す！

P S この紙は落ちてから十五秒後に爆発します

ドカアアアン！

読み終わった直後に爆発した。

「けほっ……………」

怨めしいことしてくれるじゃねえか神様。てか神様、なんか口調変わってなかった？ あれか。神様は会話と手紙で性格が変わるタイプの人なのか。或いは現実とネットで人格が変わる人。

てか文の最後はなんだ。浮気？ ホワイ？ ぼくは誰かと付き合

っている記憶が一切ない。そもそもこの身体でどんな人と付き合え
というのか。

「……お」

爆発した後の煙が晴れた。そしてぼくの足元になにかがあるのが
見えた。

……。
大剣だった。

「……まじもんに危ないもの送ってきたな、あの神様^{ヤロ}」

敢えて口に出していった。あの神様の前では口に出しても出さな
くても同じだろう。

さて、と。これがぼくの武器というわけか。てか神様の寿命はど
うした。いや、ぼくの勝手な想像だったことは確かなんだけど……。
貴女に対して心配したぼくが間違えでしたね。すいません。

「ていうか、武器送るよりもぼくを町に転送してほしい……」

とりあえず大剣を拾った。これがRPGゲームなら今頃BGMが
流れてくれるはずだが……。そんなものが流れるはずなど無く、相
も変わらず変な鳴き声が虚しく聞こえるだけだった。

武器も手に入ったことだし、とりあえずはもうちよつと森を練り
歩いてみようと思う。

しかしこの大剣重い……。女の身体になったから筋力でも低下
したのかもしれない。不便だ。早くも日常生活の不安が浮上した。
力不足と体力不足。ううむ、どうしたものかな。

森を歩いていたら高い壁がそびえ立っていた。崖だ。崖で行き止まりになっていたのだ。そんなバカな。まあいい。この崖を目印にしよう。これにそって歩いたら外に出られるかもしれない。かもしれない運転……いや、かもしれない歩法は大事だよ。もしだめだったら頑張つて崖を登ってみよう。この大剣背負いながらって無理難題っぽいけど。

一人で森の中を歩くのは意外と寂しい。寂しいなんて感覚、麻痺していたと思つてたけれど……。まあ、とりあえずだ。寂しさを紛らわすために、いろいろ説明をしていきたいと思う。

まず女の身体になつた感想。正直、損しかない。

今のところ得が一つもないのだ。華奢な身体に見合った体力に筋力。今現在、既に疲れが出始めている。なにより、身体全体がむず痒い。自分の体じゃない体になつたせいなのか定かではないが、とりあえずこの感覚に慣れるにはかなりの時間が必要だろう。あと、髪が凄く鬱陶しい。日光のせいか、茶髪つばく見える前髪がさつきから邪魔だ。頭にはカチューシャがついてるのだが……。あの神様のことだ。カチューシャを弄つたら爆発、なんていうオチがあるに決まっている。だから触れないことにした。本当なら前髪を掻き上げたい。けど頭が吹っ飛んでゲームオーバー、じゃあ地獄の果てまで逝つてらっしゃいにはなりたくない。

ちなみに今来てる服は制服の冬服的な感じ。そのくせミニスカなのだから、さつきから下がすーすーして仕方ない。

次に大剣の方だ。

大剣というより両手剣と言つべきなのだろうか。ぼくの今の筋力では肩に担いでやつと片手で持てる。つまり支えがないと、片手で持つことは不可能。もしかすると前世のぼくでもこれを片手で持つことは不可能なんじゃないだろうか。柄が普通の剣より長い気もする。

外見は……なんというかおぞましい。鎧が頭蓋骨と来た。髑髏だ。なにこれホラー？

そしてその髑髏から伸びる背骨の様な柄。

刃は頭蓋骨の口から出てる感じ。

……ていうかこれネクロマンサーじゃん（知らない人はブレイザードライブで調べてね）。

今更気付くだなんて、ぼくは鈍感だなーあはは。笑えねえ。ぼくの記憶力はどうやら最盛期をとっくの昔に追い越したらしい。

後なにか言うことはあるだろうか。森の感想？ そんなの、今のところ「わぎゃー」だの「ぶぎゃー」だの「にゃあああああああ！」みたいな悲鳴が……。え、悲鳴？

上を見上げた。一度太陽の光で目が眩んだ。しかし良く見てみると、空から人間が落ちてくる。え、嘘。マジ？ ないわ。このままじゃぼく踏みつぶされ

「……………あう！！」

踏みつぶされましたね。クリーンヒットです。わたわたと焦った所為もあってか、今ぼく背中をふまれてる状態です。つまるところぼくはうつ伏せに倒れて、降ってきた人はそこに座ってる感じ。

「……………」
「……………」

暫しの沈黙。うつ、早く退いてもらいたい。正直苦しい云々の前に痛い。

「……………あの、退いてもらえませんか？」

「……………」

上の人からの返事は無い。なんで……。不審に思っ、首を頑張っ、て捻っ、て上の人を見る。

外見的特徴は……。なんていうか、あれだね。フエイト一味の一人、良く環と一緒にいるあの獣耳の子。名前は……。なんだっけ？ 忘れちゃった。豹みたいなのに変身して、たし、豹子（仮）と呼ぼう。ていうか吃驚だよ。いきなり原作キャラに踏みつぶされたって言うのか、ぼくは。一つ言っ、て良いかい？ 不幸だ。

「……………あの、退いてもらえませんか？」

さっきよりも大きな声で言っ、た。

けれどやっ、ぱり豹子（仮）からの返事は無い。

「……………」

ていうか、気絶してた。

座っ、たまま、目を回して気絶してた。

気絶していると分かれれば容赦はいら、ない。デフォで使い方知っ、てる魔法、《戦いの旋律》で肉体強化。

今思えばさっきエンカウントしたデカダゴ。魔法の射手で倒せば良かったのではないだ、ろうか。だけど試したこともない魔法を実戦で使っ、つというのはどうなのだ、ろう。

そんな今更なことを考、えながら豹子（仮）を無理矢理、ぼくの上から退かす。退かした際の衝撃で豹子は倒れてしまっ、つ。とりあえず、崖のところに寄り掛かるように置いといた。

「さて、と……。これ、どうしよう」

豹子のことを見ながら考える。

取り敢えず、何故か顔が泥だらけだ。拭いてあげないと。ポケットの中にハンカチがないか、探してみる。

くしゃ。

なんか紙みたいなのがあった。

やつほー。本日二回目の手紙だよ。その大剣がなんなのか正体は分かったよね？ さ、答えて？ 答えないと後三秒後に爆は

「ネクロマンサー」

ギリギリで答えた。

どういう仕掛けか、手紙に書かれている文字が追加されていった。

良くできましたー。ぱちぱちー。あ、今のぱちぱちって言うのは焚火の音じゃないからね

知らねえ。

そのネクロマンサー。実はミスティッカーなんだよね。だからその剣、ステッカーにしたりできるんだ。便利でしょ、褒めて褒めてー。

あんたの性格の変わりようを褒めてやりたいよ。

でね？

堂々とスルーしてんじゃねえ。

そこに置いてあるネクロマンサー、ステッカーに戻しといったから。

そういえば、確かにネクロマンサーがない。どこに行ってしまったのだろうかと首を巡らす。

あ、そうだ。ミスティッカーは自分の身体に貼って力を出現させる。なら、この袖のところか。

制服の袖をめくる。あれ、無い。

もう一度手紙を見る。すると、横に「ステッカーは貴女のきゅーていな胸に貼つといたよん」と書いてあった。一言だけ言わせてください。しね。

ぼくは男だ。身体は女でも男なのだ。そんなぼくに胸にあるステッカーを剥がせというか。どんなエロゲーでもこんな展開ねえよ。だが背に腹はかえられん。ここには今誰もいないではないか。変態だと思われることは、無い。

決心して制服をたくし上げる。なんとなく天空を仰ぎながら、貼ってあるはずのステッカーを探す。……ああ、空が綺麗だ。……おい神様。ふにふにした感触意外、胸に何もねえぞ。

手紙を見た。しかしさっきと内容は変わら……ん？

の下に、もう一つ。凄く小さい文字でなにかが書かれている。

嘘ぴよん 騙された騙されたーきゃはは。さっき貴女が確認した腕の反対側の腕に貼ってあるわよ。

ぼくは手紙をその場に思いつ切り叩きつけた。
なんなんだあのクソ神様^{ヤロー}。ぼくで遊んで楽しいのか。楽しいかそ
うか。

さて、と。今度こそ、腕にミスティッカーがあるかどうか確認。
オーケイ。今度こそ貼ってある。

確認し終わると、手紙が突然光り出した。なんとなく手紙を拾っ
てみた。

なにやら新たな文が書かれていた。

PS この手紙は貴女が触れてから一分後に爆は ドガア
アアアアン！

「……………けほっ」

本日二回目の爆発頂きました、しね。

というかぼくはぼくで学習しろよ。あの神様がこれまでになにを
してきたか分かっているのに…………。ああもう。なんだか無性に苛々し
てきた。

……………おや、手紙を持っていた手に何かを持っている感触。

「……………へえ、あの神様も、なかなかに粋な計らいをしてくれるもん
だね」

そこには真つ白なハンカチがあった。

……………バツとハンカチを広げ、裏表を確認する。

……………オーケイ。なにも書かれてない。よし、とりあえずこの豹子
を背負おう。川がある場所まで、歩くしかない。

数分歩いた先に水の音が聞こえてきた。

また数分歩いていると、やっと森から抜け出せた。崖から落ちてきて、水飛沫を上げている。つまり、滝。なるほど、森から抜け出せたわけではないのか。まあ、そんなご都合主義ないもんね。

「なかなかの絶景かな」

前世でこの様な場所に来たことのないぼくは暫しその光景を堪能していた。だけでもいつまでも見物というわけにもいかない。さっきまで手紙だったハンカチを水に浸す。ちやぽちやぽと二、三回濯ぎ、ぎゅーつと絞る。

それから木に寄り掛からせた豹子の顔を拭いてあげる。女の子がいつまでも泥だらけの顔と言うわけにはいかないでしょ。

「にゃっ……」

ぴくん、と反応した。水が冷たすぎただろうか。そんなことを考えながら豹子を拭いていると、豹子の目が開いた。

「……っ！ 誰！」

「人に疑問を投じるときは疑問符を使おうね」

突然、誰って叫ばれても困る。聞くときには聞くときなりのイントネーションと言うものがあるでしょ。ああいつの、意外と大事だよ。

「わ、私を無視するな！ 貴様は誰だと聞いているんです！」
「それに、空から落ちてきてぼくの上に乗ってきたのは君のほうだよ。言わばぼくは君の命の恩人だ。そんな命の恩人に対して『貴様』とか言うのは感心しないよ。豹子ちゃん」
「ひよ、豹子……？」

あ、しまった。ぼくとしたことが。
ぼくとこの子は初対面 とうい設定 だ。なのに半人半獣だと気付くなんておかしい。

「なんでもないよ。で、君の名前は教えてくれないのかな」
「わ、私は………」
「ん？ 聞こえないよ。もっとちゃんと行ってほしいかな」
「こ、暦です………」
「ああ、暦ちゃんか………」

あー、そうだ。暦ちゃん、そうだったそうだった。時間操作系のアーティファクトだから「暦」って名前なんだよね。

「少し大人しくしててね」
「んにゃ」

顔に付着している泥がまだ取れない。乾いてしまっているのか、簡単に取りそうにない。
仕方がないからもう一度川でハンカチを洗う。ばしゃばしゃと。

「フェイト様………」

後ろで暦ちゃんの声が聞こえた。フェイト……。
後ろを振り向いた。

原作キャラ。ネギの敵。完全なる世界の実質的ナンバーワン。テルティウム。別名フェイト・アーウェルンクス。
フェイトが、無表情に無感情に、ぼくを見ていた。

「……曆ちゃんみたいな可愛い子に様付けで呼ばれてるなんて、少し羨ましいな」

「君、何者だい？ 人間じゃなければ魔族でもない……。本当に、何者なんだい」

……え？

人間じゃなければ魔族でもないだって？ そんなバカな。そんな事実、ぼくは知らない。

ポケットに手を突っ込んだ。

くしゃつと音がした。その手紙を引っ張り出し、読んだ。

やつほー。本日三回目の（以下省略。さてさて、君は今、死神としてそこにいるんだよん。魔族でもなければ人間でもない存在つてね。あ、でも大丈夫。性感帯の感度は高い方に設定してあるから。ちゃんと自慰行為とかでき

くしゃつと丸めて、ぽいつとぼくの背後にある川に捨てた。

直後、ぼくの背後からチュドーン！ と言う爆発音がした。

「
」
「
」
「
」

三者沈黙。

なんか、さっきの爆発音的に威力上がってない？ ちくしょう。

幻聴で神様の「ちっ」とかいう舌打ちが聞こえてきた。

「あー、なんていうか。少しやり直そうか。で、なんだっけ？ ぼくが何者かって？」

「うん。君は本当に分からない。謎だらけだ」

お、空気読んでやり直しに付き合ってくれた。意外とフェイトは良い人なのかもしれない。

……単にぼくが何者なのかを知りたいだけなんだろうけど。

「君にぼくが何者かなんて知る必要性は木っ端微塵もありやしないよ。まあでも、敢えて言うならしがない《魂狩り》ってところかな」
「……………良い魔力を持つてるね」

唐突に、フェイトは話題を変えた。

「……………どうだい？ ぼく達と一緒に来ないかい？ 《完全なる世界》に」

《完全なる世界》か。ロマンスだと思うよ。世界を救う、なんて。

だけどフェイト。君にはそういうの似合わないと思うよ。

「《完全なる世界》がどういうもののかは知らない。けれど、世界を救うみたいな正義感、ぼくにはないんだ。ごめんね」

「……………そうかい、少し残念だ」

それにしても、ここでやっと比較対象ができた。

……ぼくの身長は小学五年生か六年生くらいかな。高学年であることには間違いないね。フェイトよりちょっとだけ高いだけだし。

「けれど、少しだけならついていっても良いよ。ぼくにとって君達の存在はとても好都合だ」

「……利用したいって言うのかい？」

「利用されて、利用して。それが社会の基準であり基本だよ」

高校で習ったことと言えばそれくらいだ。

利用したければ利用されるってね。

ざっざっざっざっざっざ、と歩いていく。フェイトは平然としてるけど、曆ちゃんは完全に警戒してるね。

平然としている方の人を無視。警戒してるとも怯えているとも言える姿の曆ちゃんの前に立つ。

「にゃ、にゃにをする気ですか！」

「少し大人しくしててよ。目に入っちゃおうよ？」

「にゃうう……」

泥を拭っていく。折角の可愛い顔が泥で台無し、なんていうのはこの世で最も許せないことだよ。

さて、やっと泥が取れた。

振り返り、フェイトの方を見る。すぐそこにフェイトの顔があった。

「……顔近い」

「ごめん。だけど、ぼくは君に興味が出てきた。さっきの言葉からして、《完全なる世界》に来てくれるのかな」

「うん、そう言ったはずだよ。君達を利用するってね」

フェイトはにやりと笑った。目が笑ってるフェイトを、ぼくは始めて見た。

フェイトはぼくから距離を少しだけ取って、右手を差し出した。

「歓迎するよ、魂狩り」

その右手を、右手で掴んだ。

「……よろしく、人形」

こうしてぼくは初っ端から敵と利用して利用される立場になってしまった。……これも、神様の狙った通りのストーリーなのだろうか。少し気になった。

ポケットに手を突っ込んだ。

くしゃっ。

「……………」

ポケットの中には、一枚のミスティッカーがあった。『虐殺する者』。

～フェイトside～

曆を迎えに行つて、彼女にあつて、またここに帰つてきた。墓守人の宮殿。ぼくは自室とも言える部屋にこもつて考えていた。謎だった。彼女、「魂狩り」と名乗つた彼女はあまりにも不思議だった。

「魂狩り……………」

どういふことなのだろう。魂を狩るとでも言うのか。それではまるで死神。

コンコンと。ノックをする音が聞こえた。

「…………フェイト、少し相談があるんだ。入つて良いかな？」

彼女だった。謎だらけの彼女。

「入つて良いよ」

許可を出すと、躊躇いがちに部屋の扉が開かれた。

茶髪に頭の頂点にある小さなアホ毛。蒼いカチューシャ。やる気のなさそうな目。それでも良く整つた顔。触れれば消えてしまいうなほほどに細い輪郭。

何故か、学校の指定服の様な服。

「それで、なんだい？」

できるだけ動揺を隠して言った。なにに動揺したのかは…………あまり言いたくない。少しだけ言うなら、ちらりと見えた太腿に、だ…………少しどころか暴露だね、これじゃ。

「少し旅行に行きたいんだ。どうにかしてくれないかな」
「……旅行に？」

旅行って……なんでまた……？

「さっき言ったはずだよ。利用して利用されて……。つまりこれがぼくの目的だよ」

一人称が「ぼく」とは、あまり優雅なものじゃないな。
ぼくには関係のないことだけねど。

「ふう、ん。そういうこと。……一つ条件がある」

「……なにかな」

「名前を、教えてくれないかな」

ぼくはまだ彼女の名前を知らない。「魂狩り」が本当の名前とは考えづらい。

「ぼくの名前……。なんだったかな」

「覚えてないのかい？」

これは正直驚いた。名前を覚えてないだなんて……。さすがに演技じゃないのか、と疑った。

「まあ、適当に今考えるよ」

「それって偽名……」

「なんか言った？」

「いや、なんでもない」

何故か微妙な殺気が流れた。本当になんで……？

「まあ、本当に適当で良いんだけどね。……黒木愛華を名乗るよ」
「……そうか。それじゃあ愛華。まずはここから出してあげないと
ね。浮遊術もできないなんて、未だ信じられないけど」
「うん。ありがと、フェイト」

……初めて彼女の微笑みを見た気がする。

悪くは無いかな。こんな感情。

感情？ ……このぼくが感情だって？ ふざけている……。人形
のぼくが感情なんて持つはずなのに。

希望は悉く達成困難であるべきだ。(後書き)

今回から本気出し過ぎて話しが飛躍しすぎた。

誤字脱字とかはデフォだ。指摘なんかすんな。あ、いや。やっぱり指摘してくださいお願いします。

まあ、まずは麻帆良に行くこと優先にした。その結果がこれだエイサオラエイサー！だったはずんだけど最初に魔法世界で名を売ろうと思うんだエイサオラエイサー！

生きてければ生きればいい。(前書き)

1。最早サブタイと内容がまるで関係ない。だがそれがぼくクオリティ

生きたければ生きればいい。

フェイトに外に出してもらい、旅行用のバッグを背負う。フェイトが十日分の食料やお金を渡してくれた。困ったら戻ってくればいい、とのこと。あの子、本当は優しいんじゃないか？

まあ、そんなことはどうでもいい。原作とフェイトのイメージの差異なんてどうでもいいのだ。

今するべきこと。それは魔法世界で少しでも名を知れ渡らせることだ。

さっきフェイトに言った『黒木愛華』という名前を売り出している。

そんなわけで、フェイトに貰った魔法世界の地図を頼りに歩く。外は既に暗くなり始めていた。

* * *

がやがやと、騒がしい人の声が聞こえてきた。前方を見れば、そこには町がある。いつの間にかこんなところまで来ていたのだろうか。一日くらいの野宿は覚悟していたのだけれど……なんだか拍子抜けだ。まあ、野宿をしないで済むというのならそいつは重畳。宿でも探すことにしよう。

* * *

正直に言おう。一日目の町は最悪だった。

治安が悪すぎる。十歩歩く度に爆発音が聞こえるくらいに。

はあ……不幸だと思う。

とりあえず、誰かに情報を聞こう。宿の場所くらいなら知ってる人もいるだろうし。

「あの、すみません」

適当な人に声を掛ける。

「あ？」

振り向いたのは酷くゴツイ男だった。心の中でだけ思った。
うわ最悪、と。

「なんか用か？」

「あの、こちら辺に宿ってありませんか？」

「なんだ、旅行者か？」

「はい、そうなんです。一日目で、ここに辿りついて……」

「そうか。ならついてきな。俺も泊ってる宿があるんだ」

なんだ、意外と良い人じゃないか。

ざっざっざ、と歩く。町は本当に治安が悪そうだ。店の中からは瓶が割れる音が聞こえてくる。家の中からは女性の叫び声が耳を劈く。こんな治安が悪ければ、恐らく環境も良くないだろう。アスファルトすらない。西部劇に出てきそうな町だった。しかし、人外の者も多い。さすが魔法世界。亜人というものを本当に目にする事ができるなんて、思いもしなかったし思いたくもなかった。

というか、視線がやけに突き刺さる。なんでだろう。やっぱりこ

の服は珍しいのだろうか。

数分、彼の後ろをついて歩いていると、彼が突然立ち止った。

「きやう」

当然、唐突に立ち止まられてもこちらは急ブレーキなんてできない。必然的に彼の背中にぶつかった。透かさず謝罪をし、彼の目の前にある建物を見た。

「……ここは？」

「ついてくる」

「はあ……」

返事とも溜息ともとれる相槌で片づけざるを得ない。なんだろう。とても嫌な予感がしてくる。ひしひしと背中によじ登ってくるように。ぎしぎしと、身体が軋む程に、嫌な予感がした。

* * *

彼が中に入っただけだった建物に入る。そこは、なんていうか……想像してた通りの光景だった。

酒をラツパ飲みしてる亜人達。腕試しと称し腕相撲をしている筋肉だるま。ただ静かにワインを飲んでいるローブを着た人達。

「あの、ここは……？」

訊かずにはいられなかった。

治安が悪いから、予想はしていた。だけど、酒場に泊れなど……。

「この二階が宿泊施設になっているんだ。

……マスター！ 客を一人、連れてきた」

「ごつい男はマスターと呼んだ男のところまで歩いて行ってしまおう。追うべきなのだろうか。マスターは紳士的な笑みを浮かべ、ぼくに微笑みかけてくれた。「どうも」とだけ頭を下げて、男が座ったカウンター席に、同じように腰掛けることにした。

「女の子とは珍しいね。ここは危険だから、早めに出ていった方がいいよ」

「そんなの、見てれば解ります。言われずとも明日の朝には出ていきますよ」

「おやおや、無愛想な女の子だ」

爆発的に放っておいてほしい。それでもぼくは男なのだ。

「精神は肉体に影響される、と聞くが……。これまでにどんなものからも影響を受けてこなかったぼくが、今更自分の体ごとときに影響されるはずもない。恐らくぼくはずっとこのまま一生涯、無愛想な女の子というイメージで突っ走ることになるだろう。」

「おいなんだよ、随分と可愛い子がいるじゃねえか、え？ おいアイン、お前いつからロリコンに目覚めた？」

一人、なんだか騒がしいのが来た。

「傷だらけのバンダナをしている細身の男。顔を赤くしていることからアルコールが入っていることが分かる。」

「どうやらこの常連らしい。そしてこのゴツ男はアインという名

前らしい。ちなみにロリコンに目覚めたらしい。ないわ。

「……俺は客を連れてきただけだ」

「ケツ！ 相変わらず連れねえ野郎だな。おい仔猫ちゃん！ どうだ、一緒に飲まねえか！？」

……予想はしていた。こう、なんていうか。突っ掛かってくる人くらいは、いると思っていた。だけど、身体の密着度が酷い。アルコールの刺激臭からして酒を飲んでいたのだろう。嫌に相手の体温が高い。

「おいおい、あんまり怖がらせるなよ……。それと、未成年の飲酒は、ここでは御法度だぞ」

「ハハツ！ あんたも相変わらず固いねえ」

未成年の飲酒が法律的にダメなのは魔法世界も一緒なのか。まあ、当たり前か。身体に悪いもんね。特に今のぼくは女の子だ。精々大事にしたい。

「それより嬢ちゃん、あんた名前はなんて言うんだい？」

唐突にマスターが言った。

「名前……ですか？」

「ああそうだ。あんたにも名前くらいあんだろ？ ここに泊る奴は例外なくサインすることになってんのさ」

「……そうですか」

ホテルと同じようなものだろうか。まあ、そりゃそうか。

「ほら、名前」

「……黒木です」

「クロキ……珍しい名前だね」

マスターはぼくの名前を、ペンで書いていく。

「クロキか！ 女の子にや似合わん名前だなあ！ どうせなら俺様が名前をつけてやろうか？」

「いえ……良いです」というか放っておいてほしい。

「やっぱり仔猫みたいだからな！ みいちゃんとかどうだ！？ 可愛いだろ！」

話を聞け。

まさかさっきの嫌な予感ってこれ？ だとしたら嫌だな。結構シリアスなの期待してたから。

とりあえず立ち上がり、マスターに部屋の番号が書かれた鍵を貰い二階を目指そうとした。

「お、なんだよみいちゃん」

「誰がみいちゃんですか」

「じゃあクロちゃん」

「……………」

某お笑い芸人三人組で構成されたサーカス団の中の一人を思い出した。

「クロキと呼んでください」

「ちえ、なんだよつまんねーなあ。つてか、もう部屋行くのか？」

「はい。明日は朝早くここを出るつもりなので」

「そっか。まあ、なんだ。この町から出るには少し大変だから、気

をつけるよ」

ばつが悪そうに後ろ髪をぼりぼりと掻きながら言った。どういことだろう。町から出るのは大変？ 詳しく話を聞きたい。

「じゃ、俺もそろそろ部屋に戻っかな。じゃ、マスター。今日の分のお金置いていくぞ」

「おう、さっさと寝る寝る」

あ、待つ。。

「ぐあっ……あ……？」

変な。

感覚が。くらくら。

頭が。五感が。鈍る。

視界が。ちかちか。

思考が、できなくて。

ばたん、と。ぼくは倒れた。

* * *

〜ツルギSide〜

「ぐあっ……あ……？」

後ろから変な声が聞こえた。その後、ばたんと何かが倒れる音。何事かとふりかえった。

「……お、おい。クロキ？」

クロキが倒れていた。

「おいおい、どうしたんだ急に……そんなところで寝たら風邪ひくぞ」

マスター。そんな暢気なこと言ってる場合じゃねえよ。

とりあえずクロキの身体を抱き起こす。顔をのぞき見ると、頬が僅かに赤く染まっていた。

体温が妙に熱い。風邪か？

「……お前のアルコールで酔ったんだろ」

「……おいおい。匂い嗅いだだけで酔うか、普通？」

だが確かに、風邪をひいたにしては息も穏やかだ。つてことはなんだ？ マジで酔ってんのか？

「とりあえず上着だけでも脱がしたらどうだ。熱いだろうからな」

マスターに言われ、とりあえず脱がす。セーターを脱がした後に出てきた服はワイシャツ。これは……。

「……こんな小さい子が着るにしては珍しい服だな」

「あ、ああ。そうだな」

旧世界は日本……日本特有の、学生服。学生であることは分かる

が、身長的なコイツはまだ小学生……。いや、これくらいなら中学生の可能性もあるか。なんでそんな奴がこんな辺境の地に……。旧世界の住人がここに居ることそれ自体が珍しいことだというのに。この世界にもアリアドネーだかなんだかの学校指定服の着用がルールとなってる学校があるが……。まあ、ここにいる奴等はワイシヤツと言えはれつきとした社会人が着る物というイメージだ。珍しいと思っても仕方がない。

「おいアイン。手伝ってくれよ」

「運ぶのくらい、ツルギ……。お前一人で十分だろ」

相変わらず毅然とした態度で酒を頼張るアイン。自分が連れてきた客を他の客に任せるだとう？ まあ、コイツ自身もこの客な訳なんだがな……。

なんとかクロキを部屋に入れた。鍵はこいつが持ってたしな。

ベッドに寝かせてから布団を掛ける。もそもそと身体を動かし、寝がえりを打った。本当に酔ってるだけなのか？

まあ、それは明日になれば分かることだろう。

「ふあああ……」

酷く眠い。どうやら、酒を飲み過ぎたらしい。俺は早々にその場を後にし、自分の部屋に戻っていった。

* * *

クロキSide

「う、……うう?」

ちゅんちゅんと聞こえてくる小鳥の囁りが目覚ましとなった。

いつの間に寝ていたのだろう。上体を起こす。ここは……部屋?

だが残念。ぼくはこんな部屋に入った記憶は無い。もしかして酒場で眠ってしまったのだろうか。ダメだ。思い出せない。というか、頭がくらくらする……。

そういえば、入浴はどうするべきだろう。排便排尿は別に大丈夫だろ。座つてすれば良いということくらいぼくも知ってる。だが入浴は……。ダメだ、不可抗力にでも自分の体を見ってしまう。自分の身体を見て興奮するとは思えないが、だがそれでもやっぱり男としてどうかと思う。主に社会的な意味で。

「……でもなんかアルコール臭い」

そればかり気になる。これはかなり重大な問題だ。ぼくは酒を飲んだことがない、と言えば嘘になる。一度だけ興味本心で飲んでみたことがあったのだ。だが一口飲んだ後の記憶が一切ない。ただ、思考ができないという感覚を残して……。

……ああ、もしかしてぼく、酔ってたのか?

でも酒を飲んだ記憶は一切ない。ただあの細身の男に話を聞こうとして……。

その時、こんこんという音が聞こえた。

「おい、起きてるか? 起きてるなら開けてくれ」

「……今開けます」

聞いたことがある様な無い様な……。なんだか曖昧な声だった。

誰だろう、と警戒しながら部屋のドアを開ける。

「……………」

「よっ、どうやら酔いは収まったようだな」

「残念ながら未だに頭がくらくらしです」

「ハハハ、そうかそうか。にしてもお前弱いなあ。少し臭いを嗅いだけで気絶しちまうなんてよ」

……………。

ああ、なんとなく把握した。ぼくは酒の臭いを嗅いだけで酔って気絶したのか。

そして思い出した。この人は昨日の騒がしい人だ。そういえば名前聞いてなかった。

「あの、貴方の名前は」

「それより、お前に客だぜ」

「……客、ですか？」

果て、ぼくはこの世界に来てからまだ一日も経っていない。ぼくの知り合いと言えば……フェイト？

「今行きますよ」

「おう、店の外で待ってるから早く行ってやれ。あんな可愛い子を待たせるなよ」

可愛い子？

フェイトが？ 確かに、男性としては可愛い方かもしれないが…

……。まあ、いい。とりあえず行こう。

着替えは無いからこのままだね。

マスターに洗面台を借りて顔を洗う。

……眼は覚めた。そういえば、ネクロマンサーは原作通りの性能なのだろうか。魂だけを斬り、喰らう大剣。まあ、どうせその内神様が教えてくれるだろ。ネクロマンサーの詳細が分かるまで無駄に戦闘とかはしない方が良さだろう。いや、戦闘をしないで済むならそれが一番いい。まあ、あの神様のことだ。どうせぼくを巻き込む方向に進むように世界を改変するのだろうけれど。

そんなことを考えて気が滅入った。とりあえず、後でポケットの中身を見よう。今は見ない方が良さ。今見たら店の中で手紙が爆発することになるから。

「残念ながららくお待たせしましたクロキです」

「あ、えつと……愛華さん！」

「……ん？」

えつと……この黒い髪のショートカットでまだ幼い感じの子は……確か曆ちゃん、だよな。ダメだな。最近記憶力が本当に無くなってきた。酒のせいかな。

「なんで私の了解なく旅行なんかに行っちゃうんですかー！」

ええ。なに。まさかあの墓守人の宮殿から出るには曆ちゃん了解が必要だったのか。それは迂闊だった。もしかして原作にも書いてあったかな？ ううーん……。

「と、とにかく戻ってきてください！ まだなにもお話してないじゃないですかー！」

「そんなこと言われても……」

ぼりぼりと後頭部を搔く。

こんなとき、どうすればいいのかぼくは知らない。こんなことなら前世でももつと幼稚園児くらいの子とかと遊んでおくんだった。最も、そんなことは今更すぎることなのだけれど。

「お話なんて、どこでもできるでしょ。ほら、中に入って」

「え？」

「ほら、いいからいいから」

「にやあああ!？」

半分強制、半分無理矢理に曆ちゃんの手を引っ張って店の中に入れた。

酒場に入った瞬間にまた注目された。どうやら夜通しずっと飲んでいたらしく、昨晚までのメンバーと変わっていなかった。いや、ぼくの記憶力なんて宛てにならないけど。

とりあえず、とカウンター席に座る。マスターに水を二杯頼んだ。水は無料だから、幾つでも頼める。

それから朝ごはんになる簡単なものを作ってくれと頼んだ。

「それで、曆ちゃん。ぼくになにかお話があったのかな」

「ふえ……。う、ううん……」

……考えてなかったのか。

しかし曆ちゃんが腕を組んで「うんうん」と悩んでる姿は可愛らしい。少し眼福。当分眺めていようと思う。異論や議論、反論は認めないし異議も一切認めない。

「ほらよ、朝ごはん」

そう言って置かれたのが納豆だった。キレても良い？

「……………」

「あれ、なんだ。反応悪いな。あはは、まあこれは軽い冗談だ。ツルギの奴がお前は旧世界の日本人だって、さっき言ってたからよ。日本らしい物を用意してみたんだが……………」

いや、確かに納豆と言えば日本特有の『日本人でも苦手な人が多い食べ物』のだけど……………。まあぼくは納豆が好きな方だ。だから致し方なしと納豆が入ってる茶碗を手を取った。ていうか、ツルギって…………。誰。そしてなんでぼくが日本人だと知っている。

「なんだ、食うのか？ それだけじゃあ腹減るだろ。ツナ喰うか？」
いろいろおかしいだと突っ込みたい。

ツナと納豆の組み合わせっておいしいのかい？ 残念ながらぼくは試したことが無い。

ぼくは危険な綱渡りはしない主義だ。だからツナは断った。とりあえずお茶碗の中の納豆を、何故か用意されていた箸でかき混ぜる。

「…………。愛華さんは旧世界出身なんですか？」

ぼくが納豆をかき混ぜてるのを不思議そうに見ながら、曆ちゃんは訊いてきた。納豆の事を訊けばいいのに。

「…………。どうなんだろうね。精神的に旧世界は島国日本出身なんだけど、身体的には魔法世界出身なんだよね」

マスターが「なんだそりゃ」とか言ってるけど気にしない。
事実だ。変えようもない現実。あの神様の所為で作られたどうし
よもない真実なのだ。

「てかなんだよクロキ。アイカって可愛らしい名前があるんじゃないか」

「……クロキって呼んでくれると嬉しいかな……。自分で名乗って
おいてアレだけど、少し恥ずかしんだ、その名前」
「そりゃ勿体ねえってもんだぜ、嬢ちゃん」

だからぼくは男……。まあいいか。こんなこと言っても頭がイカ
したと言われてお終いか、主に社会的に抹殺される可能性が高い。

「日本と言うのはどういうところなんですか？」

「……良い国、とは言えなくなってるね。昔は誇れるものがあつた
けど、今の日本は腐れ切ってる。少なくともぼくがいた時代は、政
治家も民度も経済も、最悪だった」

「そうなんですか……」

「まあ、唯一誇れる所と言えば、歴史かな。その歴史も、某国に盗
まれそうなんだけど」

「愛華さんの国の歴史を盗もつと考えるなんて許せませんその国を
教えてください」

「韓……いや待て、何をする気だ」

「潰してきます」

「やめときなさい。そういうことしちゃダメだよ。めっ」

子供を叱る様に言ってみただけど、自分が言ってると思うとこれキ
モいな。「めっ！」が許されるのは母性に溢れた女性だけというこ
とか。

それからはなにがどう流れたのか、「愛華さんが持つ力はどんな

力なんですか」とか聞かれた。なんで聞いてきたのか正直分からな
い。この子の前でなにか魔法を使用したわけでもないし、ましてや
ネクロマンサーは見せていないはずだ。

「だってフェイト様が気に入ったんですよ？ なにか特殊な力とか、
凄い思想の持ち主とか、戦争孤児とかじゃないと、フェイト様あな
たのこと拾ってません」

ふむ。なるほど。

「実はぼく、死神なんだ」

なにかしらの力というのではないが事実を言ってみた。
ていうか死神なんて種族、この世界にはあるのだろうか。

「頭が良い馬鹿ってというのはこういうことを言うのでしょうか」

なんだろう。今さり気無く馬鹿にされた。

「はあ……。実問題、ぼくも分からないんだ。フェイトがぼくのど
こに興味を湧いたのか。さっぱりなんだ」

これも事実だ。

フェイトには死神だということを言っていない。ていうか、死神つ
てどうという種族なのよ。

「そうですか……」

何故か落ち込んでいるご様子。

……本当なんで落ち込んでるの。

「強いて力を言うなら、これかな」

そう言ってワイシャツの袖を捲る。
腕に貼られた一枚のミスティッカー。

「なんですか、それ？」

「ミスティッカー。術者の精神力を使用して出現させる武器だね。精神力って言うのは、この世界だと魔力だったかな」

確かそうだったはずだ。だから魔力を失うことは精神力を失うという事に等しい、らしい。

「それが愛華さんの……？」

「そう。恐らく切り札だね。と言ってもジョーカーというわけでもないよ？ カードが少ないからね、今は。とりあえず、魂喰らう魔剣と覚えておくといいよ」

納豆を混ぜ終えた。

十分ねばねばになったと思う。

糸を引いてる納豆を思いつ切り頬張る。

「おいおい、なんだよそりゃあ。《魂喰らう魔剣》たあ随分と物騒だな。……というか、もうちょっと綺麗に喰えよ」

「ぼくも、正直びっくりですよ。こんな剣、ぼくの手に残りに余って零れ落ちてしまいます。……納豆を勝手に持ってきたの貴方ですよ。なら、食べ方はぼくの勝手です」

「なんですか、その理屈。子供っぽいであっつ！」

なんかまた馬鹿にされそうだったから曆ちゃんの頭を軽く叩いと

いた。

さて、と。今日の朝にこの町を出る予定だったんだけど……暦ちやんが着たおかげで予定が伸びた。ちなみに暦ちやんはなにやらぼくと話して満足してしまったらしく、フェイトの所に帰っていった。なんだったんだらう。

すっかり太陽は真上に上ってしまった。

「それじゃあツルギさん、アインさん、マスター。お世話になりました」

「……………」

「……………」

「……………」

え、なんで無言？

あまりにも空気が重すぎるんだけど。

「……………クロキ」

この重い空気の中、アインさんがやっと口を開いた。

「ここを出ていくのは良い。だが、出ていく際には気をつける。誰かに見つかるのは好ましくないぞ」

「はあ……………そうですね」

良く分からないヒントを貰った。本当に良く分からない。なんなのだらう。町を出ていく際には気をつけるって……………。

……………この時に気付くべきだったかもしれない。アインさんは、必要以上のことを喋らない。つまり、これは超重要なことだった、ということだ。

* * *

Side Out

「クロキ、大丈夫かね」

「大丈夫じゃない。さっきから町の喧騒がどっかに消えた。恐らく……」

「早速って感じだな」

ツルギとアインはカウンター席に座って、マスターはコップを拭く。

重い沈黙が続いていた。いつもなら客でいっぱいだろうはずの店
はがらりとしていて、三人以外誰ひとりとしていない。

「……どうする」

「どうするもなにも、なあツルギ」

「とりあえず、《観戦》くらいはしようぜ。さすがにあいつらも女の子相手に殺そうだなんてしねえだろうからよ」

そうしてツルギは立ちあがり店の出口へと向かう。それにつられる様にアインも立ちあがり、歩き始める。マスターは拭いていたコップを置いてから、二人を同じように歩きだす。

運命の歯車はぎしぎしと嫌な音を立てて
軋む。

狂い踊る。

まるで一つの歯車が壊れた様に、狂い回り、

全てはこれから

《魂狩り》
ネクロマンサー

《『魂喰』クロキ》

《『虐殺する者』》
ジエノサイド

《『黒の断罪者』》
ブラックジャックジメント

物語は紡がれる。

握るは大剣。

巡るは輪廻。

狂うは運命。

生きたければ生きればいい。(後書き)

最後の文とか厨二病丸出しやないか。

まあ、ぼくの趣味だから気にしないで。

ちなみにこれあれね、原作開始十年前くらい。

魂喰らう罰體。嘲笑うは罰體。(前書き)

どくろじゃないよ。されこつべだよ。

魂喰らう鬮。嘲笑うは鬮。

なんなのだろう。この状況は。

少し町の観光をしてから、町を出ようとした。ここまでは良いのだ。だが……。町を出ようとしたところで足止めを食らった。

なんでも、ここを出るにはこの町で一番強い人に勝たなくちゃいけないとか何とか。ないわー。ていうか、どんなルールですかと問い質したい。

「残念だが、俺様はかなり強え。女子供だろうが容赦はねえ。ぶっ潰して終わりだ」

そう言いながら、杖をぼくに向ける。

その筋肉にはどういった意図があるのでしょうか。魔法剣士なのか魔法使いなのか、スタイルが分からない奴だった。黒のロングコートを来て剣をぶら下げて杖を持っている。剣士なのか魔法使いなのか、本当に分からない。

「あの、なんですか。行事かなにかですか。残念ですがぼくは急いでるんです、退いてください」

「おいなんだよ、逃げんのか!」「やれよ!」「女の言うことなんか知らねえ、さっさと殺つちまえ!」

いや、殺つちまえって……。

忘れていた。ここは無法地帯で治安が悪いのだ。ああ、不幸だ。なんでこんな町に寝泊まりなんてしちゃったんだろう。いや、そも

そもなんでこんな町に入ってしまったんだろう。

「はあ……分かりました。分かりました分かりました。……殺つちまえ、と言いましたね。つまりこれは手加減なしでもオーケー。貴方を殺しても、別に良いわけですね」

両手を広げて不敵に笑って見せる。

あ、そういえば上着忘れてた。……ワイシャツだけでも不便はないか。冬は寒そうだけど。ミニスルな地点で既に寒いからどうでもいい。

「ハッ！ 笑止！ 嬢ちゃん、馬鹿にしてつと死んじやうぜ？ 俺様はここで何人も男を殺してきた。女つてのは初めてでよ、手加減なんてできねえ。オツケイ？」

ノー、と答えないここは。

しかしぼくも喧嘩を売ったことに変わりはない。ほら、某ゲームの主人公も言つてたでしょ。

「売られたもんは買うまでだ」

つてね。

ワイシャツを捲る。左腕に貼られたミスティッカー。髑髏から両刃の剣が生えている、奇妙なデザインのステッカーを、指先でなぞった。

「へっ、女のくせに生意気……だ……。あ？ なんだ、それは……」

さっきまで騒がしかった場が静まった。

さっきまでの騒音が、喧騒が、まるで嘘だった様に。

「これがなんなのか。なんてことは木っ端微塵にどうでもいいことだよ」

そう言いつつ、ぼくは手に持ったそれを逆手に構えた。《戦いの旋律》のおかげか、今回は片手で持つこともできた。

「さあ起きて、ネクロマンサー。食事の時間だよ」

鎧よろいには着いてる髑髏むすぶの口が、がばりと開いた。

ばんっつっ！

大きな爆発音ともとれる程の音が鳴った。正体はぼくの今の脚力の賜物だ。

地面を蹴った際、とんでもない土煙と共に瞬間移動めいた動きをしたのだ。ぼく自身が……神様、ぼくの身体になんかした？

「うお!?!」

だが今回ばかりは好都合。逆手に持ったネクロマンサーを相手の腹に深々と斬りかかろうとする。

「ちいっ!」

「……………」

さすが、自分で強いと言っただけはあるらしい。素人の剣の動きく
らいならかわせるらしい。と言っても、ぼくの剣は相手の腹を少し
かすめたのだけだ。

むう…………。あ、そうだ。この人には少し実験台になってもらおう。
始動キーは…………まあ、適当でいいでしょ。

「ヘル・ベルグ ジャス・テイル キルスキル えーっと…………闇の
精霊二十九柱 集い来たりて敵を討て…………《魔法の射手 連弾・闇
の二十九矢》！」

ぼくの周囲に二十九本の黒い弾丸が待機される。剣を持っていな
い方の手を上から敵に向けて振りかざすと同時に謎の黒い弾丸は一
斉射出された。ていうかこんな簡単にできていいのだろうか。もし
かして神様が特別に訓練なしに魔法の精度を高めてくれたのかもし
れない。

「くっそ…………！」

魔法の盾あたりで防がれるかと思っただが、どうやら直撃したよう
だ。ぼくは一気に距離を詰めることに専念する。さっきの様な瞬動
もどきは正直加減が分からない。それに、普通に走ったほうが楽だ。
逆手に持っていたネクロマンサーを普通に持ち直し、振り上げる。
黒い弾丸が着弾した時に巻きあがった砂煙で相手の姿は見えないが、
まあ、運が良ければ両断は可能だ。振り上げたネクロマンサーを思
いつ切り振り下げる。

斬、と何か斬れる感触がした。だけど、人を斬る感覚とは全然
違う。これは布だ。ということは、外したか。

砂煙が晴れていった。

そこには怯える様な目でぼくを見る自称最強の男。その男の来ていたロングコートが、少しだけ切れていた。

「くっ……まだだ！」

男は諦める気はないらしく、瞬動で距離を取り、詠唱を始めた。

「《魔法の射手 砂の三矢》！」

出が早い三までに数を絞ってきたか。それに砂だから、目くらましにもなると踏んだのだろう。

なら、こちらも早急に手を打とう。砂の矢に追尾機能は無い、はずだ。ならばこのままかわしながら突き進んでいけば良いだけだ。更に相手は魔法を放った所為で技後硬直状態になっている。

「ふっ！」

足に力を入れ、短く息を吐きながら地面を蹴った。瞬動めいた動き。少し酔いそう……。

しかしこの場合酔っている場合などではない。死ぬ可能性もあるのだ。死が恐怖かと訊かれれば否と答えるが、それでも痛いのが恐怖かと訊かれれば肯定せざるを得ない。

そういえば、いつの間にか喧騒が復活していた。

正直鬱陶しい。今は集中して相手を殺すべきだというのに、集中させてくれない。

瞬動はある意味で失敗だった。相手の懐で止まりそのまま斬る予

定だったのだが、男の背後にまで進んでしまった。だがある意味、これでも成功と言えよう。

身体を捻り、大剣を刺突に構える。

そのまま男の心臓目掛けて、穿った。

勘かなにかが働いたのか、男はかわした。ギリギリだったが、かわした。

かわしたついでに男は身体を捻ってこっちを向こうとするが、無茶な体勢だったからか、地面に尻もちをついてしまった。男の目の前の地面に、大剣をぶっ刺した。

本当は男目掛けて刺したはずだったが、これも勘なのだろう。男が後ずさることでもそれをかわした。

「な、なな……殺す気か、テメエ！」

「うん。その気だよ。……そっちが吹っ掛けてきたんだもの、殺される覚悟くらいあったよね？」

なるべく無表情無感情で答える。向こうにぼくがどんな人なのか、その実質を気取られるのは正直好ましくない。性格は戦闘にも出るのだ。

地面に突き刺さってしまったネクロマンサーを引き抜く。

「ひいっ！」と自称強者は驚き戦く。

「安心しなよ。そっちに殺る気がないなら、ぼくにも貴方を殺る理由がないんだから」

ネクロマンサーを肩に担いで外に出ようとした。町の出口。その向こう側はまた森が続いていた。気が滅入る……。だがしかし、神様から手紙を貰うのは人気のない所が一番だ。ある意味都合とと言えるだろう。

……そういえば、さっきまであんなに騒いでいた人達が随分と静かになっていた。

まあ、そりやそうか。こんな不気味な武器を十一歳だか十二歳くらいの子が持っている。それはきつと客観的に見れば恐怖の対象でしかないのだから。

「おい、クロキ」

そんな沈黙が続く中。一人の男性の声が聞こえた。聞き慣れたとまではいかないけど、恐らくこの町に来てから一番聞いた声だ。それが知らない声なら、足を止めずに歩き続けたんだけどね。

肩に担いだネクロマンサーを解除。漆黒の大剣は虚空に消える。

「テメエ、本当に町から出てくのか？」

意外な質問だった。

本当に以外だった。

ここにきてまだ一日も経ってないばかりに言うセリフがそれなのだろうか。ああ、一日も経ってないから観光でもさせたいのだろうか。ボクが知る限りの彼の性格からして、恐らくそうなのだろう。

だけど、いつまでもここで足止めを喰らう訳にはいかない。町を出て、早く違う町に行きたい。

「ええ、出ていきますよ。……ツルギさん」

ふりかえると、傷だらけのバンダナをした細身の男。

どこから持ってきたのか、両手に青龍刀の様な刀を持っていた。

それがなにを示すのかはあまり知りたくない。ぼくを殺しに来た、なんてことは、絶対勘弁御免被る。

「なあ、なんていうかよ……もうちょっとここにいねえか？」

後頭部をポリポリと掻きながら、そんなことを言ってきた。

「……アインさんじゃなくて、貴方の方じゃないですか」

「あ？ 何がだよ」

「ロリコンに目覚めたのって」

「なっ！？ 違ええよ！ そういうんじゃないでな……ああもう、なんて言えば良いんだ！」

頭をがりがりと掻き始めた。どうしたのだろう。そんなに頭を掻いてると禿げてしまう……。

しかし何故だろう。ここにいないかと言われて、少しだけ心が揺らいだ。いや、ぼくにそっちの気はない。全然、全く、一切、これっぽっちもない。同性愛者になる気もない。

……今のぼくは一応女だからこんなことを言うのもおかしいものだけ。

「お、俺もここにいてほしいかもしんねえ！」

そう言ったのは誰だったのだろう。ただ、少しだけ聞き覚えがあった。恐らくあの酒場にいた人なのだろう。野次馬に加わってないで助けてほしかったかな……。

その男の一言がきっかけになって、町が一気に騒がしくなった。

「剣の使い方教えてくれよ！」とか言われても困る。ぼくはこの剣を握ってまだ一日も経っていない。

「俺の師匠になってくれよ！」とか言われても正直困る。本格的に魔法を使ったのは遂さっきなのだ。

「酒場で一緒に飲もうぜ！」とか言われても本当に困る。ぼくは未成年だ。精神的にも身体的にも。

「セックスしようぜ！」黙れロリコン。後でこの声の主を見つけてズタズタにしておこう。

とまあ、最後に聞き取れた声以外は、何故か心が温まる言葉だった。まるでぼくを受け入れてくれている様な。でもなんで？ ぼくは今ここでこの男を殺そうとして……。

「ちっ！」

さっきまで腰を抜かしていたのだろう男は突然立ち上がり、町の出口へと向かってしまった。

どういうことなのだ、これは？

「ハハ、そうか。テメエ、まだ言ってなかったな。ここで生きて負けた奴が、ここを出ていくって決まりなんだよ。戦闘好き共の堪り場だからな、ここは。でもこの奴等大抵負けず嫌いだからよ。出ていこうとしねえんだよ。だが出ていこうとする奴等は絶対にこの一番と戦わなくちゃならんって訳さ」

……なんだとう？

「テメエみたいに間違っに入って来ちまった奴等とかは、そりゃあ災難だったさ。あのギャング、並の奴等よりは強かったからな。そこにお前が来た。これにてお前はここのナンバーワンだ」

つまりぼくはこの町から出ていけないと？

「exactly」

ウィンクしながらツルギは言う。正直似合わない。
ていうか、なにをそんな嬉しそうに言っているのだ。ぼくの災難
がそんなに楽しいかそうか。あんたが持つてるその青龍刀をへし折
ってやるうか。

「うお、なに怒ってんだよ……」

「別に、怒ってません」

「怒ってんだろ。額に皺が寄ってて可愛い顔が台無しだ……」

うっさい！

そう叫びたい。はあ……ないわー……。

折角長旅を予定していたのに……。できれば旧世界はイタリアあ
たりに飛びたかったのに……。イタリア、結構憧れだったんだよ。

だというのに旧世界に行くことすら叶わない。ああ、ぼくって不
幸……。

翌日の昼。

マスターに頼んで、部屋全般をぼくの家にしてもらった。と言っ
ても、ぼくが好き勝手していいのは部屋だけだ。当たり前だ。店全
体をぼくの趣味に染める気は毛頭無いが、部屋を好き勝手しろと言
われればぼくはそれに従うしかないわけで。

「はあ……」

ベッドの上で足をバタバタさせてるわけで。

これは前世からの癖だ。気付けばいつの間にかやってしまったている。悩んでる時によく出る癖。止めても無意識のうちにまた足をバタバタさせてしまうので、本当に仕方がないのだ。それに、今は身体的に女。足をバタバタさせててもきつと気色悪いことはないはずだ。

ちなみに部屋全般がぼくの部屋と言ったが、さすがにその全てを全てぼくが使うには多すぎる。確か全部で二十部屋だったはずだ。二階三階が宿泊フロアとなっている。マスターの家計を支えるためにもその宿泊システムは継続することにした。しかし大家さんはぼく。ぼくにお金を払ってくれば、それで良い。マスターとぼくでそのお金を分けることになっている。マスターには少し悪いかと思っただけど、マスターはマスターで「住人が増えて嬉しいよ」と言ってくれた。マスター、実は聖人なんじゃないだろうか。

風呂とお手洗いは共同。ここは男が多いから、そういうのを気にしないらしい。ぼくは一応女ってことになってるけど……まあ大丈夫だろ。

そして誠に残念なことこここのナンバーワンになってしまったぼくは今とても寂しいことをしていた。

「なあネクロマンサー。ぼくはどうすればいいと思うー？」

一人ステッカーに向かって話しかける。人形ならまだしもステッカーだ。それも奇妙で不気味なデザインの。端から見ればぼくはどう映るのだろうか。

しかし今のぼくは結構真面目。真面目も真面目、大真面目なのだ。ステッカーに話しかけてしまう程に切羽詰まった状況。

「……どうすれば旅行とか行けるんだろう……」

「このナンバーワンになってしまった以上、ぼくがこの地位にいる以上、半永久的にぼくはこの町に留まることになる。うづくん……。あ、そうだ。」

一階の酒場に下りる。ここは昨日と変わらず、かなり騒がしい。カウンター席にいる、昨日からずっと飲んでいるらしいツルギさんの横に座る。

「お、なんだ？ 部屋にずっと籠ってるから心配してたんだぜ？」
「だったらもつと心配してる風に言ってくれ。」

「んで、なんだよ。飲みに来たわけじゃあねえだろ？」
「ええ、ちよっとお話がありました……」

「ちよつと、ぼくを負かしてくれませんか」

ツルギとぼくの間で、沈黙が流れた。
ツルギはぼくの眼をじーっと見つめたまま、何故か固まっている。

「それは……」

なんの前触れもなく、固まったままの状態でツルギは口を開いた。

「それは一体どういうことだ？」
「どういふこともなにも、そのままの意味ですよ。昨日、あの男と戦ったところで、ぼくに勝ってください」

「嫌だ」

なんか即答された。いや、即答とは言わないのかな、これ。

「は？　なんでですか。貴方このナンバーワンになれるんですよ、良いじゃないですか」

「別に、俺はここが一番に成りたいわけじゃあねえんだよ」

「でも、でもですよ？　簡単な話じゃないですか、ぼくを負かすくらい」

「お前を負かす理由が分からない」

むう……意外と頑固。

ぼくを負かす理由か……。

「理由は、ぼくがここから出られないからです。お金ならなるだけ出しますよ？」

「金じゃねえ。俺はテメエが欲しいんだよー！」

「うあ！？」

突然に抱きつかれた。ちょ、酒臭い！　ていうか熱い！　離れろ
ロリコン！

はあ……。ダメか、これ以上は無理だ。ならマスターは……。
マスターの方を見たけど、首を振るだけでなにも言ってくれなかった。

……脅迫と言う手を使ってみようか。

「起きて、ネクロマンサー」

ワイシャツの袖を捲って、ステッカーをなぞってネクロマンサー
を出現させる。

「うお！ 吃驚した……」

「ネクロマンサーに喰べられなくなければぼくを負かしなさい」

「……ノーと答えたら？」

「もちろん……」

ぼくの言葉を継ぐように、ネクロマンサーは笑う様に口を動かして、歯をガチガチと言わせる。

一種のホラーだ。髑髏が動くとか、それこそB級ホラー映画のメジャーなのではないだろうか。

「怖いから止めてくれない……？」

「貴方がイエスと言ってくれるなら止めさせましょう」

「そもそも、そもそもよおクロキ。テメエ、なんか勘違いしてねえか？」

「……え？」

勘違い？ 一体なにを。

「今この町のトップはテメエなんだぜ？ トップなんだから、この町のルールを変えりゃあ良いんだよ」

……。

「逆転の発想……！？」

「そういうところが可愛いな〜！」

「ちょ、くつつかないでください……」

酒が入ってるからか、随分と密着してくる。しかも普通に「可愛い」とか恥ずかしいことを普通に言ってくる。いや、ぼくは男だから

ら、「可愛い」とか言われても嬉しくない。

ていうか、鏡で自分の姿見てみたけど、普通すぎる。ていうか、ぼくっていつもあんな眼してたのか。少々ショックだった。

「うん、そうか。ルール改正。この手があったか」

「そもそもトップは出入り自由だしな」

「それを先に言え！」

はあ……。なんだ。結局こんなうじうじ悩むことはなかったのか。だけどもあ、一ヶ月くらいは留まるうか。ツルギさんが煩そうだし。

魂喰らう罽。 嘲笑うは罽。 (後書き)

なんだか随分と適当になってしまったー。

まあ、いいか。とりあえず、適当に話は進めていきます。

完璧俺の趣味に走らせていただきますけどね。

ちなみにツルギがクロキを引きとめた時に刀を持っていたのは「クロキが負けそうだったら助けてやろう」って「」からですよ。

プロフィール『クロキ』

《クロキ》

名：黒木愛華

髪：茶髪。カチューシャ。てっぺんに小さなアホ毛。

眼：死んだ魚の様な眼、とまではいかないが、いつも半眼の状態である気が無さそう。瞳の色は鮮やかな赤。

身長：本来の姿は小学五年～六年。しかし死神の『誘惑』という特性から、幼稚園生～成人までの身長にすることが可能。

性格：やる気なし。ちょっとした放任主義だけでも結構世話好き(?)。感情移入が苦手で、偶に毒を吐く。教科書に書かれている様な正義を振りかざす人が大嫌い。微妙に鈍感な部分がある。

好きなもの：甘い物、辛い物全般的。ネクロマンサー(?)。子供。悪の大魔法使い。

嫌いなもの：酸っぱい物(というか謎のアレルギー症状でくしゃみが止まらなくなる。一部酸っぱい物はなぜか大丈夫(?)感じ)。無駄に正義感強い人。見透かされた様なことを言われること。喧騒。

能力：ブレイザー(ミスティッカー)。対象にステッカーを貼りそのステッカーを指先でなぞることでエネルギーを放出させる。それ

がミスティッカー。ブレイザーとはそのミスティッカーを身体に貼り力を発現させる者のことをいう。ブレイザーじゃない人の身体に貼ると死んでしまう可能性が高い（そのミスティッカーの力が大きければ大きいほど可能性は上がっていく）。

《使用ミスティッカー》

ARMS MYSTICKER：ネクロマンサー。

原作と違い、魂だけを斬ることは不可能。しかし魂ある者を斬る度にネクロマンサーはその魂を喰らい、能力を格段に上げていくため、一種の魔剣となっている。

巨大な両刃が髑髏の口から生えていて、その髑髏から背骨のように生える柄。それらのデザインは面妖、奇妙、不気味等の感想を持つこと間違いなし。

原作『ブレイザードライブ』でのネクロマンサーの能力は悪しき魂を喰らい払う漆黒の大剣である。

LEGEND MYSTICKER：黒龍紋

ネクロマンサーの専用ミスティッカー。レジェンド闇属性の武器（この場合ネクロマンサー）に魂を破壊する黒き炎を纏わせる。その威力は絶大。大抵の魂は一撃で粉碎される。

しかし長時間の使用は武器の寿命と共に術者の魂をも喰らうため、使用時は時間への注意が必要である。

EXTRA MYSTICKER：ジエノサイド

ネクロマンサーに貼り重ねることで本領発揮。ネクロマンサーに刃節が生まれ、伸縮自在の遠距離攻撃や防御に強くなる。

ゲーム『ブレイザードライブ』では、相手の両腕の一番上に貼ってあるミスティッカーを破壊するという非常に強力な能力を持っているが故、これを愛用する人は嫌われる（らしい）。

本作ではミスティッカーの代わり、『魔力破壊能力』を付与します。魔力で構成された物は『破壊』或いはスルーできるということで、魔法無効化と似て完全に非なる能力です。

プロフィール『クロキ』（後書き）

ミスティッカーとかブレイザーの説明はこれでいいのだろうか。

神様、願いを聞いてくれますか。

この町に留まっただけから数日経った。

どうも神様からの手紙が来ない。少し寂しい。

このネクロマンサーの取扱説明書をよこしてほしい。あと死神についても教えてほしい。

とりあえず、町から出ていいことがわかったのだから、今日は少し出掛けようと思う。

* * *

と、いうわけで今日は町を囲む森の中に来ている。このまま逃げる手もあるけど、ツルギさんが追って来そうで怖いから止めておく。森の中は相変わらず、どんな喉をしていけばこんな声がでるのだろうと疑問に思ってしまう。鳴き声が鼓膜を揺らす。

「……お、手紙かな」

空を眺めていると一枚の紙がひらひらと落ちてきた。すかさずキヤッチ。折られたまかれた紙を開いて、書かれた文を読んだ。

残念。ハズレだよ

「はっ。」

……なんだ。この内容は。
なにやっつてんだ神様、と言おうとしてもう一度空を仰いだ。

「え……」

空には雪の如く、折りたたまれた紙が大量に降ってきていた。
いらつとした。一言だけ言って良いかい？ しね神様。

「はあ……面倒だなあ」

そう言いながらも、降ってきた手紙の中から本命の手紙を探して
いく。

今とても暇なぼくからすれば、これもまた一興なのだ。

一時間後。

「はあ……はあ……」

ぼくは恍惚の表情で木に寄りかかっていた。

「やっと、見つかった……！」

手紙を両手で大事に持つ。それから書いてある文を読んだ。

まるでラブレターを貰った中学生みたいな顔だね。

あんたのせいだよ。

まあいいけど。

流すんじゃない。

それじゃ、君が知りたかったことを教えるよ。まずネクロマンサーね。その『魂だけを斬る』っていう機能はないから。斬る時は相手の命を完璧に削ることを意味するから気をつけて。それから『死神』のことだけど……

説明は意外と真剣で、長かった。本当に意外だった。

しかし最後の一文を読んでばくはその紙を地面に思いつ切り叩きつけた。

ところでところで、君は自慰行為とかしないの？ 女の子って男の子より気持ち良いらしいよ！

だってさ。知るか。

とりあえず分かったことは、『死神』のことだ。

死神とは本来、魂を狩る者のことを示す。この場合は、ネクロマンサーの餌を探すって感じかな。まあ、命ある者を狩れば良いという事だからね。人間を殺さなくちゃいけないというわけでもないらしい。

死神としてこの世界にいるのはぼく一人だけ。もしかすると神様が転生者として『死神』を送り出すかもしれないと言っていたが、ぼくとしてはそれは好ましくない。転生者が多くいると、原作と大幅に違ってきってしまうためだ。それだけは避けたい。

そして死神の特殊能力。『誘惑』。

どうやら身長……というか年齢を自由自在にできるらしい。と言っても上限もある。最低で五歳。最高は二十歳だそうだ。それを知ったならすぐ行動。『誘惑』の仕方は教えてもらった。こちらは描

写がとても難しいので特に明記はしないことにする。

「ん、こんなものかな」

とりあえず十三歳くらいの身長にしておいた。幾らなんでも小学生は無い。故に中学一年くらいの身長にしておいた。

身体に不調はないか、調べている時。

パアアア。と、なんか手紙が光り出した。

「……？」

嫌な予感がするので、紙は手にせず、ただ覗く。そこには、新たな文が書かれていた。

ネクロマンサーのレジェンドを渡しとくね。これがあつたほうか、追々楽だろうからね。

読み終わった瞬間、周りの紙を巻き込みながら手紙は爆発した。なんとなく予兆していたばくは読み終わった瞬間に近くの木の枝に登り万事休す、ギリギリで助かった。

それから爆発元である手紙の近くに降り立つ。

爆発した際の煙でなにも見えない。

数秒後、やっと地面が見えてきた。それからネクロマンサーのレジェンドミスティッカーを探す。確かネクロマンサーのレジェンドは黒龍紋。デザイン的には水晶に龍が映ってる感じだったかな？ ぼくにはそう見えただけ。

酒場に帰り、二階の部屋を目指す。部屋の扉を開けてから、ベッドにダイブ。足をバタバタさせる。

なんだか、今日は随分と疲れた。黒龍紋は結局、ぼくのポケットの中にあつた。無駄な労力を使つてしまったということだ。

そういえばなんかマスターに変な目で見られた。というか、「なにがあつた？」的視線。

「おい、クロキ。いるか？」
「いますよ」

適当に返事を返す。ツルギさんは勝手に部屋に入り、固まつた。

そりゃあもう、石化したのかと勘違いしそうなくらいに。

「……どうかしましたか？」

正直、今はとても疲れている。このまま眠りたい。

「なんか、一気に成長してないか？」

「……ああ。そのことですか」

そつだ。少しだけ身長を高くしたんだつた。すっかり忘れてた。

「十三歳になつてみました、ぶい」適当にピースとした。

「どうすればそんなことが可能なんだよ。幻術か？」

「いえ、ぼくの特長能力です。うにうに」

適当にあしらってたら、頬をふにふにされた。ぼくはまだ肉体に精神が影響されていない。つまり男の感覚なのだ。そんなぼくからすれば、ツルギのこの行動は「キモい」としか言えないのだ。

「幻術の割には、随分と出来栄がよすぎる。本当に特殊能力なのか？」

「そーですよー。十三歳です。ロリコンのために一歳分しか身長を上げてないんです。褒めなさい。称えなさい。崇めなさい」

眠い所為か間延びした口調になってしまふ。まあ、実際の理由は一気に身長を上げて何やら身体に不都合ができたら面倒だからなんだけど。

ツルギさんはベッドに腰掛け、ぼくの頭を何故か撫でる。

「あの、ツルギさん？」

「お前ってさー、本当は何歳なんだ？」

「十九歳です。精神的な話ですけど」

「へえ、じゃあ俺と同じくらいなのか。意外だな。もっと年上かと思ってた」

おや。これはこれで意外だ。

この人は二十歳くらいなのか。てつきり三十路は行ってるものかと思っていた。

それにしても、本当に眠い。

「ねえ、ツルギさん」

「なんだ？」

「ぼくに、やらしいことしてくださいよ」

今頃、神様は「良く言った!」とか言ってるんだろうな〜思いながら、枕に顔を突っ伏した。

「ど、どうしたんだ急に?」

微妙に声が裏返っていた。ツルギさん、かなり動揺してるな。

「別にー。どっかの馬鹿が『女の子は男の子より気持ち良い』とか言ってたんですよ。それってやらしいことって意味ですよねー? ちょっと気になっただけです」

そんなことを言いながら枕に顔を擦りつける。なんか顔が痒い。いや、顔が赤くなってるのを隠してるとかじゃないから。言っってしまったことが恥ずかしいとかはないから。

はあ……。黒龍紋、か。ゲームでしか見たことがないからなあ。どんな感じになるんだろう。だけでも黒龍紋の長時間使用は避けておけって言われたし。ということは無駄に使うのも避けるべきだろう。楽しみは後に取っておくから楽しいのだ。

「……………あんっ!?!」

突然身体に電流が走った様な感覚があった。

それから股間部分を弄られている様な感覚。ま、まさか……………。

「ち、ちょ! ツルギさん、あんななにしてっ あっ」

「良い声出んじゃねえか」

確かに、自分の声とは思えない声だけど……………。
今はそんなことを気にしていられない。

「あ、あんた、冗談と本気つてものを……んっ！」

「ごめん、もう止まらねえ」

「んあっ！ く、し、仕方ありません。んっ……… 実力、行使で！」

腕に貼つてあるネクロマンサーをなぞる。その手にネクロマンサーが……… 出現しなかった

……… あ、そうだ。ミスティッカーは精神が安定していないと使えない。無理矢理行使しようとすればミスティッカーに殺されるか精神崩壊……。それだけは避けたい。どうしても。ならば魔法で勝負するしかない………。

「ヘル・ベル　っ！」

下半身から来る妙な感覚が呪文詠唱の邪魔になった。

もしかして為す術なし………？ いや待て、まだあるじゃないか。

呪文詠唱の必要がない、あれが。

「《戦いの戦慄》！ 離れな、さい！」

「うおお！？」

いつの間にかぼくの上に跨っていたツルギさんを蹴り飛ばした。

部屋のドアを突き破り、ツルギさんはそのまま廊下に激突。頭が床について身体が壁に埋め込まれてる感じになっていた。

「起きろネクロマンサー。初めての餌だ。良く味わえ」

左腕のミスティッカーを指先でなぞる。今度こそぼくの手にはネクロマンサーが出現する。ゆっくり、ゆっくりツルギさんに向かって歩き、その切っ先をツルギさんに向けた。

「ヒイイ！」

ツルギさん、最早涙目。だけでも同情なんてしない。自業自得、因果応報というものだ。

「ふ、ふふ。天国への日帰り旅行チケットをプレゼントです。天国は気持ちが良いって言いますからね。あまりに良い所過ぎて、帰ってこれなくなるかもですけどね」

どこかで聞いたことがある様な台詞をぼくが言つと、ネクロマンサーががばつ、と口を開いて涎を垂らす。

早く食べたいのは分かるけど、あまり急かさないでよ。今からゆつくり摩り下ろして料理にしていくんだから。

「お、おい。パンツと胸見えてんぞ。てかやっぱ白パンなんだな……」

なにを言ってるのか分からなかった。だから自分の格好を見た。ワイシャツはいつの間にかボタンを外され、胸と言つか……まあ、全体的に曝け出されていた。更にぼくはミニスカだ。ツルギさんの顔は、下にある。

……そこまで理解して、一気に顔が熱くなった。

ぼくは胸を隠しながらネクロマンサーを振り上げた。

「っ　　！　　黙りなさい！」

「ぎゃあ　　！！！」

その日、一時間。ツルギさんの悲鳴と物が壊れる音が鳴り響いた。そうだ。

「酷い目に会った、ツルギがそう言っていたが……なにしてたんだ？」

マスターは紳士的な苦笑（紳士的な苦笑というのもなかなか珍しいだろう）をして、カウンター席に座るぼくに言った。

「それはぼくのセリフです……。なにがあつたのかなんて、言いたくありません」

まったく、あの人は。幾らぼくが男と言えど、性的部分を見られることが恥ずかしくないわけがないのだ。胸が見えてると言われて恥ずかしくなつたのは、ぼく自身意外だったけれど。これがあれかな。精神は肉体の影響を受けるといふことなのだろうか。ううむ。それなら少し困る。ぼくは何からも影響されない。なにも受け取らないしなにも与えない。そうやって生きてきたのだ。前世では。

……前世では？

じゃあ、現世いまは？

ツルギさんに遊ばれて、アインさんに魔法を教えてください、マスターに食事を用意してもらおう。

……成程。前世かこと現世いまは、まるで違う。対極を示すプラスマイナスの様に違う。そしてお互いが反発しあう。過去は過去。現在は現在。未来は未来。それらは交わらない。正しく磁石の様に、交わることも、ぶつかることもない。それはただ平行線を辿るルートの一つなのだ。……いや、平行線などではない。ただの直線、か。過去も現在も未来も、それらが同時に進むことなどないのだから。

もしこの前世と現世が磁石だというのなら、ぼくは一体なんなの

だろうか。鉄……なのだろうか。だけどぼくは、鉄の様に丈夫じゃない……。それこそ、水の中に入ってしまった塩の様に溶けてしまっ、そんな存在だと、自負している。

「おい、どうかしたか？ 随分と悩んでいる様だが……」

「あ、いや。なんでもありませんよ、マスター」

「そうか、それならいいんだが。ほら、夕食のオムライスだ」

そう言っ、ぼくの目の前にマスターがオムライスを置いた。

最早ぼくの指定席となったカウンター席の一つ。マスターの顔がよく見える、カウンター席の丁度中央だ。いつからぼくはこんな偉そうな態度を取る様になったのだろうか。前までなら、右端とか左端……とにかく他人に挟まれることもなく、ただ静かな場所を陣取っていた。

……前までなら、か。ならば、それは比較対象には成りえないのだろう。

過去の自分は所詮他人だ。それを、ここで学んだ。

過去の自分がなにを感じていたのかなんて分かりやしない。

過去の自分がなにを考えていたのかなんて分かりやしない。

過去の自分がなにを思っていたのかなんて分かりやしない。

ぼくの目の前に置かれたオムライスの上には、ケチャップで描かれた「L」と「O」と「V」と「E」が並んでいた。

「LOVE」……。

マスターの顔を見た。マスターは首を横に振って、右端に視線を遣った。ぼくもそれにつられてそちらをみる。そこにはツルギさんが談笑している姿。

「お前が気付いてるかどうかは知らねえけどよ。あいつは、意外とあれで器用なんだよ。けども不器用なんだよな……。ま、受け取ってやりな」

マスターがぼくを諭すように言った。

けども、ぼくがこんなものを受け取って良いのだろうか。今頃になって思う。オムライスに書かれた文字を、もう一度見た。「LOVE」。「愛」。愛なんて大層なモノ、ぼくは受け取れない。そんなもの受け取った瞬間に、ぼくは壊れてしまう。きっとツルギさんを壊したくなるほど、壊れてしまう。

もう一度、ツルギさんを見た。

楽しそうに、酒飲み仲間と話をしている。それはもう、楽しそうに。今のぼくにはできない、天真爛漫とも言える笑顔で。

「ん？」

ツルギさんがぼくの方を見た。視線を送りすぎてしまっただろうが……。慌てて視線を外した。

ぼくはなににも与えない。

ぼくはなににも与えられない。

ぼくはなににも受け取らない。

ぼくはなににも受け取られない。

ぼくはなににも探さない。

ぼくはなににも探されない。

ぼくはなににも知らない。

ぼくはなににも知らされない。

ぼくはなににも興味を持たない。

ぼくはなににも興味を持たれない。

ぼくはなににも影響されない。

ぼくはなににも影響しない。

随分と粹がって生きていたものだ。それでいて、思い上がりも甚だしいというものだ。

ぼくは、結局死にたがっていたんだ。けども、生きたかったんだ。

矛盾に思われるこの考え方。けども、なにも矛盾なんてしてない。

理性で死にたがっても、本能は死なせてくれないのだ。

「……ふう、ん。そういうことなのか」

自殺できる人は、勇気があるわけではないのだ。本能が死んでいて、理性でしか動けなくて、そして、その理性さえも壊されてしまった人の末路の、一つなのだ。

理性だって、なにも本気で「死にたい」と思う人などいないのだ。そんなことはないと言えるものに言いたい。

「なんでお前は生きているのか……」

そう、問いたい。

しかしこれもぼくの見方でしかない。本気で死にたいと思ってる人だっている。死ぬ過程である、「痛い」「苦しい」という感覚がなければ、きっと死んでいる人だっているのだ。

何事にもびくびくと生きる。前世のぼくだ。生きることが怖くて死ぬことも怖くて、痛いことが怖くて苦しいことが怖くて、誰かになにかをされるのが怖くて誰かになにかをするのが怖かった。

恐怖で埋め尽くされた人間。否、人間の形をした恐怖の塊。

ぼくは元から、人じゃなかったのかもしれない。故にこんな曖昧な存在としてここにいるのかもしれない。死神。なのに魂を狩る者というわけでもない。本当に曖昧で、矛盾だらけで……。

「クロキちゃん」

肩を組まれた。横を見ると、ツルギさんと談笑していた人の笑顔があつた。いや、その人だけじゃない。さっきまでツルギさんと談笑していた人達が全員、すぐ後ろにいた。その中にはツルギさん本人もいる。集団を掻きわけて、この人たちをまるでぼくから引き離そうとしているみたいに割り込んできていた。

やっとぼくの隣に来たツルギさん。ぼくの視線に気づいて、笑顔になつた。なにも飾らない、屈託のない笑顔だつた。

「クロキちゃん、こいつお前のことが好きなんだつてさ！」

「な！ 何言つてやがる teme 等！」

笑顔が崩れて、顔を赤く染めているツルギさん。

「なんだよ。今更言い訳はできねえぞ？ このオムライス、オメエがマスターに頼んだんだろ？」

「ク、クロキ！ 今すぐそれを隠しやがれえ！」

わははは、と。

笑いで埋め尽くされた。器用、だけでも不器用。この人も、矛盾でできた人なんだろうか。

いや、人間なんて、皆矛盾の塊なのだろう。自分だけ、なんて考え自体、とても甘いのだ。

まだ笑いは絶えない。ぼくの横でツルギさんはなにやら弁解して

いる。

まったく、この人は。

「……ん、美味し」

オムライスの端を、少し食べる。卵の甘みと、ライスが良く絡んでいて、とても美味しい。

「「おお！」」

なんかどよめいた。
なんで？

「それを食ったってことは、こいつの愛を受け入れたってことか！？」

「クロキちゃん、本当にこんな奴でいいんかい？」

……え？

いつの間にか凄く話が進んでいた。

ツルギさんを見た。顔を赤くしながら呆れた目で、笑顔でぼく達を囲う人達を見ていた。

ぼくの視線に気づいたからか、ツルギさんはぼくを見た。必然、眼が合った。ツルギさんは眼があつてから逸らしづらいのか、少し拳動不審になった。それから、後頭部をポリポリと掻きながら、笑った。

* * *

夕食を食べてからが大変だった。周囲の人達に囃したてられて…。
…。なにかと疲れる一日だった。

と、いうことで今はその疲れを流す様にシャワーを浴びている。
女の身体にも、幾らか慣れてきた。今では、脱衣所にある鏡でこの身体を見ることがあっても動揺することはない。簡易的なシャワーで汗を流してから、マスターが態々メガロメセンブリアまで行って買ってきたと言うシャンプーで、髪を洗う。女から男の匂いがするのもしアレだと思っただらしい。聖人だ。

「それにしても、愛、か」

今日、ツルギさんはぼくのことをどう捉えたのだろうか。

特殊能力『誘惑』。それを知った彼は、ぼくを未だに人間だと思
い込んでいるのだろうか。……後で、正体をばらすのも良いかもし
れない。そうすれば、愛なんて言う荷の重いものを背負わないで
。

ああダメだ。また後ろ向きに物事考えてしまう。この世界では前
向きに行こうと思ってるのに……。

髪を洗い流し、身体も洗う。男らしい洗い方を忘れてしまい、遂
女々しくなる。今女であるぼくに「女々しい」という言葉は適用さ
れないんだけど。

もう一度身体を洗い流す。なんだかすつきりした。それから、少
し狭い浴槽に身を投じる。……飛び込み自殺みたいな言い方になっ
てしまった。

最初の頃こそ、入浴は浴槽に入ることすら儘ならなかった。なん
だか、別の人の体（それも女性）を見ているようで落ち着かなかっ
た。まあ、今は大丈夫だけだね。入浴に余裕が持てた。入浴時間が

長い女性の気持ちがあつてしまつほどに、だ。

そして、入浴という時程、思考するのにもつてこいの時間でもあるのだ。

この町に来てまだ数日しかたつていない。考えるなら、今の時期が一番だ。

そろそろ、旅行に行きたい。

今のぼくの、唯一の願望だつた。

神様、願いを聞いてくれますか。(後書き)

段々俺の頭が壊れてきた。気がする。

聞くだけ聞いてやるが叶えはしない。

森の中。ぼくが、この世界に来てから初めて眼を覚ました場所だ。そこではくは、魔法の練習をしていた。アインさんは町の中でも最強クラスの魔法使いらしい。それでも『立派な魔法使い』などは目指さないと、本当の意味で立派な魔法使いだった。

「ヘル・ベルグ ジャス・テイル キルスキル 契約に従い、我に従え、炎の霸王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に。《燃える天空》！」

浮遊術は一日で出来た。意外と簡単だった。拍子抜けしてしまうくらいに。けどもこの魔法は遂最近やっとできる様になった魔法だった。

名の通り、燃える天空。天空を覆う程の火力を持つ火炎を放つ純粹的な攻撃性を持つ広範囲殲滅魔法。アインさんの得意魔法でもあるらしい。

更に立て続けて魔法詠唱に入る。

「ヘル・ベルグ ジャス・テイル キルスキル 地獄より来れ、巨神の剣。劫火の炎。焼き斬れ。《炎の剣》！」

《雷の斧》と同系列の魔法。しかし攻撃性はこちらの方が高い。炎系は須く攻撃に特化しているのだ。

そして左腕に貼ってあるステッカーを一枚、指先でなぞる。右手

にネクロマンサーが発現される。そしてもう一枚のミスティックカー、『ジェノサイド』を左腕のネクロマンサーの上に重ね貼る。ネクロマンサーに刃節が生まれる。それを確認した後にもう一枚のミスティックカーをネクロマンサーに重ねた。

豪つと、黒い炎がネクロマンサーを覆った。

「へえ……」

始めてみた。黒龍紋を貼ると、こうなるのか。

……眺めるのも良いが、使い過ぎには注意だ。術者の魂と武器の命を吸う化物的な力なのだから。

「ふっ！」

ネクロマンサーを天に向かって振るった。刃節が伸びていく。炎に纏われた剣が天高く伸びていった。

「おお……」

黒い炎が龍の形を取る。猛々しい大声を上げるそれは正しく黒龍。しかしその黒龍に攻撃対象はない。このまま突っ込んでいくと大気圏突破しそうだったから剣をぐんぐんと引つ張り、剣を戻していく。龍は霧散し、先程までの黒い炎に覆われた大剣に戻った。

「ふう……」

少し頑張りすぎた。ナギ以上の魔力を持つてるとは言え、魔法を始めてまだ数日。コントロールが上手くいかない。ネクロマンサーも魔力を使っているとんでも過言ではないから、魔法との同時使用はかなり難しい。黒龍紋とジェノサイドを剥がし、ストレージもど

き（単なるウエストバッグ）にしまった。

そんな時、ひらひらと一枚の紙みたいなのが降ってきた。

「……手紙、じゃない……」

ぼくはなんとなくその紙をキャッチ。なんとなくその紙を眺めた。たっぷり数秒。ぼくはそれがなんなのか理解出来なかった。

「こ、これって……！」

ぼくの手握られていたのは、一枚のミスティッカーだった。

* * *

宿の部屋に帰った。このミスティッカーには覚えがある。ゲームでは良く助けになってたミスティッカーだ。雫の様なデザインが施された治癒系ミスティッカー。《リカバリー》。

でもなんで空からこんなものが？

神様なら、手紙を爆発させてくるだろうから、それはまずくないと思う。まさか、この世界にも《あちら側の世界》に通じる《ゲート》があるのか？

とりあえず、このミスティッカーが、この世界でどれだけだけの治癒能力があるのかが不安だ。ゲームでは一五〇の体力を回復したが、この世界では体力が数値化されてるわけではない。

しかしまあ、ぼくはこのミスティッカーを恐らく使わない。というか、使えないだろう。痛みのがあまり気絶するのが当たり前。これは……ツルギさんとかに渡しておこうか。

早速酒場の方に入る。

ツルギさんの姿を探すが……。

「あの、マスター？ ツルギさんは？」

「あ？ ツルギ？ あのバカなら部屋にいんじゃないかねえか？」

「そう、ですか」

少し意外だった。いつもこの時間はここでコーヒーを飲んでるんだけどな……。

* * *

こんこん、と二回ノックした。ツルギさんの部屋はここであつて
るはずだが……。

「あの、ぼくですけどー……」

とりあえず呼んでみた。返事は無い。むう……もしかしていない
のだろうか。

そう思ったから、部屋のドアを開けた。プライバシー？ なにそれ
れおいしいの？

「……………」

沈黙が一人分。今のぼくは一時停止状態。

ツルギは下半身丸出し……というか全裸で寝ていた。ドアを閉めた。正に巻き戻し状態。

いやいや。いやいやいやいや。なにを動揺しているんだ、ぼく。彼は男でぼくも男じゃないか。なにをそんな心臓を高鳴らせる必要がある。何故冷や汗を掻く必要がある。いや、男であるぼくでもあの状況を目の当たりにすれば冷や汗の一つや二つ掻くというものが……。

ここは意を決して部屋に入ろう。そして布団を掛けてあげて、それから起こそう。オツケイ。計画はできた。後は実行だ。

「入りますよー」

一応形としてだけ言っておいた。

ドアを開ける。さっきまでの光景が幻覚であってほしい等と言う淡い期待はいとも簡単に裏切られた。いや、こんな幻覚を見た方がショックだ。こんな幻覚を見てしまうほど、ぼくは腐っていない。

気配をなるべく消してツルギさんのベッドの横に立つ。下半身の汚い物を見ない様にしながら掛け布団をゆっくり掛ける。

「ん……ああ？」

オウマイガー。布団を掛けてる途中で起きちゃった。どうしよう。こんなことならゆっくりじゃなくて思いつ切り掛けてしまえば良かった。

「……クロキか？」

「ええ、そうですけど……」

どうするべきか……。

ぼくは再び一時停止状態だ。このまま布団を掛けりゃあ良いものを……、なんて他人事のように考えてしまっ。

某政治家さんの様に、ぼくは自分を客観的に見ることができないわけではない。だからと言っても人並みに自分を客観的に見ることができない。だが、この状況はどうだろう。なんとも説明し難い。無理矢理に説明するならば、兄の寝相の悪さに呆れた兄想いな妹がそれを正していた状況、だろうか。だとしたら全然似てない兄妹だ。まったく、戯言だよ。ほんと。

「なにしてんだ、お前？」

「見て分かるでしょ。寝相というか寝姿が酷い兄を正そうとしている妹的立場にて貴方を矯正させようと赴いたまでです」

「……なんだそりゃ」

あ、間違った。これはさっきのぼくの戯言だ。

「と、とりあえずですね。もうちょっと用心しましょうよ。そんな格好で寝るのなら尚更」

「あ？ そんな格好って……うお！..！」

どうやら気付いた様だ。ふう、本人に自覚もできて、これでもう見ないで済むだろう。

そう思ったのがぼくの間違いでしたはい。

「……お前、見たのか？」

「……はい、見ましたね」

嘘を言おうか迷ったけれど、この状況下で嘘を吐くのは不可能だ

というのは決定事項だ。せめて布団を被せ終わってから起きてほしかった。しみじみ、そう思う。

「そ、そうか……」

「……………」

「……………顔を赤くしてどうした、クロキ？」

うつさい。ぼくはこれでもおんな……………いや、男だけどさ。男でも男の突起物なんか見たくなんかない。見たいと思う様な同性愛者では無いのだ、ぼくは。

というか、あんたはあんたでなんでそんな平然としていられるんだ。

ツルギさんの顔を見た。凶悪な笑みを浮かべていた。

「なあ、少し俺の性処理にでも付きあってくんねえ？」

「……………それを、ぼくに頼みますか」

「なあに、口で啜えてくれりゃ良いだけだからよ」

「断固拒否します」

「じゃあ舐めるだけ」

「あんたまた殺されたいんですか」

左腕の裾を捲る。

「調子乗りましたごめんなさい」

土下座までしてくれた。別にそこまでは求めてない……………。
とりあえず……………。

「服着てください」

「おっ……………」

ぼくはツルギさんが視界に入らない様に後ろを向いた。必然的に、ツルギさんの部屋を見ることとなった。

思えば、なかなか整った部屋である。散らかってる服が気になるが、それ以外は特に目立って散らかっているものはない。壁には紅の翼『千の刃の男』ジャック・ラカンのポスターが貼ってあった。ファンなのだろうか。そういえば、今は時系列的にどこら辺なのだろう。暦ちゃんは……かなり小さかった。ていうか幼女だった。ぼくが知ってる暦ちゃんは少女なのだけれど……。

つまり原作開始時間にはまだ早いのだろう。

部屋の構造はぼくの部屋と全く同じ（当たり前だ）。だけれどぼくよりも物が置かれていて、違う部屋にいる様な感覚だった。

……というか、すっかり自分の家の部屋のように使われていた。宿泊施設なのに……。

「……ん？」

なにかがぴと、とぼくの手に触れた。なんだろう。なんか熱い。てか硬い。少し濡れてる？

「……………」

なんとなく予想はついた。この人は本当にぼくのことを……好き、なのだろうか。

いや、ツルギさんがぼくのことを好きだと思ってるということ自体、ぼくの勝手な想像なのかもしれない。オムライスに「LOVE」と書かれ、それをマスターが「受け取ってやりな」とか言っていた。だがそれは別の意味だったのかもしれない。

ツルギさんは元からぼくを性処理に使うつもりだったのでは？

そんな疑問が頭を覆った。

「……なにしてんですか、あんた」

「いや、こういうことされても騒がないのかなー、と……」

試すんじゃない。

「だってよ、お前っていつも最低限のこと意外喋らないって言うかさあ……。アインみたいだよ。女の子がそれじゃあいけねえ。せめて焦るところってのを見てみたいわけよ」

見なくて良い。というか大きなお世話だった。

ぼくは溜息を吐いた。まったく、この人は、と。そのまま部屋の出口へと向かった。

「お、おい。なんにも怒ることはねえだろ……?」

「手を洗ってくるだけです」

それだけ言っつて、部屋を出た。

ドアに寄り掛かる。

溜息を一つ吐いてから、ぼくは眼を瞑った。

『精神は肉体に影響される』か……。

ドアから背を離し、洗面台のある場所へ向かった。

* * *

洗面所で手を洗ってから、なんとなく顔も洗った。森で汗を掻い

て、そのままだったから気持ちが悪かった。とりあえずツルギさんの部屋に戻る。ぼくはまだ目的を達成していない。

こんこんと。ノックを二回した。

それから少し遅れてからドアが開いた。

「な、なんだ……、まだなにか用か……？」

なにやら意気消沈しているツルギさんが出てきた。

「……どうかしたんですか？」

「いや、自分の馬鹿さ加減に頭を痛めるところなんだ」

「今更ですね」

「うっ……」

おや？ どうやら、とどめを刺してしまったようだ。

「それより、貴方に持つておいてほしい物があるんです」

そう言いながらウエストバッグの中に入れた《リカバリー》を取りだした。

「……なんだ、それ」

「ミステイッカーです」

「ミステイッカーって……おまえのネクロマンサーみてえなものだろ？ それって適用ない奴が使うと死ぬんじゃないか？ なら俺が持つてても意味ねえだろ……」

意外だ。ちゃんと覚えてた。

すっかり忘れてるものかと思っていたのだけれど……。

「……戯言だよ。こんなの」

思考を中断。頭の中を真っ白にさせた。故意的に無意識になるなんて、不可能だ。だから、擬似的なものでもいい。思考しないで、ただ天井を眺める。

「……いや、傑作なのかな」

それだけ言って、ぼくは眼を閉じた。

聞くだけ聞いてやるが叶えはしない。(後書き)

ツルギとクロキでハプニング発生というシーンを書いてみたかったんだ。

そしたらツルギ変態になっちゃった(・・・)

足を止めてみる。……違う世界が見えてくる。(前書き)

本気出そうとしたら10000文字超えた。だけど文は拙いorz

足を止めてみる。……違う世界が見えてくる。

ここに来てから一ヶ月が経った。そろそろ旅行にでも行くつか、などと思っている時だった。

夜中の三時。眼が覚めた。

顔を洗って、水を飲んだ。いつもは六時に起きるから、三時間も早起きした。しかし、することがなにもない。酒場に行けば皆まだ盛り上がってるだろう。だけでもぼくは酔いたくない……。

だから、部屋にいた。なにをすることもなくぼーっとしてるだけだった。

静寂。

下階から聞こえてくる笑い声は何故か心地が良かった。日はまだ昇らない、けれども、もうすぐ昇るだろう。暇だし、日の出でも見ようかと思つて、ぼくは酒場を後にした。

「はっ……はっ……ぐっ！」

その結果が、こんなことを招くとは思ひもしなかった。こけそうになる足に鞭を打ち、走る走る走る。少しだけ振り返る。そこには杖に乗って追いかけてくるローブを着た男が数人。中には剣を持つてるものもいる。ぼくは対複数人をしたことがない。あまりにも不利すぎる。だから逃げる。町を駆ける。既に店を開けようとしている所が幾つか視界に入った。つまり、既に三時三十分は過ぎている。空もさつきより明るくなっていた。

だがそんなことはどうでもいい。逃げるしかないのだ。幸い、向

こうは何を思ってたか、杖での全力疾走をしてこない。

ネクロマンサーは……まだ出せない。今出したところで勝機があるとは到底思えない。だから、この鬼ごっこが終わってからが本番になる。

「っ……………！」

しまった！

転んだ……。起きあがって、目の前に現れた物を見て吃驚した。思考ばかりが先走っていたせいか、そこは町の中央の大きな時計塔が眼の前に来ていた。時計塔の針が指す時間は三時五十分。そんなにも経っていたのか……。

「はあ……………はあ……………」

心臓がばくばくと動いて、冷や汗が身体から噴き出る。足が動かない……。疲労が蓄積された身体は本番に向けて準備ができなかった。どうする。勝てるわけがない。そもそもこいつらはなんでぼくを追いかけてきた。

「……………悪いな、小娘。これも依頼なんだよ。それもMM元老院からのな」

「な……………？ メガロ、メセンブリア元老院が……………？」

何故だ。ぼくはなにか犯罪をした覚えもないし、メガロの奴等に喧嘩を売った覚えもない。

「小娘、お前がこの町から追い出した男が一人、いなかったか？」
……………」

あー……、いましたね。そんな人。

「あいつは元老院の中の下部組織にいる者の息子だったんだよ。で、元老院に頼みこんだのさ。親馬鹿つてやつさ。『自分の息子を追いだした奴を始末しろ』なんて、ホント呆れてものも言えん」

リーダー格なのだろう一人が前に踏みでてきた。

「そういうわけだ。こちらも仕事なんぞな。じゃあ、死んでくれ。」

《魔法の射手 氷の二十三矢》！

無詠唱か！

くっそ……。

「くうっ！」

横つとびしてギリギリで避けた。時計塔にぶち当たり、氷の矢が時計塔を凍らせた。仕方がない……。

もう動けないとほざく足に鞭を打ち、立ち上がる。ふらふらするが、仕方がないというものだ。

「起きて、ネクロマンサー。本当の本当に初めての餌だよ。喰らってやろう。喰い散らかしてやろうよ」

左腕の裾をまくり、ミスティッカーをなぞる。ぼくの手は大剣が出現、それを両手で構えた。

「……《戦いの旋律》。……いくぞ、MMの犬ども」

「おお、怖い怖い。女の子がそんなこと言っちゃ、ダメ、だろっが

「！」

叫びながら剣を持った男が駆けてきた。瞬動はしないようだ。ぼくのレベルに合わせてくれてるのかもしれない。

「ああああー!!」

「くっっ！ ああー!!」

振り下げてくる剣に対して、こちらは振り上げる。剣と剣がぶつかり合い、鉄が削れる音を甲高く鳴らした。火花が散る。それほど力同士がぶつかり合っている。

「《雷の暴風》！」

「っ!!」

舌打ちをする。なるほど、これが魔法使いと魔法剣士の関係。剣を持っていた男はその魔法名を聞いた途端に後ろに飛び、瞬動でぼくの目の前から消えた。

そしてぼくの視界に飛び込んでくるのは《雷の暴風》。

それもギリギリで横つとび回避。なにかが壊れる音がしたが、構っちゃられない。

次はぼくの番だ。

「うらあああー!!」

瞬動でさっきの剣を持っている男に急接近、そのままネクロマンサーで両断した。

あっさり。

両断した。

男は悲鳴を上げる間もなく、血つていった。ネクロマンサーはその剣にこびり付いた魂を喰うかの様に口をがちがちと開け閉めする。少しうるさい。黙ってる。そう思うだけで、ネクロマンサーはがちがち言うのを止めた。

なかなか主人想いじゃないか。

「なっ！ あいつを一瞬で!？」

今更になって驚愕の声が聞こえる。それを聞いている間にも、ぼくは別の男へと急接近する。剣を持ったものはあと二人。その内、短剣を持ったものに斬りかかった。

「ぬっ!! うううらあ!」

振り上げ、振り下げたぼくの大剣を、その短剣で重心をずらし、去なした。地面が抉られる。

「これでも俺達は『立派な魔法使い』と名高き正義を持つ者だな。そうそう弱くはねえんだ!」

短剣を持つ男が吠える。ほざけ。なにが正義だよ、くそ。

「クロキー!」

その時、聞き覚えがありすぎる、聞き慣れた声が聞こえた。

* * *

ツルギSide)

俺は今日も酒を飲んでいた。クロキが酒場から出ていくのを見たけど、まあ、日の出でも見に行くのだろうと想像はついていた。この町の時計塔から見える日の出は素晴らしいと言われている、唯一の観光スポット（笑）なのだ。なぜ（笑）が付くのかと言えば、なんせここは前まで『出たら生きて帰れない町』だったのだから、観光なんかするやつ、いなかっただ。クロキのお陰でそんなレッテルも剥がれていくことだろうし、ここもきつと繁盛するはずだ。なんせ町一番の酒が上手い宿屋なんだからな。

そんな町一番上手い酒をもう一口飲もうとした時、店の入り口が唐突に大きな音を立てて開かれた。

「た、大変だ！ クロキちゃんなんかローブ着た魔法使いに追われてたぞ！ そいつら剣持ってたから、クロキちゃんを殺す気だ！」

理解出来なかった。ただ、毎日見る顔の男が入ってきてなにかを叫んだ。

「……ツルギ！」

「……おう」

マスターは既に魔法剣士を引退している。アインはどっか行っちゃった。俺しか、いねえだろ。あいつの白馬に乗った王子になれるのはよ。

俺は、愛刀を部屋から持ち、店を出ていった。

* * *

くクロキSide)

ツルギさんだった。青龍刀を両手に持ち、こちらに駆けていた。

「ううううううおおおおおおおおおおおおお！」

ツルギさんは唸りながら、短剣を持つ男に飛びかかった。短剣を持つ男は反射的に短剣を防御の形で構えた。

「はあっ！！」

「ぐあ！」

十字切り。短剣はへし折れ、男の胸部を鋭い刃が切り裂いた。凄まじい一撃だった。ツルギさんの実力の片鱗。ぼくは、なんて人の隣にいたんだ……。

「へへ、白馬の王子様、登場ってな」

「……まったく、貴方って人は」

ぼくに笑いかける余裕まであるのか。歴戦の戦士……なのだろうか。

「おら、次来いよ！俺のクロキに手え出したツケ、払ってもらおうぜ」

「くっ……。我等は『立派な魔法使い《マギステル・マギ》』なの

だ！ 貴様の様な無法者が敵うはずもないというのに、愚かな！」

大剣を持った男が言う。しかしその大剣も、ぼくの持つネクロマンサーよりは小さい。

「いいか、クロキ。俺が魔法使い三人を相手にすつから、テメエはあの大剣の野郎を頼んだ」

「……」につ、と。

笑うことでそれに答えた。

ツルギさんも、笑ってくれた。

頼もしいと思った。そして、それと同時に気付いた。

「ツルギさん、勝手なことを言っただけですか？」

「……なんだ？」

きよとん、としているツルギさんの顔を見て、ぼくは言った。

「ぼくは、 貴方が好きです」

きっとこれは変えられないことだ。

同性愛者ではない。ぼくは、恐らく影響されていたのだ。とつくの昔に、自分の「女」に影響されて、そして、『愛』という曖昧な感情を、いつの間にか抱いていたのだろう。

「……クロキ、死亡フラグを立てんじゃねえよ。そういうのは、これが終わってからにしようぜ」

ツルギさんはウインクで答えた。

一理あるのだけれど、もっときちんとした答えを待っていたばかりからすれば、それは少し寂しい回答だった。まあ、いいけど。ていうか、ウインク似合わないっす。

「いつそのこと死んじゃえば良いんです」

「あれ、さっき俺のこと好きとか言ってくれてなかった？ 両想い成立したかと思っただけ……」

「……ぼくの身体で遊びまくった罰ですよ」

「……。ま、いいか。女の尻に敷かれるのは、嫌いじゃねえ。それがお前だって言うなら、尚更な！」

そう言っつて、ツルギさんは駆けだした。ツルギさんなら大丈夫だ。魔法使い三人くらいなら、きつと。

だからぼくも大剣を持った男に駆けだす。ネクロマンサーを下段に構え、地面を抉りながら突き進む。

前世のぼく。君は安心していい。君は、ちゃんとありつけた。ぼくを受け入れてくれる存在を、ちゃんと見つけられたよ。だから、笑おう。天真爛漫に。

「うわあああ！……！」

声を上げながら突き進む。大剣を持つ男は剣を振り上げていた。

「ふえあっ！」

ぼくが攻撃範囲に入ったのを確認。男は変な声をあげながらぼく

に斬りかかった。だから、ぼくはそれをかわす。最小限の動きを以て、かわす。しかし慣れない動きはするべきじゃないものだ。二の腕の皮一枚がワイシャツと共に斬られた。肉が見えた様な気がした。そりゃそうだ。まるで肉を削がれる様に斬られたのだから。しかし、不思議と痛みがなかった。

痛みがないのなら、そんなことを気にする暇もない。ぼくはそのまま突き進む。ネクロマンサーを横一線に薙ぎながら、突き進んだ。

「ぐっ……」

男はギリギリで避けた様だ。斬れた感覚がなかったから、良く分かった。だから足に急ブレーキをかけた。

さっきまで動かなかった足。さっきまで自分の物じゃなかった様に動かなかった足。

今は、ちゃんと動いた。動いてくれた。大剣ネクロマンサーすらもぼくの体の一部のように動いてくれた。

足を無理矢理な使い方をして方向転換。逃げた男を追う。

「ちっ！」

男は舌打ちをしながらまた剣を振り上げた。あまりにも単調な動き。ここで、ぼくがかわすのが相手にとっての予定調和なのだろう。だからこそ、ぼくはそれをネクロマンサーで受け止めた。そして重心をずらし、それを去なす。

男はバランスを崩した。もう立て直す暇は与えない。

斬っ。

今度こそ、男を両断した。

「ネクロマンサー、食べていいよ」

可愛いペットに言う様に、髑髏に言った。それと同時に髑髏は歯をガチガチ言わせた。

「……終わったみてえだな」

横を見ると、ツルギさんが立っていた。それはつまり、こちらが一人を殺す間にツルギさんは三人を殺した、という意味を示すことだった。

* * *

「ツルギSide」

顔が緩んだ。きっと今の俺の顔はすごく気持ち悪いだろう。けども、顔を引き締めることができなかった。

「うお、気持ち悪！」

うるせえ。放っておけ。

そう心の中で言いながら一人の男の腹部に右手の刀を突き刺す。皮膚を裂き、肉を断ち、内蔵を穿つ感触。

その刺さった刀を横一文字に振り切った。

「ぐあああああああああ！」

汚い悲鳴が聞こえる。だがそれに構う暇は一切なかった。

「《魔法の射手 連弾・雷の五十矢》！」
「《闇の吹雪》！！！」

右から魔法の射手。左から闇の吹雪。だが、これはある意味で酷い攻撃だ。もつと相手の動きを見て、こちらの予定調和に持つてこさせる。それが、戦闘の基本だ。こいつ等は、それを知らない。

後ろに飛んで避ける。バックステップだ。こんな奴等に瞬動なんて勿体ねえ。

「うお！」

そんなことを思ってたからだろうか。雷の矢が俺の左目をかすめた。血が出る感覚がする。

「ちつ。しょうがねえ。アレやっか！」

両手に持つ青龍刀『戦華万雷』。

右腕と左腕を交差させる。

『千華百獣十字一閃』

俺が唯一尊敬する元師匠から授かった技。師匠程上手く使えらるといっわけでもない。だが対人対軍対物。どれにも効果的な技。

「ラシユ・タルク ベルセルク 縛れ！ 《原則の縛り手》」

光で構成された紐を飛ばす。紐は蛇の様に男二人を縛り上げたうえに、離れた位置にいたはずの二人を近づけさせた。つまり、男二人を纏めてぶっ飛ばす！

男二人に向かって走り出す。

「オラ行くぜ！ 《千の雷》、圧縮キーワード『空を統べる者』！
吹き荒び来れ風神！」

呪文。圧縮キーワードというのはそのまま、魔法を圧縮させるためのキーワードだ。魔法の属性によってキーワードが違ったらしいが……俺は雷系の魔法しか使えねえからな。

「《合成》、キーワード解放、『空を統べる物』。我が示す正義の剣に宿り、地獄の悪鬼との合戦を所望する！ さらに我神罰を下し、悪鬼羅刹を統べる雷の守護者と成れ！ 《百獣の雷》……！」

ここら辺の呪文が一番めんどくさい。くどい上に長い。だがそれを言わねえと、発動しねえんだよなあ。

俺の剣が、《千の雷》と《百獣の雷》を、吸収。バチバチと、電気を帯びる。

縛りあげられた男へ駆けだす。クロスさせた腕をだらりと下ろし、自然体で突っ込んでいく。

「ううううあああああああああああ……！」

雷を纏った剣を持った両腕を振り上げ、二人を纏めて十字切りした。二人分を斬るのは、なかなか骨がある。まあ、これは、斬ると言うよりも焼き焦がす技なんだがな。現に、二人は焼死体の様な状態になっていた。

俺はそのまま二人を無視してクロキの方を見た。クロキは既に男を両断していて、ネクロマンサーの口をがちがちと言わせていた。

なにあれ怖い。

とりあえず、クロキの無事を確認しよう。そう思って、クロキに歩み寄っていった。

* * *

くクロキSide)

なんだか、凄く疲れた。嫌なものも見ちゃったし……。主に内蔵とか。

隣に立つツルギさんは血を流しながら、なにやらぼくに笑顔で話しかけていた。ちょっと気分が悪かったせいか、ツルギさんがなにを喋っていたのか聞きそびれた。

「ていうかツルギさん、左目部分から血い出てますよ」

「うお、マジだ！ 忘れてた！ 今頃思い出した！ いてえ！」

えー……。なんだかテンション高いなこの人。なにがあつたのだろっ。

まあ、いいけど。とりあえずお風呂に入れたら幸せだ。

「ちょっと動かないでくださいよ」

「ん……？」

ウエストバッグの中に入ってる白いハンカチを取り出し、ツルギさんの血が出る部分に宛がう。見た目以上に出血がひどい様で、すぐに血のシミが出来てしまった。

「お、おい。顔近いつて。それに、怪我って言ったらお前のがひでえじゃねえか。大丈夫かよ……それ」

「今はそれどころじゃありません。お医者さんいきますよ。ぼくはミステイッカーで治せばいいので大丈夫です」

本当は今死にそうなくらい痛いけど。

「医者だ？ それこそ遠慮だ。俺は医者^の世話になったことがないのが誇りなんだからな。それより、お前の腕は本当にミステイッカーで治るのか？ ……というか、あの死体をどうするかだな……」

確かに。

これはどうするか……。

「ネクロマンサー。死体って食べれる？」

反応がない。やっぱり魂喰^{ネクロマンサー}は魂しか食べないのか。まあ、仕方がない。適当な場所に埋めておこう。死神として、弔いくらいはすべきだろう。形だけでも、ね。

* * *

〈おまけ・ぼくの日常風景〉

あの騒動から一日。腕の怪我も《リカバリ》のお陰ですっかり、なんの比喩もなく跡形もなく消えた。そしてどうやら《リカバリ》

《は全治癒の様だ。身体が軽くなった様な感覚からして、疲れも癒えた。そしてその代わり、《リカバリー》は一度しか使えないそう
だ。というのも、使って傷が消えた後、千切れてしまったのだ。解
々に、破けたのだ。少し勿体なかった。

そして、ぼくはいつも通りの朝を迎えた。六時きっかりに起きて、
ピンクのパジャマから私服であるワイシャツとミニス力を着る。ワ
イシャツは血がこびり付いてたり、斬られてたりしていたのだが、
マスターが一晩で直してくれた。しかもワイシャツの腕の部分に髑
髏の紋章みたいなのが入ってた。

なんでも、「ツルギから聞いたぜ。お前死神なんだろ？ ならイ
メージ的に髑髏が良いかなって思ってな」だそうだ。ツルギさんは
とても口が軽いらしい。後で嘘を吹きこんでおこう。

それにしても、ぼくももうすっかり女だな……。前世ではまった
く気にしなかった『身嗜み』を気にする様になっていた。

それでも一人称が「ぼく」なのは、「私」っていうのが恥ずかし
いからなのだろう。自分のことを「余」だとか「我」とか言ってる
女性よりは「ぼく」の方がましかな、とか思ってたたりする。

マスターに朝ごはん（目玉焼きを乗せたトースト）を作ってもら
い、食べる。その食べかけをツルギさんが齧ってくれたおかげで一
騒動あつたが……。まあ、特に明記するべきことでもないだろう。機
会があれば話そうと思う。

それから缶詰専門店たる場所で缶詰とコオロギ漬け（コオロギを
詰め込んだだけ。どこが『漬け』なのか分からない）を三箱ずつ買
う。どうも、この町には不似合いな店だと思う。だけれども、この
店はなくてはならない店なのだ。ていうか、コオロギ漬けなんて食
べる人、いるのだろうか。

人気のない裏路地に入る。偶に柄の悪い人達がいるけど、ぼくがこここのトップだからか、なにかをされるようなことはない。まあ、それでも何故か避けられるんだけどね。男女差別？

「……今日はいないのかな？」

裏路地の行き止まり。ごみもなにもない拾い空間に出る。いつもならあいつ達がここに集まってるんだけど……。いないのなら、仕方ない。

ビニール袋に入っている缶詰を出して開ける。

それを地面に置いてから、壁に寄り掛かる様にして座った。

「……にゃ〜……」

「ん……やっと来たか。ほら、お食べ」

さっきまでなにもなかった空間。そこに、大量の猫が集まってきた。この町には猫が多い。生ごみが不法投棄されまくっている様な町だから、野良猫には過ごしやすい環境なのかもしれない。

「……む」

ずしり、と。突然頭の上に重い物が乗ってきた。

「重いじゃないか。お前デブ猫なんだから自重してくれよ」

「にゃ〜」

本当に分かっているのだろうか。頭の上から一向に離れようとしてくれない。むう……。

「お前も少し食べてきたらどうだ？ いつもぼくの上にいるけど、

それじゃあ腹は膨れないだろ」

いつものことなのだ。ぼくがこうして壁に寄り掛かっていると、いつも頭の上に乗ってくる。だけでもまあ、こいつのお腹はなかなか心地が良い。温かくて、帽子を被っているようでもある。

そうそう。ここは動物間の仲が良い。猫たちがいるところに普通に小鳥がやってくる。こういふふうには、ぼくの肩に乗ってきたりする。

「お前もいつもここに来るな……。まったく、ほら、コオロギ」

ちゅんちゅんと鳴きながらぼくの肩を下り、開けておいたコオロギ漬けを食べ始める。この時間が、何気に一番好きな時間かもしれない。町の喧騒も消える裏路地。少し薄暗い路の先には動物好きには堪らない空間が待っている、ってね。まあ、ぼくは動物好きというわけでもないのだけれど。

餌が空になると、猫は皆ぼくに顔をすりよせてくる。正直これはつらい。帰りたいんだけど、帰れないから。

「まったく……。少しだけだぞ」

……。人にはよく流されるぼく。だけど猫にまで流されるぼくってどうなんだろう。

それからはちょっとした散歩だ。『死神』は体格が変わらない。それを分かっているけど、適度な運動をしないとちょっと不安になっ

てくる。今のぼくは女だからね。神様から貰ったこの身体、少しくらい大事にしないと。

「おう、クロキちゃん。今日も猫の餌やりしてきたんか？」

そう言ってくるのはファミレスみたいなのを昼頃から経営しているおじさん。気前がよく、偶に奢ってくれる。

「はい、そうです。生ゴミばかり食べてたらお腹が壊れちゃいますから」

「はは、優しいねえ」

優しくなんかは無い。ただの自己満足の行動だ。

「おじさんは水やりですか？」

今のおじさんの格好はエプロンにジヨウロを持ってる状態だ。この町に似合わない格好だとだけ言っておこう。

「ああ、そうだよ。この店だけでも、華やかにしておきたいからね」「はあ、そうなんですか」

なんでこの町にいるんだろうか。もっと綺麗な町で店を営めば良いのに。そう思わずにいられない。

おじさんと少し雑談してから酒場に帰る。それからリラックスタイムだ。自室に入り、ベッドにダイブ。偶にこれが思考タイムになってしまいが、大抵はリラックスタイムなのだ。

「うっ」

ぶらぶらとばたばたと足を振る。

「……よし、旅行に行こう」

自分でもびっくりするくらい唐突に言った。

昼ごろになるとマスターが呼びに来る。昼飯を作ってくれるのだ。本当にこの人は聖人なんじゃないかと疑ってしまう。

「ごちそうさまでした」

お昼御飯が食べ終われば、この後はなにと決まったことはない。だから魔力コントロールの修行をする。

「ヘル・ベルグ ジャス・テイル キルスキル 来れ炎精。我が手
中に宿り、敵を焼き尽くす弾丸となれ。《炎の魔弾》」

本来ならば人四人分の大きさになる炎を魔力制限で小さくする。それこそ手のひらサイズだ。更に魔力を使って熱制限までする。それから今朝買った缶詰を天井高く投げる。

そしてこっからが本番だ。魔力で《炎の魔弾》制御、精密なコントロールを以てして缶を床に落とさないように打ちあげていく。

カンツカンツカンツ、と軽快な音を立てて缶と魔弾は踊る。

某魔法少女の真似ごとだが、これはこれで意外と難しいものだ。

かんつかんつかんつかんつかんつかんつと軽快なり
ズムで音が続いていたが、突然　　コロンコロンと音が変わった。
そして部屋は静寂に包まれる。

「……………疲れた」

ぼて、とベッドに倒れる。床に落ちた缶をベッドの上から腕を伸ばして取り、ゴミ箱に向かって投げ捨てた。

缶は、からんからんと音を立てて、ゴミ箱の手前で落ちた。

「……………はあ」

めんどくさいけど、取りにいかなくちゃなあ。缶って意外と危険だし。ふんだりすると。

そう思って部屋の隅に落ちてしまった缶を取りに行く。

「……………」

手に取った缶を眺め、ぼくは呟いた。

「……………ああ、暇だ」と。

と、いうことでツルギさんの隣にぼくはいる。ツルギさんはコーヒーを飲んでいて、今日は酔っていない。マスター曰く、ツルギさんはぼくが来てからは極力コーヒーを飲むことにしたそうだ。なんだか悪いな……………。

「あの、ぼく旅行に行つて来ようと思つんです」
「ぼふっ!?!?」「ほっ」「ほっ!」

こう切り出したらツルギさんがコーヒ―を吹いた。噴いたと言っても良いかもしれない。それから咳込み始めた。どうしたのだろうか。苦かったのだろうか。

「な、なんでだよ! ここにいりゃあいいじゃん!」

「なに大声出してんですか。そもそも、ぼくは旅行の途中だったんです。一日目にここに来て、いつの間にか居候状態です。いくらなんでもこんな旅行は嫌ですよ」

「そう言えばよ。クロキつてどこに住んでんだ?」と、突然。マスタ―は言った。

「あー。確かにそれ気になるな。死神だつっても家庭くらいあるだろう?」

あつ。どうしよう。これについてはなんの言い訳も考えてなかった。

「残念ですが、死神はぼく一人ですよ。人外なんです。世界が孕んだ子なんですよ」

少しだけ洒落てみた。

「意味分からん」

あつ。一刀両断された……。

「ま、まあいいです。兎も角、明日にはここを出ようと思ってます。一年置きには帰ってくる予定ですよ……」

「一年置きだ？ もっと頻繁に帰って来いよ。この世界、旧世界に比べりゃ小さいんだからよ」

「そう言われましてもですね……。はあ……。分かりました。言います。言いますよ。本当は言いたくなかったけど。言います」

二人の頭の上にクエスチョンマークが生まれる。

ぼくはそれを見てから、静かに言った。

「この町の人、殆どの人が人外の長寿種ですよね？」

「……………」

マスターは「む……」みたいな顔。しまった、と思ってる様子も見えた。

ツルギさんはぼかんとしている。

「気付いてたのかい？」

「はい。これでもぼくには世界を簡単に動かすことができる知り合いがいるんです。いつも爆発してる様な人……。まあ、人なんですけどね。その人がぼくを生んだと言っても過言ではないんです。そしてその人譲りなのか。それともその人がサービスしてくれたのかは知りませんが、それでも観察眼って言うのがすごいんですよ、ぼく」

ツルギさんはバツが悪そうな表情で後頭部をポリポリと掻く。マスターはマスターで「随分とすげえ知り合いがいるもんだ」と眼を

細めていた。

「つまり一年置きに帰ってきてても貴方達は老いることがあまりない。長寿ですからね」

「はんつ。仕方ねえか。俺がお前について行ってやる！」

なに見当違いなこと言ってるんだ。

「ぼくは一人で行きますよ。じゃなきゃ意味がない」

「どういうことだ？」

「……これからも、ああいう人が来るかもしれないという可能性です」

ああいう人。

あれは『立派な魔法使い』だ。あれでも、マギステル・マギなのだ。それを殺した。つまりぼくは、あの瞬間、全ての『立派な魔法使い』と敵対したと言っても過言ではない。

ぼくの武器を見た『立派な魔法使い』がいれば、恐らくそいつはネクロマンサーぼくのことを「悪」だと言って罵ることだろう。そして、かの吸血鬼を追い回す様に、ぼくをしつこく追い回すだろう。

そんなことになれば、この町に迷惑がかかる。

「迷惑とか言うけどよオ。迷惑なんざお互い同士掛けまくってなんぼだろ？俺等は気にしねえって」

「ぼくは気にします。それに、この町にぼくが潜んでると分かれば、彼等はこの町を一斉掃討をするかもしれませんよ。そんな、恩を仇で返す様な真似はできません。なので、ぼくはこの町から出ていき、オステイアにまで行くこうと思います」

マスターがコーヒーを出してくれた。苦そうだ。だから角砂糖を六個入れた。それからスプーンでかき混ぜる。二人は妙にバツの悪い顔をしていた。

「ツルギさん、そういうことなので。まあ、約一年後に戻ります。一時帰宅です。……ここが、ぼくの家なんですから。まあ、その後またすぐに出ていきますけど」

それだけ言うと、ぼくは部屋に戻った。

* * *

少しだけ悪いことをしてしまっただろうか。なにも急ぐことはない。まだ少しだけこの町にいても……。だめだ。そんなことを考えていてはいつまで経ってもここを出られない。気分は親離れする子供の心境。

「とりあえず、お金はあるからな。地図もあるし……。ここからメガロまで約二千キロ。オステイアまでになると……。かなりあるな。五千キロ〜六千キロってところか。」

……。まあ、徒歩で十分だろ。途中で町とか村もあるみたいだし「そういえばマスターはMMまでなにを使って移動しているのだろう。転移魔法符だろうか。だとするとかなり値を張ることになると思っただけれど……。」

まあ、とりあえずこの町を囲う森が問題だね。半径三キロメートル以上ある。

……まあ、真つ直ぐ進んでればあつという間だよ。きつと。

クリユタエムネストラ。それがここら一帯の地域名。メガ口はその北。オスティアは西だ。

しかしオスティアは海という海を、建物と言う建物を無視して直線で結んでやつと五千キロだ。かなり、本当にかなり疲れるだろう。さすがに海を渡れと言われると徒歩は無理だ。後で水面を歩く術でも手に入れようか。浮遊術を使う手もあるけど、ここら一帯は飛龍もいる。肉食の奴なんて、わんさかいるのだ。喰われてしまつては元も子もない。とりあえず、遠回りしてでも安全なルートを確保するべき、だよな。

「となると……」

魔法世界の地図をもう一度よく見る。メガ口に行つても意味はない。

オスティアに行くためのルートは徒歩が一番。地図で見るとかなり細かいが、一応陸は繋がっている様だ。なら、船に乗る必要もないだろう。

まず西方向に進みオレステスを目指す。その後、オレステスから北西にあるトリスタンを目指してトリスタンから西に進んで一気にオスティアに向かう。大まかなルートは、これで十分だろう。あとは行き当たりばったりで行こう。

外を見た。いつの間にか空は茜色に染まっていて、幻想的な光景を醸し出してくれていた。

「……ここから見る夕日も、当分見れないのか。そう思うと、なにか感慨深いものがあるな」

……。明日は早くに出よう。早く起きるには早く寝ることが大事……というわけでもないんだけどね。逆に寝過ぎると眠気を引き摺るはめになる。だから、暫く空を眺めてることにした。

……部屋の外からぼくを覗き見してる変態がいなければ、清々しい気分なんだけど。

はあ、なんでぼくはこんな人に向かって「好きです」なんて言っ
てしまったんだろう。少しだけ……本当にほんの少しだけ後悔した。

* * *

くツルギSideく

明日。

クロキがいなくなる。想像もつかなかった。あいつが来て、約一ヶ月。楽しかった。

当分、あの姿が見れなくなる。

白いワイシャツとグレーのミニスカート。愛らしい茶髪のおほ毛いつも肌身離さない青いカチューシャ。偶に見える太腿にくらっとすることも屢。いつもは無表情だからか、微笑んだ顔がより一層可愛く見える。一目惚れ……ではなかったと思う。いつの間にか魅かれていた。魅了されていた。魅惑、魅力。あいつには一見似合わない言葉だが、俺はあいつに魅了された。だからこそ、俺はせめてクロキの姿を網膜に焼きつけようと部屋を覗き見していたりする。窓をずっと眺めてるクロキ。……クロキなんて名前、本当に似合わない。アイカって呼んじゃあダメだろうか……。少しだけ床を見て悩んだ。

「にゃ〜」

む……？ 猫か？ 鳴き声が聞こえたのはクロキの部屋からだ。もう一度、覗き見を再開する。

いつの間にか部屋の窓が開け放たれていた。そしてそこにいるのは一匹の黒猫。クロキはその黒猫の顎を撫でる。ごろごろと。猫が気持ち良い時に出す声が聞こえてくる。ああ、俺もあんなことされたい……。いや、顎を撫でられるって言うのはどうなのだろう。せめて普通に撫でてほしい。

「……にゃーにゃー」

「ごぶっ……！」

ク、クロキが！ あのいつもクールを貫いてるクロキが！ 猫語を！ 口から溢れだす血が止まらない！！

「……おい、変態。鼻からじゃ血が出し足りないのか？ 吐血してんぞ」

いつの間にか隣に酒飲み仲間がいた。

「うるせえ！ あいつへの愛が止まらねえだけだ！」

「はいはい。その内通報されてもしらねーぞー」

「精々がんばれやー」

俺のことを簡単にあしらいつつ下階に下りていった。ったく……。明日から大家であるクロキがいなくなるのに暢気なこと言いやがって……。

はあ、と溜息を吐いてからもう一度部屋の中を覗き見……。

「こんなところでなにをしてるんですかにゃー」
「にゃ〜」
「うっ！」

本日二回目の吐血。口から愛^血が止まらない。
猫に向かってクロキが話しかけている……。それだけでもレアな
状況。

猫を抱いているクロキを見るときが来るだなんて、俺は思いもし
なかった。俺は、今、この瞬間、死んでも良い。

クロキは当然猫で遊んでいた。ベッドに腰掛けて黒猫を抱きしめ
たり。暖かそうだな〜、クロキに抱かれないな〜、身長的に無理か
そうか〜。でも抱くことならできるよね。

ああ、黒猫になりたいなんて始めて思った……。

「ところでさつきからそこにいる変態さんはなにしてるのかな？」
「うっ……」

もしかしたら、とか思ってたけど……。

「いつから分かった？」
「ドアが少し開いた時から」
「初めっからか!？」

俺ってこれでも戦場を渡り歩いてきた中で気配消すの得意だった
んだけどなあ……。なんだか自信消失しそうですぜ……。

「ツルギさん」

「ん?」

「にゃん」

「ぶはっ！！」

最早立ってられない。四つん這いになって吐血した。

猫手！ あの手を猫の手の様にしての「にゃん」！ 良い！ まじグッド！ グッドジョブ！

「なにしてんですか。貧血通り越して失血して死にますよ」

殺そうとしてるのはお前だけだな……。

「あ、そうだ。ツルギさん」

「ん？ なんだよ」

貧血でくらくらする中、なんとか顔を上げた。

そして、唇に、柔らかい感触が、あった。

眼を見開いた。なにかの間違いだろうか、と。だけど、間違いないかじゃなくて、一切の戯言も、一片の虚言もなく、そこには、クロキの顔があるだけで。

「……………」
「……………」

随分長い時間だったと思う。クロキの唇から解放される。解放なんかされたくない。もうちょっと、重なっていたかった。

「な、なな……………」

「せめて、長旅の前日くらい濃厚な思い出が欲しいじゃないですか」

そう言っつて、「してやったり」みたいな顔で俺を見下ろす。微笑んでるその顔は、夕陽の所為か赤く染まっていた。

足を止めてみる。……違う世界が見えてくる。(後書き)

原作と関係ない人とクロキをくつつけちゃったね。

うん、まあいいけど。

原作の誰かとくつつける気もなかったしね。俺の気まぐれでツルギとくつついちゃったけど、良いよね。

ちゅんちゅん、という小鳥の声で眼が覚める。いつも通りの時間。六時。隣にはツルギさんが寝ている。……ああ、今日でここを出ていくのか。少し、寂しくなるかな。でも仕方のないことだ。任務に駆りだした『立派な魔法使い』数名が行方不明となればここを探しに来るだろう。その前に、ぼくがどっかで『立派な魔法使い』を狩る。そして一人だけ生き残らせて伝言を伝える。

「……そう簡単に行くとは思えないけど、まあいいか」

上体を起こそうとして失敗した。ツルギさんがぼくに抱きついていた。

「……………」

普通こういうのって女が抱きついてるもんなんじゃないの？ 抜けだそうと試みて見るけど、抜けだせるどころか余計にツルギさんの力が強くなった。仕方がない。じゃあこの人と寝ることになった経緯を回想としてお送りしようと思います。

* * *

ツルギさんの唇に自分の唇を重ねた。キスは初めてだ。前世でもしたことはない。

「な、なな……」

ツルギさんは理解できなさそうにぼくの顔を見た。だから少しだけ笑った。その顔が面白かったから。ただ、ぼくの顔も熱い……。きつと顔は赤く染まってることだろう。

「せめて、長旅の前日くらい濃厚な思い出が欲しいじゃないですか」
少しだけ強がってみた。本当は今すぐベッドにダイブして顔を隠したい。だけでもそれはぼくのキャラじゃない。

「そ、そうか……」

ツルギさんはなぜかぼくから眼を逸らして後頭部をポリポリと掻く。
顔はぼくと同じように赤かった。いや、ぼくはこんなに赤くないと願いたい。

そのまま沈黙が続いた。黒猫はいつの間にか逃げていた。

そのまま夜になってしまった。マスターが一回だけ来た。夕飯はどうするか、と聞きに来たらしい。いつもなら驚かないのだけれど、今日ばかりは驚いた。ちなみに、パーティーでもやるか？ とマスターが言いだしたが、断った。パーティーは苦手だ。ちなみに夕飯は「腹が減っていない」という理由で断った。代わりに朝ごはんを一杯作ってくれと頼んだ。

「あ、あのツルギさん……」

意を決して言葉を紡いだ。

「今日くらい、一緒に寝てあげてもいいですよ」

何故か素直になれず偉そうに言ってしまった。ああ、こんなのはくのキャラじゃない……。

前までのぼくはどこに行ってしまったのだろうと、部屋の壁を見遣る。いや、恥ずかしくてツルギさんの顔が見れないとかじゃないですからホント心から。

「……………」

ああもう。じれったい。早く答えを言ってほしい。じゃないとぼくの精神がメルトダウンを起こしてしまいそうだ。

「……………ああ、そうさせてもらおうよ」

その声が聞こえた瞬間、ぼくの中に何とも言えない気持ちが込み上がった。頬が緩む。口角が上がってしまう。ダメだ。こんな顔、ぼくには似合わない。

「……………そう、ですか」

素っ気ない感じに答えてから、ぼくはさっさとベッドインした。顔を見られたくないから掛け布団を大袈裟に被る。

ツルギさんが呆れ笑いをしてる気がする。

「……………そんじゃ、お邪魔します」

「ごそごとと布団の中に人が入ってくる感覚。過去のぼくなら耐えられないだろう。人間不信に陥っていたから。そういえば、ここに来てからは人を信じないということの方が少なくなった。神様が精神制御とか、そんなことをしてくれてるのだろうか。だとしたら、この気持ちは嘘に。……そんなこと、あるはずないか。」

「アインさんは最初の頃少し怖かったけど、魔法を教えてもらってるときにアインさんの優しさを垣間見た。お鍋奢ってくれたりとか。」

「……………」

「すぐ後ろに、今さっきキスした相手がいる。そう考えるだけで声にならない悲鳴的なものが出てきた。」

「なに身体を強張らせてんだよ。悪戯なんかしねえから安心しろ」「……………そんなこと言いつつ抱きしめてくる人のことなんか信用できません」

「あはは……………、いやだってお前って、なんて言うかさ……………」

「すっげえ暖かそうなんだもん」

「……………そんなこと、始めて言われた。」

「いつも周りから冷ややかな目で見られていた。目で、目で、その目で。潰してやりたかった、あの目で。この世界に来て、良かったのかもしれない。」

「……………もしかして、神様は同情してくれたのかもしれない。だからぼくを殺して、新たなチャンスをくれた。ぼくが死んだ理由は忘れただけ、きつと、そうなのかもしれない。」

「……ツルギさん」

「なんだ？」

「暖かいです……。本当に、すごく……」

何故か涙腺が緩んだ。人の暖かみなんて感じたことがなかった。ぼくにとつての人間は敵で。

ぼくにとつての他人は害で。

ただただ、殺してやりたい衝動を抑えるのが大変な毎日だった。大学に上がれば、少しは他殺志願的思考も治まるだろうと思った。だが、それは治まるどころか悪化していくばかり。

風船を持って笑顔で親と手を繋いでる子供が妬ましくて、友人と笑って会話してる奴等が理解できなくて、

いつも同じ時間に仕事に行つて残業してくる大人が馬鹿馬鹿しくて、

いつも同じ場所で談笑している老人達が、ただ煩かった。

「お前、寂しかったのか？」

びくり、と。身体を震わせた。まるで過去を読みとられたのかと思つて、身体が硬直した。

「……お前は死神として孤独だったのかもしれない。過去を教えたくないから、いろいろ予想してみたんだよ。んでき、死神なんて種族、マスターも聞いたことがないんだよ。……そこで出た結論が、『お前が孤独だった』ってことなんだよ」

そついつのは、言わないからこそ良いのではないのだろうか。

本当、口が軽い人だ。

けどまあ、良かった。過去が知れた瞬間、ぼくは……ツルギさん

に……きら。

ぎゆう、と。ぼくを抱くツルギさんの腕に力がこもった。

「今のお前は孤独じゃねえよ」

「……………」

「孤独なんかじゃねえ。独りなんかじゃねえ」

「……………」

「せめて今日くらい、俺に甘えろ」

「……はいっ」

涙腺が、緩みに緩んで涙が出そうだった。泣き方なんて、疾うの昔に忘れていた。だというのに……。

* * *

うわ、恥ず。なにこの回想。ぼくって人に飢えてたの？ ぼく自身すごく吃驚……。と、とりあえず。

「ツルギさん、そろそろ起きてください」

時計を見ると、時間は五時。いつもより一時間だけしか変わらない。早く起きないと予定が狂ってしまう。

「む、むう……。なんだ？ もう朝か？」

「そうですね。ほら、起きてください」

「キスしてくれたら起きてやる」

「馬鹿なこと言ってる……」

左腕の袖を捲った。

「なんでだよ……。昨日は自分からしてきたくせに」

寝起きとは思えない程記憶がすっかりしてやがる。まさか……。本当は起きていたのでは？ それでいてぼくに抱きついていたのでないだろうか。うわ、殺したい。

「まったく……。まあいいです。早く下階に下りましょう。荷物はもう詰め込んであるんで、後は朝ごはん食べるだけなんで」

ということで、朝ごはんは本当に大量に作られていた。
なんでも、

「クロキの長旅を応援するためだからな。なんにも、決別というわけじゃねえ。絶対に帰って来いよ」

とのこと。マスター、貴方はどこまで聖人なんですか。ぼくには到底まねできない生き方だと思った。

んで、ぼくは着替えのワイシャツ四枚（マスターが随分前に買ってきてくれた）が主な荷物であるウエストバッグを装着。酒屋の皆に別れを告げず、ただお礼を述べて店を後にした。

そう言えばツルギさんの姿が見えなかった。なんでだろう。いや。寂しいか思っていないから本心。

町の出口へと向かう。門に、背中を預けて腕を組んでるツルギさんがいた。

「……よう」「とツルギさん。

「……よう」「とぼく。

とりあえず同じ感じに返してみた。ぼくに似合わない軽い挨拶になっちゃった。

まあいいけど。とりあえず、ツルギさんの前に行く。

「なんでさっきいなかったんですか」

「こっぴどかったから」

「きやうつ……」

抱きしめてきた。身長差のせいもあって、ぼくはつま先立ちになっちゃった。しかもそのまま、無理矢理に、ツルギさんはぼくの唇に唇を重ねた。

「……」

「……ぷはっ」

たっぷり十秒。一年間よりも長く感じる十秒だった。

「……昨日のお返しのつもりですか？」

「……その顔、今日は隠せねえぜ。真っ赤にしちゃって、可愛いじゃねえか」

あっ……。。

「……精々頑張れや。いつでも帰ってきて良いんだからな」
「……はい、ありがとうございます」

同じく、別れを告げず、お礼だけを述べて、ぼくは森に向かって歩き出した。

* * *

「ツルギSide」

「まったく。始めては俺からキスしようとしてたんだがな。昨日、取られちゃったからって今日唇を奪うのは少し卑怯だったか？ まあいいか。」

仕方なしに町に戻っていく。今の俺の顔はきつと満足気に笑っていることだろう。

「よう、ツルギーくん」
「……んだよ」

目の前には酒場にいるはずの野郎共。

「いや、最後まで見送ろうとしたらなんかカッコつけたお前がいるじゃない。クロキちゃんとのらっぶらぶな空気を邪魔するのも気が引けたからよ、見守ってたらなんだ？ いきなりキスかよ」

「み、見てたのか……テメエ等……」
「もち、ばつちり見てたぜ！」

「テメエ等全員切腹しやがれええ！」
「うっお、ツルギがキレた！ 逃げる！」

まったく。騒がしいのは変わりねえ、か。
いつも静かだったクロキが恋しくなりそうだけ。

* * *

くクロキSideく

フェイトがくれた地図は魔法が宿っている。なんの比喩もなく。

「……便利だな、これ」

魔力を込めると自分の居場所が赤い点で示されるのだ。なかなか便利。なかなか秀逸。

太陽の位置で東西南北くらい分かる。地図とそれらを照らし合わせる。……どうやら順調に西南方向に進んでいる様だ。

「さて、いつまでも見てると魔力切れが怖い。さっさと歩くことにしようか」

三キロ。なかなか長いが、一時間とかでなんとか出られるだろう。

すたすたと。変な鳴き声を聞きながら森を抜けていく。

一時間半後。

意外と時間を喰ってしまったが、やっと森を出た。そしてそこで目に映ったのは何気にアスファルトで固められてる道だった。やばい。久しぶりに見たアスファルト。抱きつきたいぜアスファルト。

「……そんなことしてたら薬やってんのか、とか疑われそうだな」

故に自重する。自重は大事だよ、うん。兎も角、この道を通つ直ぐ進んでいこう。アスファルトで出来た道の両端には木が埋まっている。もし野宿になったら木に寄りかかって寝よう。そう考えながら歩を進めた。

* * *

本当に夜になってしまった。遠くに町の明かりが見えた。ぼくが今さっきまでいた町とは大きく違い、大きく近代的な建物が見える。初日、あそこまで歩いていけばぼくは今頃オスティアについていたことだろう。いや、前まではメガロに行こうとしてたんだっけ。旧世界への《ゲート》があるから。そういえば、神様からの手紙がまったくなくなってしまった。まあ、良いのかな。神様もきつと忙しいのだろう。

しかし、一つだけ問いたいことがある。《リカバリー》が空から降ってきたとき。あれは神様からの贈り物だったのか。それとも、この世界にも《あちら側の世界》に繋がる《ゲート》があるだろうか。不確定要素はできるだけ取り除きたい。まあ、その内分かるだろう。

「……仕方がない。もうちょっとだけ歩こう」

あの歌を口ずさむ。ぼくには似合わない、あの歌を。

上を向いて、歩こうよ。涙がこぼれないように……。

* * *

がやがやと、夜になっても騒がしいのはどの街も共通なのだろうか。

宿を探さなくてはいけない。いや、この町なら裏路地で寝れば大丈夫か。十分な寝返りが打てる空間があれば、大抵の場所で寝ることが出来る。自慢できないほどの特技だ。

「……とはいえ、身包み剥がされたら元も子もない。やっぱり宿を探すか」

治安の悪さは前の町よりマシ。だがそれでもお金を取るうとする族はどこにでもいる。きちんとした宿を探すことにした。

「ふあゝ。さすがに一日中歩くのは疲れたな……」

この町の名物なのか、大々的に展開されていたパン専門店を買ったチヨココロネの様なパンを頬張りながら、ホテルの一室でぼくはくつろいでいた。

ベッドにうつ伏せになり足をバタバタ。パンを啜えながら地図を開く。

「……あんま進んでないな」

精々六十キロか。百キロにも及んでいないとは……明日から急がないと、少し危ないかもしれない。それこそ浮遊術でも使うべきか。いや……ここでひと暴れしておくのも一つの手ではないだろうか。……関係ない人を巻き込むのは少し気が引ける。やっぱり止めよう。

「はあ、さつさと暴れないと、あの町にMMから調査員が来るだろうからなあ」

そうだ。ぼくがあこの町を出た大半の理由がこれだ。調査員があこの町に行ってしまったら、ぼくがあこの町を出た理由がなくなってしまう。仕方がない。ここは浮遊術でも何でも使ってもいいからオスティアに行こう。

そう考えて、寝がえりをうつた。仰向けになってチョコココロネを食べていく。

「……甘いなあ」

甘い甘い。本当に甘い。チョコが、甘過ぎる。
甘過ぎるのは、嫌いだ。

Out of control (後書き)

初めての感想を貰ったときの嬉しさってのは何とも言い難いよね。

うるさいのでもう黙っててください。(前書き)

今回から少々急ぎ足になるから、文章力とかに期待すんな。え、期待なんか元からしてない？ うるせーやい。

うるさいのもう黙っててください。

あの町を出てから数日。やっとオステイアについた。本当はもつと時間がかかる予定だったのだけれど、急いでいたらこんな早くについた。

オステイアについて一番、『立派な魔法使い』に依頼を頼める場所に向かった。

それにしてもさすがオステイア。祭りじゃなくてもかなり騒がしい。原作でネギ達がいいたのはグラニクス周辺（つばかった。ぼくの記憶では）。あそこに行こうとも思ったけど、なにか事件を起こすにはやっぱりオステイアでしょ。

ちなみに不法侵入ですよ。密入国です。だって宙なんだもん。浮いてるんだもん。

「それで、どんな依頼ですか？」

「この町の北にある港で、お金を取られたんです。『正義』を掲げる『立派な魔法使い』なら、助けてくれますよね？」

「ええ、勿論。では……チーム・ドラゴンをそちらに向かわせます。貴女は安心して待っていていなさい」

「あ、いや。ぼくもそちらに向かいます」

「そ、そうですか？ まあ、良いですけど……」

ということ、チーム・ドラゴンとかいうマジステル・マジ達と北の港にいるわけです。

どう見ても極悪人な面ですけど……。どうなんだろう。やっぱり魔法使ってこんな感じなのかな。

「で、その泥棒はどこにいるんだ？」

「ここにいますよ?」

「は? 嘗めてんのか、嬢ちゃん」

「ですから、ここにいますって」

左腕の裾を捲つて、ミスティッカーを曝け出す。

「貴方達には少しばかりの犠牲になってもらいます。ぼくのためなんです。では、起きろ、ネクロマンサー。喰らい尽してやるう」

ミスティッカーをなぞり、ネクロマンサーを出現させる。

そして目の前にいた二人を、両断した。血飛沫が、その場に降った。

「なつ……! 貴様、騙したのか!!」

「騙された方に問題がある。違いますか?」

二人殺して、残るは五人。あと四人だけかあ。まあ、十分だろ。

なあ、ネクロマンサー。

「ミスティッカードライブ、《ジェノサイド》」

ジェノサイドを重ね貼り。ネクロマンサーを虐殺モードに切り替える。

刃節が生まれたネクロマンサーを横一線に薙ぎつた。

「ぐああ!!!」

「な、な あああ!!!」

「ぎゃあああ!!!」

「痛っ! ぐわあああああ!」

最初の、鞭の様な一振りで二人を殺し、次のもう一振りで更に二人を殺した。

蛇……いや、龍のように動くこの剣に、捕らえられない物は恐らく無いだろう。

「あ……ああ……」

「おい、お前」

「は、はいい!!」

ジェノサイドを外しながら話しかけたらビビられた。まあ、そりゃそうか。目の前で七人殺された。残ったのは自分一人だけ。尋常な精神状態ではいられないだろう。

「MM元老院に伝える。あんたらの下部組織にいる奴の息子を追いだした本人は、これよりメガ口で虐殺を行う、ってね。できるよね？」

「は、はい！ できます！」

「じゃあ今すぐしろ」

「……へ？」

情けない声で聞き返してきた。だから、ネクロマンサーを地面に斬ツと突き刺して脅しながらもう一度言った。

「ヒィー！」

「念話でも何でもできるでしょ。MMの誰でもいい。虐殺を行うから、準備しておけて伝えると言っているんだ」

「はい！ 分かりました！ だ、だから命だけは……！」

「うん、良い子だ。じゃあ、早急にね」

それから魔法使いはテレパシーを使い始める。ちゃんとぼくの声が聞こえる様な声で言ってくれてる辺り、本当に小心者なのだろう。

「おい！」

どこからか声が聞こえた。どうやら、こここの騒ぎを誰かが通報したらしい。警備の様な人達なのだろう。少し立派なローブを着ている。

「これをやったのは貴様か？」

「……………ふん」

男の視線は下半身と上半身で別れている男たち。

内蔵の断面が見えていて、耐性のない人が見れば吐くこと間違いなしな状況だった。さて、ここで問題だ。この警備員にはどう対処すべきか。

一、殺す。

二、殺す。

三、殺す。

オツケイ、殺すだ。

瞬動で一気に距離を縮める。瞬動の勢いを殺さぬまま、剣を横一線に薙ぎきる。縦に斬る気はない。だってなんかホントにグロそうだ。直後、警備員らしき男の上半身が飛んだ。下半身から鮮血の噴水が噴き出る。

「ヒイイイ……！」

さつきからヒイヒイうるさいなあ。
……念話は終わったのか。そんな目線を送ると男は首をぶんぶん
と縦に振った。

ぼくは人間じゃない。

死神だ。今は死神。

他人を殺すことくらい造作もない。

弱者を殺すことくらい簡単なのだ。

微塵の躊躇も刹那の遠慮もなく、斬殺できる。惨殺できる。

「……生きたいかい？」

「は、はい！ どうか、どうか!!」

「じゃあ、逃げなよ。なんで逃げない？」

「腰が……腰が、抜けて……」

「ふう、ん。じゃあさ、もう一つだけMMに伝えてくれる？」

男はもう一度、首を盾に振った。

「『自分を殺そうとしたのは死神だ』。そう伝えてくれるかな」

『げ、元老院様……。お、おお、俺を殺そうとしている、のは……』

し、死神、……です」

「じゃあもう念話は良いよ」

「は、はい……」

息がとても荒くなっている。目には涙が浮かんでいる。なかなか
に滑稽な表情だった。

そして、ぼくは男の身体に自分の身体を重ねた。

「ねえ、暖かい？」

「は、はい……。あ、暖かい……です」

「そう。でもね、ぼくは人間じゃない。『死神』。その暖かさも、なにもかも、嘘で塗り固められてるんだ。それはもう、悪い魔法のように嘘で欺き期待を裏切る」

それは、死刑宣言。

「じゃあ、ぼくの餌になってよ。良いよね？」

「はい……」

気付けば、いつの間にか男の眼は虚ろになっていた。ぼくは幻覚もなにも使っていない。そもそも、幻覚は使えない。そんな魔法は知らないからだ。

……まあ、丁度良い。

「肯定ありがとう。そしてバイバイ」

身体を引き離し、男の体を　。

「おい貴様！」

ちっ。

後ろを見ると、大量の魔法使い達が迫ってきていた。

どうやら虐殺はここまで。まあ、八人の魂を貰えたんだ。僥倖と言えば僥倖だろう。

ぼくは港から飛び降りた。オステイアでもうちよつと過ごしたかっただけ。でもまあ、さつきまでは寄り道なんてできなかつたし……。

まあ、適当に魔法世界を飛び回ろう。

ちなみに、初めてのスカイダイビングはかなり怖かった。

* * *

あれから一カ月後。適当な町を見ると「死神」と書かれた賞金首の張り紙が貼ってあった。百万の賞金首……。これを殺せば、金が入る。と、思ったら「死神」というのはぼく自身のことだと分かった。特徴のところに「茶髪、学生服、髑髏のステッカー」等の特徴が書かれていた。ううむ……。これが貼ってあるということはツルギさんの所にもこの様な情報は行っているのだろうか。かなり気になる。

* * *

メガロメセンブリア元老院・とある幹部の自室

「本当に情報はこれだけなのかね！」

「は、はい……」

俺は今、地獄を味わっている。

チーム・ドラゴンで俺だけ生き残って……。俺等を雇っていたメガロの幹部さんに怒られている。

怒るといふより、焦っているのだろう。

だけれども、あれから一ヶ月。死神の犠牲は出ていない。俺には、どうもあの女の子が悪い人だとは思えなかった。仲間が目の前で殺されておきながら、なにを思っているのだと自嘲する。

暖かかった。死神とは冷たいものだと思う。魂を狩るのだから、

そりゃそうだ、と。だけれども、あの子の身体は暖かった。柔らかかった。あんな華奢な身体のどこに人間の体を両断できる腕力があるのか、想像すらできなかった。

「失礼します」

「ああ、なにか思い出したら、すぐに報告しろ」

この人は苦手だ。元から俺はメガロの犬になる気なんてなかった。だが、俺が属していたチームドラゴンのリーダーが、「MMの部下になれば『立派な魔法使い』も同然なんだぜ!？」と、血迷った結果なのだ。彼と俺は親友だったから。だから……。

「はぁ……」

幹部さんの部屋から出た後、俺は何をするもなく、ただ外に出ていた。気分転換しなかった。

「……っ!？」

妙な違和感。ぎしり、と。身体が軋んだ。

「なあ、お前え」

ねっとりした口調の男が、俺の後ろにいた。

「ブレイザーって知ってっか？」

急に問ってきた。分からない。ブレイザーって、なんだ。

「俺さあ、ブレイザーなんだよねえ。はは! 転生してきちゃった

んだ！ はは！ ははは！ ブレイザーの力を手に入れた俺は最強だ！ 行くぜ、ミスティックカードライブ！」

なんだかテンションが滅茶苦茶な人だった……。

そして彼は、ステッカーを腕に貼った。

……何とも言えない、既視感。

彼は、腕に貼ったステッカーを、指先でなぞった。

「……あれ、は……」

死神。

まさか、他にも死神がいたのか？ そして、仲間が殺し損ねた俺を、殺しに？

「ヒヤッハー！ 俺は力を持ってる。だから、弱者のお前は死ね」

男の腕には、豹でデザインされたステッカー。そして男の隣に立つのは、四足歩行の、肉食獣。氷で覆われた、豹。

「やれ、フリギットクアール《豹雨》！」

「ガールルル……ガアアア！」

唸っている肉食獣が、俺に向かって猛攻を仕掛けてきた。

くっそ、なんなんだ！？ あの死神は剣で、今度は獣か！ なん

なんだよ、死神って！

ドオツオオオオオオン！！

「うわあ！？」

喰われる！ そう思って目を閉じた。だがやってきたのは痛みでは無く、爆音。

顔をあげた。そしてそこに立っているものを見て、俺は愕然とした。いや、座っている、というべきか。

巨大な大剣を地面に突き刺し、その大剣の上でしゃがんでいる少女が一人。

「こんなところでなにをしているんだい？」

「っ！？ そ、それは……ネクロマンサー！？ 貴様、転生者か！」

グレーのミニスカート。あの時にこびり付いた筈の血は、どこにも見当たらない真っ白なワイシャツ。茶髪に青いカチューシャ。頭の上にある、少しだけ可愛らしく見えるアホ毛。

この前の死神が、そこにいた。肉食獣が、大剣の刃に噛みついていた。

「ガウツ！ ガルルツ！」

「こいつは……フリギットクアール？ フレンドミスティッカーを好むのかい？ 転生者」

「テムエ……女のくせにネクロマンサーなんか使ってるじゃねえ！」

「あれはクロキが使うから良いんだ！」

「残念、今のぼくの名前もクロキなんだ」

「あ？ お前男なのか？」

「さあ？ どっちだろ」

ちらりと。俺の方を見てきた。なにかの合図、だろうか。分からない。

ただ、分かったことが一つ。この二人は、仲間なんてものじゃない。

「……逃げないのかい？ それとも、この前みたいに腰が抜けちゃった？」

唐突に話しかけてきた。本当に唐突だったから、頷くしかなかった。

彼女は、笑うこともせず、「そっか」とだけ言って大剣から下りた。そして、大剣の柄を取り、ぶおんと風を斬りながら男に切っ先を向けた。

「魂喰われたくなけりやさっさと失せろ」

「……………断る、と言ったら？」

男が不敵に笑った瞬間に、彼女は動き出していた。瞬動で男に急接近、剣を横一文字に振った。とはいえ、俺にその「横一文字に振るう」という過程は見えなかった。ただ、振り終わった後の剣の位置から測った想像に過ぎない。

俺の混乱している頭で考えられることは、何一つとして無かった。それ故、その剣を先程の豹が主人を護るために動いていたことも、分からなかった。

「へっ！ こいつは俺を護るためだけの存在なんだぜ？ 更に、こちを忘れて貰っちゃ困る」

男はそう言いつつ、懐から何かを出した。ここからだとなんなのが分からないが、どうやらステッカーの様だ。

「見たこともないミスティッカーだ。ゲームしかやってないからかな……………」

「ああ、まあ悲観することはねえって。これは神様に貰ったオリジ

ナルミスティックカー。だからお前が知らなくても当たり前なんだぜ。他にも一式取り揃えてるぜ。《神立》《氷縛》《炎樂》《黒幻》《風燕》。こいつは《氷縛》。無限に氷のエネルギーを作り出すミスティックカーだ」

自慢げに語っていく。だが大剣を持つ子はあまりそれに興味がないらしく、ぼーっと空を見ていた。男はその態度が気に食わないのか、《氷縛》とかいうステッカーを、豹が貼ってある反対側の腕に貼り、指先でなぞった。

「な……なんだ、あれ……」

声が漏れる。そこにいる男の手には氷が纏わっていた。巨大な氷で出来たかぎ爪が、鈍く光っていた。

魔法、じゃないよな？ ステッカーを貼って展開させる術式や魔法を、俺は知らない。俺が知らないだけで、本当はあるのかもしれないが。事実、彼女が持つ大剣と彼が従えている獣からは巨大な魔力が垣間見えている。

「今お前の大剣はその《道具》で止められている。つまり、この爪を振りおろせば、俺の勝ちってわけだ。どうだ？ 敗者の気持ちってのは」

うざい。

そう思った。今すぐぶっ飛ばしてやりたいと思った。けども、身体が動かなかった。

彼女の背中から、黒いナニカが見えた気がして、怖気を感じた。

「敗北。敗走。それらの苦汁を舐めてきたほうが、今更そんな気持ちなんて分かるはずじゃないか。もう、麻痺しているんだよ。慣れてしまったとも言っけどね」

そう言う彼女の背中はどことなく寂しそうに見えた。

彼女は、バックステップで男から離れた。そして大剣を肩に担ぐ。必然的に、髑髏と俺の眼が合う。その眼は微弱に光っていた。目なんてない筈なのに、髑髏の眼が笑っている様な気がして恐怖した。つくづく思う。俺は、小心者の弱者なのだ。骸骨如きに恐怖を感じるなんて……。

「敗者の存在理由って知ってるかい？」

「あ？」

「勝者を生みだす為の存在、なんだってさ」

「……なにが言いたい」

「いや、特に何も言いたい事はないよ。ただ、敗者にだって存在理由はあるという、ぼくには到底似合わない前向きなことを言っただけさ。それじゃあ、始めようか」

彼女は、死神は、俺の仲間を殺した時に貼っていたステッカーを取り出した。

俺は知っている。あれは、あの大剣の形態を変えるためのものだ。男は知らない。その強靱なまでに最狂で狂人なまでに最強のステッカーを、知らない。はずだった。

「ジエノサイドか？ 残念だが、俺は原作も読んでんだ。それがどうなるかくらい、知ってんだぜ？」

原作を読んでいた？ どういう意味なのだろうか。

まあ、意味は分からないが、男は彼女がこれからすることが分か

ついているらしい。あれは不意打ちこそ恐ろしい技だ。

「ふうん。それがなに？」

それでも彼女はステッカーを腕に貼り、指でなぞった。大剣に、刃節が生まれる。

「ふん！」

風を斬る音。それから、ジャラジャラと大剣の刃節が伸びていく音。

一度見た俺だからこそ言える。あの大剣が描く軌道は、龍の動きそのものだ。

「くっ……」

男は避けることもせず、氷の手でそれを受け止めた。それが正解なのだ。避けても、第二撃がくる。しかもその追撃は予測不可能。それは、俺の友人が持つ『鞭』の特性と同じなのだろう。

しかし、彼女が持っているのは大剣。鞭のように小回りが利かない。その代わりに、遠心力が加わった巨大な剣は、強大な力を持つこととなる。

彼女は腰を捻って剣を引く。それと同時に大剣の刃節も、相手の氷の手を削りながら元に戻っていった。がしゃん、と音を立てて刃節を納める。

「へえ、これくらいなら斬れないのか……。じゃあ、次」

彼女の口調は遊んでる様に軽い物だった。それが、何故か恐怖を誘う。恐ろしい。何が恐ろしいのかは分からないけれど、とりあえ

ず何かが怖かった。

それから、三撃目。遂に男の氷の腕は砕けた。

「……………」ニイ。

「……………」

しかし、それこそ男の《誘い》だった。彼女のすぐ横には豹が潜んでいて……、

「《魔法の射手 炎の五矢!》」

俺が、それを撃ち抜いた。

「ガル!？」

豹も、まさか俺から攻撃が来るとは思っていなかったのだろう。矢は直撃。反動で豹は地面を滑った。しかし、どうも俺の魔法の矢はそれほどの威力がないらしい。貫くまではできなかった。

「ちっ、おい、その兄さん。邪魔しないでくれっかな」

「……………そっちは二人で、女の子が一人。そんなの、酷いと思わないか?」

体中が冷や汗でびっしょりなのを隠す様に、笑ってやった。

「思わねえな。そっちはネクロマンサーだ。魂喰。魂狩り。強力過ぎんだよ、そいつが持つてる武器は」

反論はできないが、反抗はできる。

震える足に鞭を打ち、彼女の隣に立った。

「……どうして」

声が聞こえた。震える様な声だと思った。それが隣から聞こえていなければ、彼女の声だと気付けない様な声。さっきまでのクールさはなく、ただ吃驚した女の子の声だった。

「……」

答えは見つからなかった。本当、なんでこんなことしてんだろっ
な、俺。俺は頭に被っていたローブを脱いで、顔を見せた。

信用の意味を込めて脱いだ。

「……死んでも知りませんから」

「ああ、死んでも良いよ。あいつらの場所に行けるなら、それはそ
れでいい」

「……」

彼女は黙ってしまった。少し無神経だっただろうか。俺の仲間を
殺したのは、この少女。本当は言っと、逃げ出したい。復讐なんて
せず、今すぐにも逃げ出したかった。

だけど、見てしまった。コイツの、孤独感を読みとってしまった。

「……そう言うことらしいよ。君の名前なんて興味もないから、こ
のままにも言わずに死んでいってくれよ」

「……」

「……」

女の子の発言とは到底思えない……。俺だけじゃなく、男まで黙って。

「くっ……くっ……」

いや、笑っていた。

「お前に、敗者つてのを教えてやるよ。勝者を引き立たせるのに役立つだ？ 引き立たせ役なんか、こちとらもう御免なんだよ！！」
「ミスティッカードライブ、《ナーガクイーン》！」

また、男はステッカーを腕に貼った。豹のステッカーの上に、重ね貼りした。

この子の大剣の様に、なにかしら豹に変化があるのだろう。そう思って、豹を見た。

豹の姿が、形を変えていた。豹の身体から、数匹の白い蛇が生えていた。

「……ねえ、やっぱり下がってて」

「で、でも……」

「分からないの？ ぼくは邪魔だと言っているんだ。あれを仕留めるのに、君は邪魔だ」

頼りがいのある、女の子の笑いだった。

* * *

くろキSide

今はぼくの後ろに立っている男。よく分からない男だった。ツルギさんよりは分かりやすいけど、それでもあまり良く分からない人だ。まあ、そんな話はまた後でにしよう。

男は奥の手を見せた。レジエントならば、

「……こちらも、其れ相応のものを見せるべきかな」

そう言いながらネクロマンサーとジェノサイドの上に、黒龍紋を貼ってなぞった。

ネクロマンサーが黒い炎に包まれる。

「氷結!!」

「《ブルーデストラクション》!!!」

「……くっう!!」

相手から一直線に、ぼくを氷棺に閉じ込めるべく迫りくる氷の砲撃。それを、ぼくはネクロマンサーを前に突き出すだけで防ぐ。無論、所々凍っていく。……少し寒いなんでものじゃないな。冬山登山で吹雪にあつて遭難した時並の寒さだ。

「だからこそ、隙がでかい」

これほどの火力を持つものを連射などできるはずもない。だから、これを耐えた後が本番だ。

……豪つと、より一層ネクロマンサーの炎の質を上げた。こうでもしないと、ネクロマンサーごと凍らされてしまいそうだった。くっそ……。神様からとんでもないもん授かりやがったな……。てか神様、なにしてくれてんだ。

「……ふう」

そしてやっと、氷のレーザーとも言える攻撃は止んだ。ここからが正念場。相手からすれば、ぼくの姿は冷気で見えない。だからこそ、剣を振るう。

「魂喰……」

たんつ、と地面を蹴り跳躍。冷気から脱出、男はさっきまでと同じ場所に立っていた。クアールも同じく。

「なっ！」

だからこそ、上から現れたばくに吃驚したのだろう。
黒い炎を纏わせた剣を、鞭のように振るった。

「《晚餐会》……！」

魂を喰らうべく、ネクロマンサーは意思がある様に動いてくれた。いや、動いたのだろう。自分で。自分の意思で。
なんせこいつは、魂を喰らう魔剣なのだから。

「ぐ、あああああー！」

男の腕、脚、腿、腹、胸、首。それらを斬っていった。

「が、はっ！」

首の一撃が決め手となったらしい。男はその場に倒れた。首とい

うか喉を斬ったから恐らくもう喋れない。だから、せめてもの情け。男の心臓目掛けて剣を突き刺し、そのまま剣を引きながら頭まで切り裂いた。

……完全なオーバーキルだね。まあ、良いじゃん？

脳漿みたいなの見えただけど気にしないことにする。

男が貼っているミスティッカー三枚と、他の四枚を剥ぎ取っていた。いや、使われないで処分されるよりは持ってた方がいいですよ。今のぼくは決定的なミスティッカー不足だからね。なにより、この男が言うには全部が全部無限にエネルギーを放出させることができるらしいじゃないか。便利なことこの上ない。

当分、ぼーっとしてたけど、ここはメガロメセンブリア内だということを思い出した。少しやばい状況だ。この場で見つかったら……。仕方ない。

「……………ねえ」

ローブを外した男の方を振り向いた。

「おえええ！」

吐いてた。

……そりゃそうだよな。こんな死体見れば。はあ、と溜息を吐きながら男の背中を擦る。

「こつした方が吐きやすいだろうから。あるもん全部出しとけ。」

「こつちです！ こつちで人殺しが！」

あ、なんか嫌な声が聞こえてきた。
仕方がない。

「ちょっと、失礼」

男を抱えて、ぼくは跳躍した。そりゃあもう空高く。

「おえええ！？」

ああ……ほんとごめん。

しるまいのでまじ黙っててください。(後書き)

サブタイを考える気ねえなもうこれ。

生きて生きて生きて死ね

道なき道を歩く。砂漠はとても熱い。肌に悪そうだ。まあ、死神のぼくにはそんなの関係ないんだけど。ワイシャツが長袖だから少しやばい。熱い。

「あの……クロキさん……」

後ろから声がした。最近できた助手的な存在。「ついてくるかい？」と言ったら「はい」と即答してくれやがったよ。ぼくがどんな人間……いや、死神なのも知ってるのに、もの好きな人間だ。

「なになかな、なるだけ手短にお願いできる？」

砂漠の中での体力消耗は避けるべきだ。

「いつまでこんなところ歩くんですか……」

ぼくは思わず彼の顔を見た。

普通な顔だ。特徴と言えば目が二つに鼻と口が一つあるくらいだろう。そんな顔を見た。異物を見るかのような目で見ておいた。

「え、えつと……クロキさん？」

「君はそんなことを訊かなくちゃ生きていけないのかい？」

「そ、そういうわけではないんですけどね？」

「ならそんな無意味な質問はしないべきだ」

ちなみに、今ぼくはフェイト達がいる『墓守人の宮殿』に向かうとしてる。まあ、ついでに魔法世界観光でもしてから行こうというわけだ。いや、地図を見ておきながら道に迷ったとかないから本気と書いてマジで。

とにかく、砂漠を歩く。とにかく只管に歩く。

「……はあ、仕方ない。ここらで一時の一休みと行こうか」

無限エネルギー生成ミスティッカー《氷縛》を腕に貼ってなぞる。ぼくの腕にはなんの変化もない。その手を地面に押し当てて、《氷縛》に魔力を注ぐ。

こつこつというミスティッカーは、こんな使い方もあるんですよと。

バキバキバリパキンッ。

「……氷で出来た家完成」

「そんな使い方ありますか……」

「ありますよ」

「……さいですか」

「さいですよ」

家と言っても一部屋分だけだからね。小さいよ。どちらかと言うと洞窟とも言える。あれ、なんて言うんだっけ？ 雪で作る家みたいな。……まあいいか。

とりあえずで氷で出来た部屋の中に入った。自然と融けることはないから安心できるというものだ。なかなか入ってこない彼を手招きして誘う。

彼は溜息を吐きながら部屋の中に入って来た。

「おー、涼しいつすね」

「そりゃそうだよ。床も天井も壁も氷なんだから」

と言つても、寒すぎない様に調整してるよ？ 熱い所から急に寒い所に入ると体調を崩すからね。

「ところで、アドニス君」

「……なんですか？」

「ぼくは今欲求不満です。さあどうするべきでしょう」

「自慰すべきです」

「寂しいよ」

「じゃあ自重しといてください」

「そうさせてもらつよ」

適当な雑談を挟んでからぼくは地図を広げた。

今自分がいる場所はテンペ。砂漠って辛い。それにしても、と思
う。

「……なんでぼく等は今こんなところに来てしまったんだろう」

「クロキさんの方向音痴が発覚した後にそれを言いますか」

「……………」

目を逸らした。

なんだかぼくのキャラが壊れてきた。悪い方向に。

というか、この地図に書いてある『墓守人の宮殿』が小さすぎるんだよ。だから見失っちゃうんだ。仕方のないことなのだ。そう割り切つてほしい。

「それより、そのフェイトって人は信用していいんですか？」

「いや？ 彼はこの世界の崩壊を目指してるから、お世辞にも良い

人とは言えないよ」

「……………」

暫しの沈黙。

「は！？ 世界の崩壊って……極悪人じゃないっすか！？」

沈黙した分を吐きだすかの如く大きな声で言われた。
少し耳が痛くなった。

「そういう妙な価値観や固定概念は取り払うべきだよ、アドニス君。この世界は魔力枯渇してるらしいよ？」

「魔力枯渇？」

「旧世界で言う自然破壊。温暖化だね。魔力がなくなっていけば、魔力で構成されたこの世界は消えていく。そうなれば、魔法世界の住人は消えていき、旧世界出身の者は荒れ果てた荒野……というか、火星に放り出される」

アドニス君はぼかんと口を開け、そのまま固まってしまった。

うつむ、室温設定が寒すぎただろうか。魔力コントロールで部屋の室温を少しだけ上げてみた。

……効果はない様だ。

「で、でも！ それがこの世界を崩壊させる意味に繋がるんですか！？」

「彼等は魔法世界人を《完全なる世界》、言わば《楽園》に送るそうだよ。それから世界をリライトする。リセットとも言っけどね。そうなれば魔法世界人は晴れて、全員が全員天国逝きというわけさ。これは、喜ぶべきことだと思うよ」

「……………でも、この世界の……特にメガ口は、旧世界人が大量に

います。魔法世界人だけしか、救われない！」

「うお、意外と頭は回るのか。まあ、ぼくには関係ない話だからなあ。」

「そんなこと、ぼくに言わなくてもいいかな。君も、他に気にすべきことがあるはずだよ」

「気にするべきこと……。貴女はその「ぼく」って言う一人称を変えなきゃです」

「大きなお世話……」

それでも「私」とか言うのは抵抗があるんだよ。

「ぼくだって精神的には男……。いや、もう男じゃないのかな。どうしよう。私って言うべきなのだろうか。」

「……。まあ、一度定着した呼び方と言うのは例外なく変えづらいものだよ」

「うわ逃げた」

「うっさい。」

兎も角、だ。フェイトを探すのではなく、フェイトに探してもらおうというのはどうだろうか。こんなことなら仮契約でもしておくべきだっただろうか。だけどアーティファクトも念話の範囲限界があったしなあ。まあ、取り敢えず暦ちゃん辺りがひょこっと出てきそうだし、少し寝て待とうか。

「こんなところで寝たら風邪ひきますよ」

「ぼくは死神だよ。風邪なんてひかないさ」

「……。そういうもんなんすか」

「多分」

「多分!？」

とにかく、寝よう。なにか悩みごとがある時は寝るのが一番なのだ。

* * *

〈アドニスSide〉

なんだか分からない人だった。前まで恐怖を感じていたのに、今はまるで恐怖を感じない。それどころか愛でてやりたいくらいに愛らしい。……だけでも触れればまた恐怖が待ってる気がする。兎も角、あれだ。この子は猫だ。それもいつも不機嫌な猫だ。少し触るだけで怒る。少し話しかけるだけで怒る。そんな存在のようだ。

「はあ……俺、なんでこの人についてきたんだろう」

それも、何故かこの子に対して敬語になってしまふ。逆にクロキさんはぼくにため口だし……。奇妙な関係だ……。

「すう……すう……」

いつの間にかクロキさんは寝ていた。てかマジで寝る気だったんすか。

規則正しい寝息は、女の子のそれ。忘れそうになるが、俺は今女の子と二人きりで部屋にいるのだ。……氷の純度は低く、外は見えないし外から見られることもない。

「……………まあ、卑猥なことをする勇氣は俺にはないわけで」

そう言いながら、俺も横になった。床はすごく冷たい。よくまあワイシャツミニスカ状態でこんなところで寝れるものだ。俺だってローブ着てんのにな。

考えながら、眠りにつくために目を閉じた。

* * *

くろキSide

「ふあ、あゝあ」

よく寝た……。今何時だろ。時間が分からない……。後で時計でも買っておこうか。仕方がない。外を見れば分かることだし。

「……………なんだ、もう夜じゃないか」

結構な時間寝ていたのか……。どうりで眠気を引き摺ってるのか。アドニス君は……寝てしまった様だね。しかし、夜となると砂漠で本格的に動ける絶好の時間なのではないだろうか。熱いのも引いてるし。夜行性の動物に気をつければ何とかなる。

「アドニス君、起きて」

「ん、……………んんー……………」

「……………ミステイックカードライブ」

神立を腕に貼って、感電。

「ぎゃふ!?!」

「やあおはよう」

「おはようじゃない! 痛い! 何今の?!」

「感電させてみました」

「殺す気ですか!?!」

「この程度の感電で死ぬなら君自身の柔な身体を恨みなさい」

「身も蓋もないことを……俺は貴女以上に酷い人を見たことがないです」

ジト目で言われたけど気にしない。とりあえず砂漠を歩こ

「あれー? なんでこんなところに氷の家があるのかなー」

なんか聞き覚えのある声が聞こえた。幼い女の子の声。果て、誰の声だっただろうか。

「あの、クロキさん?」

「ん?」

アドニス君に言われて、部屋の出入り口を見る。獣耳にショートヘアの可愛い女の子がいた。

……誰だっけ。

「な、なな……愛華さん……その男は……」

なにやら口をパクパクさせている。どうしたのだろう。

「ふ、不潔です! 早く愛華さんから離れてください!」

「うわ!?! な、なんで!?!」

……あー、思い出した。暦ちゃんか。いやーはは。名前覚えてたけど顔忘れてた。

「久しぶりだね、暦ちゃん。なんか背丈大きくなった？」

「は、はい！ 三センチくらい！」

「そっか、良かったね」

「ふにゃ〜」

頭を撫でると落ち着いてくれる子っていうのは扱いやすくて良いよね。

というか、こんな都合がよく暦ちゃんがいるわけないよね、普通でも幻覚って訳でもなさそうだ。夢特有の変な違和感もない。視線を感じて、もう一度部屋の外を見た。

「久しぶりだね、魂狩り」

「……久しぶり、フェイト」

どうやらフェイトが暦ちゃんを連れて来たらしい。何故だろう。

「君、今かなり有名人だよ」

「え？」

唐突に言われた。

「メガロが本気で探し回ってる。殺人者、誘拐者として追い回してるよ」

おやまあ。

「あの、クロキさん……あの子供は……」

「フェイト・アーウェルンクス。始まりと終わりを運ぶ者の使者だよ」

「なっ……！　こんな子供が？」

「見た目だけが年齢じゃないよ。それくらい、分かってるでしょ」
「ま、まあ……それはそうですが……」

「そんなことより、クロキ。君に依頼をしたいんだけど、良いかな」

フェイトが不敵に笑いながら言った。依頼……。なにをさせる気だ。

「旧世界でアルバイトしてみないかい？」

「……え？」

「勿論、今君がやるうとしてることくらい知ってるよ。大々的な組織を作って名を売ろうとしているのだろう？」

うわ、ばれてーる。

「で、君の組織をぼくが作っていったらあげるよ。だから、君は旧世界は日本、麻帆良学園、警備のアルバイトをしてきてほしい」

「……なんでかな？」

「嫌なら断ってくれて構わない」

「いや、理由を聞いてから決める」

「面白そうだから、じゃあだめかな？」

……アドニス君。ここにいたよ。ぼくより、身も蓋もないことを言う人が。

「いいよ。分かった。その依頼受け取ろう。代わりに、もう一つだ

「良いかな」

「ん？」

一拍置いてから、ぼくは静かに言った。

「ぼくが最初にいた町。あそこの安全を絶対保障して」

「……良いよ。分かった。約束しよう。ぼく等の部下を配置させるから、君は安心すればいい」

それならまあ、いつか。

そう納得したとき、暦ちゃんが声を上げた。

「あの、フェイト様……」

まるで懇願する様な目で、フェイトを見ていた。

「……ついていきたければ、行けばいいよ」

「ありがとうございます！」

言われた直後に笑顔。果て、なにについていく気なのだろう。

「愛華さんは私が絶対護ります！」

……うん、予想はしてたよ。でも現実逃避したかったんだ。だってこんな小さな女の子を連れて、（暦ちゃんやフェイトからすれば）敵である麻帆良に行くだなんて……、考えたくもないでしょ？

とにかく、アドニス君はここに残すことにしよう。一応彼を仮のリーダーとしておくことにする。

そう言ったらアドニス君がなにか沈んだ顔を見せた。

「で、ですけど……、俺は弱いです……」

「……やる気がないならそれでいい。クリユタエムネストラのとある町にツルギという、ぼくのす……」好きな人と言うわけにはいかないなあ……。」「ぼくが敬愛する人がいる。その人にリーダーになる様に言っておいてくれればいい。変わり、アドニス君。君は副リーダーとして活動してほしい。ツルギさんの補助だね。これは命令だから。君に拒否権はない」

「うぐっ……は、はい」

ふむ、副リーダーならいいのか……。なんだかよく分からないな。兎も角、ぼくと曆ちゃんは今世界に行くこととなった。

生きて生きて生きて死ぬ（後書き）

はい、急ぎ足終了。ここから少し集中していきまっせー。

貴女が私にしたこと全てをそのままお返しします。

旧世界は日本。そこには懐かしい光景が広がっていた。とは、言えないなあ……。

フェイトは《あの鍵》を使ってぼくと曆ちゃんを旧世界へと送った。そんな使い方できるのか……と、少し感心。曆ちゃんは始めて見る光景に少し度肝を抜かれている。斯く言っばくも吃驚だ。やっぱ、漫画で見ると現実で目にするのでは全然違う。この、麻帆良の、登校風景。

思わず顔が引きつった。

「……………」ぎゅっ。

「ん…………？」

曆ちゃんが手を握ってきた。表情を窺うと、少し不安そうだった。まあ、当たり前か。これ程の人間がアマゾン川の如く流れていく様は壮観である以上に不可思議であり奇妙な光景だ。それでも、漫画を読んでいたぼくからすれば、曆ちゃんよりは楽に移動できるというものなのだろう。

「やっ……………」

ぼくと曆ちゃんが立っているのは麻帆良中学の真前。女子中等部のため、女の子しかいない。男じゃなくて良かった。こんなところで男として立っていたら奇妙な上に珍妙な目で見られてしまう。

まあ、いつまでも突っ立ってるのもおかしいし、ぼくと曆ちゃん

の服はこの制服じゃない。結構目立っている。ということ、学園長室に向かうことにした。

* * *

（曆 Side）

こ、怖い……。それがこの光景を見た私の第一印象だった。一般人が大量にいる。思わず愛華さんの手を握ってしまうほどに怖い。というか、不安だ。

「曆ちゃん、耳とか尻尾とかは隠せないよね……？」

「は、はい……。帽子とかあればいいんですけど……」

「そっか。とりあえず認識障害の魔法を強めて貰おうか」

うっ……愛華さんには迷惑ばかりかけそうですね……。やっぱり魔法世界に残った方が良かったかな？

そんなことを悩んでる間にも、愛華さんはドンドン進んでいく。私の手を引いて歩いてくれる。その背中、なんだか前見たときよりも大きく見えた。

「ここかな」

当分歩いてからやっと見えてきた大きな扉。その扉を愛華さんはノックした。す、すごい……躊躇いが一切ない……。

「誰じゃ」

扉の向こうから、しわがれた声が聞こえた。

* * *

「こんこん、と二回ノックをするとしわがれた声が部屋の中から聞こえてきた。

「誰じゃ」

「すみません、部外者です。入っても良いでしょうか」

「……良いじゃろう。入室を許可する」

その声を聞いてから木製の扉を開けた。

部屋の中は漫画で見たとおり……というか、意外と広かった。外見的には一般的な校長室と変わりなさそうだ。

そしてその部屋の、高級そうな椅子に腰かける、頭が長い妖怪が一人。

「……魔法世界人かの？ 一瞬吃驚したぞい」

もし曆ちゃんがただのコスプレ好きの子供とかだったらどうするつもりだったのだろうか。ぼくの手を握っている曆ちゃんの手が、より一層強くなった。

「この子はそうです。ぼくは……まあ、一応旧世界人ということにしておきましょう」

「一応……？」

「「うちの話です。気にしないでください」

適当に話しながら一歩一歩、ゆっくりとぬらりひょんに近づいて

いく。

部屋内に誰かの気配はない。タカミチさんもいなさそうだ。漫画の原作知識が今の場で通用するとは思えないけれど。

……そうか。ここは十年くらい前の話なのだ。もしかして、アスナちゃんはまだガトウさんとタカミチさんと一緒に過ごしているのではないだろうか。

「ある人物に、このアルバイトをしてきたらどうだ、と言われてきました」

「ふお、それは僥倖じゃ。最近人出が足りないのでなあ……。どうじや？ 一度魔法生徒になって、警備員としてここにいてくれんかの？」

「……生徒、ですか」

それは少し考えたいな……。中学の授業なんて、もう二度と受けたくない。

隣から視線を感じた。暦ちゃんが、ぼくの顔を覗き見る様にして見ていた。

「……分かりました。では、ぼくを中等部に。この子を、小等部に

……」

「あい分かった。まずは名前を教えてくださいんかのう」

「……この子は暦。名字は……」

暦ちゃんは首を横に振る。

やはり名字はないか……。

「名字はありません。ぼくは黒木愛華と言います。クロキとお呼びください」

「ふお？ 女じゃったのか」

「はい、一人称が『ぼく』なのは気にしないでください」

「……本当に女なのか調べさせてもらっても？」

「……………」

「にゃ、にゃに言ってるんですか！」

ぼくは絶句した。この変態は、どこまで変態なのだ。女子中等部に拠点を張り、尚且つ女かどうか調べさせるかどうか？ 変態極まつて変態よくできましたの塊みたいになっただけぞ。

そんな感じのことを思ってたなら、暦ちゃんが反論してくれた。

「ふ、ふふ不潔です！ そんな　！」

「いいよ、暦ちゃん。……どうすれば、ぼくを女だと認めてくれるんですか。下半身の異物がないのを見せれば？」

「そうじゃのう……。そうしてくれると、わしとしては嬉しいかもしれません。いろんな意味で」

ぶっ殺すぞ。

「はあ……………」

大きな溜息を吐きながら、ぬらりひよんの頭を殴つといた。

「いだっ!？」

「これで十分でしょう？」

「……………そうじゃの。リアクシヨン的には女じゃ。認めよう。……では、君等の女子小等部と女子中等部への入学を認めよう」

ふう……………。良かった。

暦ちゃんはなにか納得いかない顔してたけど、とりあえずは万事解決。

「そうそう。今の時期は丁度夏休みも終わりで、今日から二学期なんじゃよ。急過ぎる転校、ということでは良いかの？」

「ええ、良いですよ。暦ちゃんも、良いよね」

「愛華さんがそう言うなら……」

「それじゃあ、住むところじゃが……」

ぬらりひよんはおもむろにメモを取り出し、なにかを書きだした。かりかりかりかり、と。ペンが紙の上を滑る音だけが、学園長室に反響する。

「……」

十数秒後、やっと沈黙は終わりを迎えた。そしてぬらりひよんから貰った紙には、地図が描かれていた。

* * *

警備員と言うことでここに務めることとなった。と言うわけで、ぬらりひよんから業務用携帯電話を貰った。暦ちゃんも貰ったけど、どう使うのかわからないのか、じろじろ眺めていた。

そんなわけで、ぼく等二人は学校の外にいる。時間になったらお互いの担当が来るそうだ。

それにしてもこの学園大丈夫か？　もしぼく等が敵からの刺客だったらどうしていたのやら。……いや、フェイトに頼まれてここに来たわけだから、ある意味で敵からの刺客なのか、ぼく等は。

「ふお!？」

なにやら暦ちゃんが変な声を上げた。何事かと見てみると……どうやら携帯電話がぱかっと開いたことに驚いたらしい。……魔法と言うハイテクに慣れていたが故のローテクを見たときの驚愕的リアクション。ふむ、なるほど。ハイテクから見たローテクも、ハイテクに見えることは無くとも驚くことはあるのか。

まあ、戯言だけど。

それにしても……。今の時代は原作の十年ほど前。それは暦ちゃんの年齢的にあつてると思う。そうなると思えば多くの原作知識は当てにならないな……。あれ、ネギってなんだっけ。あ、薬味が。

「愛華さん、凄いですこれ！ ぱかぱか開きます！」

「うん、そうだね。ハイテクだね」

無駄にテンションが高くなってる暦ちゃんを適度にあしらった。

とりあえずで携帯電話に登録されている電話番号を確認して行く。神多羅木先生とガンドルフイーニ先生はいるのか。刀子さんはいないらしいね。他にも知らない名前がずらりと並んでいる。どうやら、原作に出てくる先生以外にも歳がいったモブキャラ的存在がいたわけか。或いは死んだか、かな。

* * *

暦ちゃんのテンションについていけないながらも数十分過ぎた。それでもまだ担任は来ない。さすがにやばいだろ。学園長に電話しようとしたとき、やっと教師が来た。

「えっと、曆ちゃん、ですよ。こんにちは、私が貴女の担任の萩原と言います。よろしくね」

「は、はい……よろしくお願いします……」

「あ、そうだ。曆ちゃん、日本語分かる？」

「はい、なんとか読めます」

「そっか。なら良かった。なにか分からなかった先生にすぐ質問するんだよ」

「はい！」

ちなみに曆ちゃんの耳としつぽは強力な認識障害魔法を使っている。誰も気づかない仕様になっている。

そしてぼくの担任だけど……。

「やつ、君が愛華ちゃんだよね。始めまして、担任の獅子谷です。まあ、今後よろしく」

良いスマイルだと言わせたのか？ と疑ってしまう程爽やかな人がぼくの担任だった。男性か……。まあぼくに教師と言うのは男性の方が好ましいから。別に女性教師が羨ましい訳じゃないから。

「先生」

「ん？」

「ぼくって女だと思えます？」

「ん……どうだろう。男だと言われれば見えなくもないけど、見女の子だけ。あれ、もしかして男の子だった？」

「いえ、女で正解です」

「そ、そう……」

うむ、ぬらりひよんの目が腐ってただけか。よかったよかった。

* * *

曆ちゃんと別れて、女子中等部の一年生教室に入る。丁度十三歳の設定にしてあつたし、僥倖だろう。

ぼくが教室に入った瞬間に、「え、誰？」みたいな視線が突き刺さつた。一人だけ違う人がいたけど。ぼくに殺気をぶつけてきてる人物が一人。

「……………」

あのロリ体系に金髪はエターナルロリと名高い吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……？

そんなバカな。いや、十年ほど前というのはぼくの勝手な推理だった。そうだ。曆ちゃんの身長的にとか言つてたけど、成長期と言うものは存在するのだ。曆ちゃんも、六歳か五歳くらいの様に見えるていたけど、本当はもうちょっと上なのかもしれない。

「……………えーっと、二学期も始まつたわけなんだけど……………。今日、急な転校をしてきた子を紹介する」

獅子谷が目線でぼくに「自己紹介しろ」と言ってきた。

ぼくは、「では」と前置きをして、宣言する様に、宣告する様に言った。

「現実には退屈か？ 日常は怠慢か？ 思つことなかれ。現実には卑屈に、日常は我慢を、君達に与えてくれる。……………そんな訳で黒木愛華です。以後よろしく」

なんだかどつかにこんなセリフがあった様な気がするけど、気にしない。そりゃあもう、気にしたら負けですよ。そしてみんなドンビキですね。

それでもなんだか騒がしい。どうやら、クラスは違えど麻帆良は麻帆良。テンション的な部分は高いらしい。

ギリギリで聞こえる皆さんの僕に対する感想を挙げていこう。

「え、なに。なんか結構可愛い子じゃん？」

「急な転校ってなにかあったのかな？」

「ていうかさっきの長々とした台詞って自己紹介なの？」

うつむ……、どうやら不評の様だ。まあ、死んだ魚の様な目つて言われてたからね、昔は。今も対して変わらない。瞳の色が赤いこと以外、変わらない。

「はいはい！ 静かにー！ そんなじゃ、報道部兼委員長の私がぱぱーっと質問しちゃうよー。名前は黒木愛華ちゃんね。はい、じゃあ身長体重趣味得意不得意答えてー」

質問が多い……。報道部ってマジなのか？ インタビューのコツは少しずつ、しかし確かに聞きだしていくことのはずなのだが……。

「身長体重は計ってないので不明。趣味は……まあ、読書と洋楽。得意なことは料理で不得意は友好的な人間関係の創造」

「それじゃあ……女の子だけど聞いておこつかな。……ズバリ！ このクラスに気になる女の子はいる！？」

「……………」

何故それを訊く。一応ぼくは女だぞ。男だったけど今は女なんで

すよ解りますか？ 分からないかそうか。

「……まあ、強いて言えばあそこの金髪幼女ですかね」

じーつと、エヴァンジェリンさんが注目される。エヴァンジェリンさんはそれを「ちっ」と、うざそうにしながらそっぽを向いた。この世界でもあまり慣れ合いはしてないみたいだね。

「じゃ、愛華ちゃんはエヴァンジェリンちゃんの隣ね」

「はい」

なるだけ堂々と歩く。じゃないと、いろいろ辛いことになる。……まあ、それは多くの被害妄想なんだろうけど。この能天気な麻帆良であんなこと、起こるはずないんだ。

「貴様、何者だ」

席に着いた途端、エヴァンジェリンさんの第一声。無愛想な子だ。

「イントネーションは大事だよ」

「あ？」

「今度、他人に質問するときがあれば是非とも疑問符をつけるといいよ」

「……………」

なにを言っているのだ？

そんな顔をされた。まあ、実際そんなものだよね。

「あ、そうだ。エヴァンジェリンさん」

「エヴァで良い」

「では、エヴァさん。こここの近くにCDショップってあります？」

「……一応あることにはあるが……」

「後で案内してくださいよ」

「嫌だ、めんどくさい。何故私がおんなじ様なことをしなくてはいけないのだ」

「案内してくれたらぼくの正体を明かすよ」

「……良いだろう。今日の日曜行ってやる。ほら、早く正体を言え」

ぼくは席を立った。周りからなんの視線も来ない。なるほど、これは良い。

業務用携帯には、授業中『認識阻害魔法』が掛かる様になっている。本職が警備だからだそう。いつでも出勤できるように。

エヴァは席を立ち「腹が痛いから早退させてもらう」と言って、教室を出ていった。ぼくより先に出ていったということは、ついでこいと言っているのだろうか。というか、少しは腹痛の演技くらいしてくれ。こちらが焦る……。

* * *

エヴァさんの後ろをついて歩いてみると、屋上に出た。なるほど、原作でも良く屋上でサボってたな。ぼくはそんな曖昧な記憶を思い出しながら屋上から下を眺めた。良い眺めだ。人がゴミの様……いや、ぼくには似合わない台詞だ。兎も角、体育でもしているのだろうか生徒たちは本当に小さく見えた。

「良い所ですね。これからも通わせてもらいますよ、ここ」

「……好きにしる。それより、お前は本当に何者なんだ？ 殺人者の匂いがするが……」

へえ、たった数人しか殺してないけれど、匂いってというのは付くのか。鉄の匂いなのかな。

ぼくはそれに答える様に左腕の裾を捲って、ネクロマンサーを指先でなぞった。いつも通りの感触が手に宿る。

「……随分と不気味な武器だな」

エヴァさんは悪寒が走ったとでもいう様な顔で言った。……まあ、不死殺してみたいなものだからね。斬るたびに魂を喰らっていく。魔剣だ。

「これで、数人を殺した。これからも、殺していくつもりです」

「何故だ？」

「……ぼくが……。人を殺したいからです」

随分な発言だ。

馬鹿な発言だ。

調子に乗るな。自分に言い聞かせたい。凶に乗るな。

「壊れているな」

「ええ、そうですね」

壊れてしまった。

壊してしまった。

だから今のぼくがいる。

だから今の自分がある。

「……………」

「……………」

暫しの無言。話すことはこれ以上ない、と言う様な沈黙だった。だから、ぼくは屋上から後一步踏み出せば死ぬだろう場所まで歩みを進めた。

……良く見てきた光景だった。

何度この様な場所を見てきたのだろうか。何度この様なことを繰り返してきたのだろうか。ここで一步を踏み出せば、楽になれるのに。生きるということは、ぼくにが重すぎた。飛び下りれば、軽くなる気がした。死ねば、空っぽになれると思ってた。

間違이었다。ぼくは生きてても空っぽだった。生きていて死んでいる様な……そう、欠陥製品。欠陥人形。人間失格。

「いつそのこと飛び降りてしまおうか」

神様から貰った命？ 知るか。

ツルギさん達の事？ 知るか。

曆ちゃんを育てる？ ぼくの役じゃない。

フェイトを止める？ ぼくの役じゃない。

それは、主人公の役だ。

「おい、飛び降りるなよ。処分が面倒だ」

「……ツンデレ乙」

「なっ！ 事実を言ったただけだ！ なにがツンデレだ馬鹿馬鹿しい！」

あれ、この時代にはすでにツンデレって言葉があったのか。少し失敗したかな。いや、なにを失敗したというわけでもないけど。

「飛び降りなんてしませんよ。後ろ向きな自分とは、もう決別した

んです」

「……………」
「ぼくと彼はね、死別したんですよ。彼は一度死んで、ぼくは生きてる。それだけです」

ぼくは瞬動で後ろに下がり、振り向き様にエヴァさんに切っ先を向けた。

「……………」

「……さすが、驚きませんね」

「私を誰だと思っている」

「……キティ」

「何故その名を知っている!? とうか呼ぶな! その名で!」

果て、何故この名前を嫌がるのだろうか。ぼくからすれば可愛らしい名前だと思うんだけど。エヴァさん自身もあの二足歩行の白ネコよりは可愛いし。

「ああ、そうだ。黒木……とか言ったか? まさか、貴様、あの死神ではないだろうな」

「死神? なんですかそれ」

おうふ。動揺のあまり即答してしまった。

「ふん、どうせそんなところだと思ったよ。ジジイが言っていたぞ。上が忙しいせいでこちらの仕事も貯まる一方だとな」

それはそれは……。なんとというか、ご愁傷様だ。

ふあ、あゝあ……。眠いな。

「エヴァさん、横を失礼しても？」

「……勝手にしろ」

ツンの中にデレがある。故にツンデレ。きつとツンデレ。

「では、失礼」

壁に背を預け、片膝を抱えて眠りの体勢に入る。夏の風の心地が良い。あまりにもよすぎた。お陰で、すぐに眠りについてしまった。

* * *

くエヴァ Side く

なんなんだ、こいつは。

最近有名になった死神。人を殺してすぐ姿を消す。ただの殺人鬼と変わらない所業。ただ、武器が面妖らしいと、ジジイが言っていた。それが、さっきの大剣か……。確かに、奇妙な上に不気味な武器だった。

「……すう……すう……」

隣に座った奴……。確か、名前はクロキだったろうか。寝ているだけなら、なにもない。ただ、こいつの眼は何かを感じる。久しぶりかもしれない。目を見ただけで、怖いと思ったのは。

こいつには何かある。絶対にだ。私はそれを知りたい。だから、とりあえず寝ているこいつに悪戯することにした。

* * *

「……ん、ん？」

目が覚めた。真前にまで昇っている太陽が熱い。……いや、寒い？

「……なんでこうなった」

ぼくの格好が寒かった。上着は脱いであり、ワイシャツもボタンが全部外れてる。下着のお陰で肌は見えない。スカートは……良かった。ちゃんと穿いている。

まさかぼくの寝相がここまで悪いだなんて……。しかも上着なんてどっか行っちゃったよ。おいおい。風にも飛ばされたか？

「おい痴女。お前の探し物はこれじゃないのか？」

誰が痴女だ。ぼくは痴女じゃない。故にスルーすることにする。

「おい！ 聞いているのか！ お前の探し物はこれじゃないのか！？」

とにかくワイシャツのボタンを締めよう。風邪をひいてしまう。

「……………」

「……すまない、謝るから無視だけはやめてくれ」

「やっぱりエヴァさんの仕業でしたか……」

白状してくれたからスルーを中止。素直に上着を返してもらった。

それにしたって、一体全体なぜこんな悪戯を？

「……いや、特に理由はない」

むすつとしてそっぽを向いてしまった。

その顔は悪戯が失敗した子供の様で……。

「……もしかしたら、寂しかったりした？」

「なっ！？ そんなわけがないだろう！」

微妙に頬を染めてる辺り、正解らしい。実に分かりやすいエターナルロリである。

「隠す必要はないよ。ぼくも、孤独だった」

「……」

唐突に、ぎゅっとエヴァを抱いてみた。

小さかった。華奢だった。

「わふ！？ な、なにをするのだ一体！？」

「暖かい？」

「あ？」

「暖かい？」

「……」

「ぼくは、親以外の……ぼくの好きな人に抱かれた時、とても暖か
った」

「……」

エヴァさんは、何も言わなかった。

ただ。ただ、ぼくを受け入れてくれるように。ぼくに受け入れて貰うように。その体重をぼくに預けてきた。

* * *

放課後。

曆ちゃんと合流したぼくは、地図に描かれた森の中を彷徨っていた。どうしたものか。迷ってしまった。

「愛華さん、方向音痴なんですね」

「……………」

言わないでほしい。ぼくだって遂さつき自覚したことなんだから。そもそも、生前は京都内に根を張っていたのだから、他の地域の道なんて分かるはずないじゃないか。

お。やっと森が切り開かれた場所に出れた。

「お。……………やっと着きましたね」

「できれば家の感想を言っしてほしいかな」

「御洒落ですね」

「当たり前障りのない感想だね。まあ、事実、かなり御洒落だけど」

ログハウス。

森の自然との共生を目指している様な家だった。或いは森林伐採推薦でもしているのだろうか。

足を進め、ふと気付く。

「……誰か、いる」
「へ？」

家の中に気配を感じる。小さい、猫の様な気配。でも、猫じゃない。人だろう。それも、人以上の存在。

「……暦ちゃん、ぼくの後ろにいてね」

今の暦ちゃんがどこまで戦えるか分からない。なら、ぼくが行くべきだろう。

腕に《風燕》と《神立》を貼り、なぞる。簡易的な《雷の暴風》。それも、連射が可能な上に凝縮させて撃つことも可能。更にそこから辺の魔法使いが放つ《雷の暴風》より威力が格段に上がっている。

「おい、なにをしているのだ？」

「……すみません、それはこちらの台詞です。エヴァさん」

ログハウスの中から、金髪幼女が現れた。

ぼくはどつする？

戦う

アイテム

逃げる

相談

オツケイ。これでいいっつ。

「エヴァさん。この地図の場所ってここに合ってるよね」
「んあ？」

メモ用紙をエヴァさんに見せた。

エヴァさんはそれを見て、眉を八の字にした。

「ああ、間違いないな。で、これがなんだ」

「今日からの、ぼくとこの子の住居らしいです」

「……すまん、聞き違いかもしれん。貴様、今何と言った？」

「今日からの、ぼくとこの子の住居らしいです」

態々全文リピートしてやった。

「……そうか。まあ、いい。とりあえず入れ。お前には興味があったところだ」

「そりやどうも。……ほら、曆ちゃん」

「愛華さん、あの人、真祖の吸血鬼です」

「知ってるよ」

「知ってるのに行くんですか？」

「知ってるから行くんだよ」

真祖の吸血鬼……六百歳の人との会話は、貴重なものなのだ。

貴女が私にしたこと全てをそのままお返しします。(後書き)

あれ、まだ突っ走ってる感が否めないな。まあいいか。

貴女にとって死んで良い条件はありますか。

ログハウスに入ってからまずしたのは、業務用携帯電話を使つての学園長への確認だった。エヴァさんの家に泊れという意味で、どうやら合っていたらしい。だったら最初からそう言ってくれ。お陰で、初日からエヴァさんにぼくの力がばれてしまった。あのネクロマンサーはぼくが自らばらしたけど、エネルギー系のミスティッカーなんてそりゃあもう……。

初日から便利物扱いされた。電気なんてなくても電化製品を動かすことができるし、態々買って来なくても氷が作れるからワインを冷やせるし、ガスを使わなくても火は出るし、電気なんて使わなくても部屋は明るいし、窓がなくても風が吹く。

「……………ミスティッカーの正しい使い方ではあるんだろうな」

元々ミスティッカーは自然破壊しかけた世界を救つた物………だつたはずだ。まあそんなことはどうでもいい。今気にすべきなのは、この一室にいる二人のテンションを鎮めることだ。

「ふはははは！ 見ろ！ 暦！ 魔力やら電気やらがなくなるとも部屋が明るいぞ！」

「あ、あの」

「見てくださいエヴァさん！ 魔法を使わなくてもいろんなもの氷漬けです！ これで熱い夏も過ごせます！」

「だ、だから」

「おお！！ それならワインを冷やす氷を態々作ったり買いに行くこともしなくていいのか！」

「ひ、人の」
「はい！ 便利です！ ミステイッカー便利すぎです！ むしろ便利がミステイッカーです！」

……ダメだこれ。はあ……なんだかなあ。

元気な子供を持つてしまった父親の心境だ。いや、父親だったら怒鳴ってでもこれを鎮めるべきなのだろう。

「おい見ろ」

「そろそろ、黙ろうか」

「っつ　！？」

ネクロマンサーを出現。更にジエノサイドを重ね貼り。

今度な鞭というより糸の様に使ってみた。じゃらららら、と刃節が音を鳴らしながら部屋の中を刃が駆け巡る。柱と柱を結ぶように駆け巡る。勿論、柱は斬れない様に、刃の腹を使って引っ掛けてある。

曆ちゃんのお腹、エヴァさんの首に、刃が宛がわれた。

「……………」

「…………ごめんなさい」

「よろしい」

ネクロマンサーを消して、ソファに座った。食事はとくにした。エヴァさん曰く、ぼくのここでの扱いは「メイド」だそうだ。だからこそ、ぼくは其れ相応の服を着ていたりする。なんでサイズがきつかりなのかはこの際どうでもいいとしておこう。

ぼくは、ひらひらの、近代的ミニスカの、メイド服を、着ている。何故か。何故だ！

……………はあ、一言だけ言って良いかい？　なんでこうなった。

「兎も角、お前のメイドスキルはすごいと見た」

「なんですか、そのスキル」

「つまり家事が凄い」

「そうですか……」

初めからそう言ってくれ。しかし、メイドさんか。男の頃からそりやあもう憧れてたね。いや、なりたいたとかじゃなくて、見ていたい。つまり雇いたい。

だけでも実際自分がなってみると、妙なもんだ。でも何故かしくりくる。

「愛華さんの料理がおいしかったことは驚きですけど」

なにを言うか。

ぼくは前まで一介の大学生だったんだぞ。自炊くらい普通にできなくてどうする。

というか、ぼくの膝の上に乗らないでほしい。お願いだから退いて曆ちゃん。ネコ科の豹族だからか、膝の上に乗るのが好きらしい。

「……どうせならこいつも出しとくか」

この前、あの転生者から奪ったミスティッカーを右腕に貼り、なぞった。

「ガール……」

氷に覆われた黒い豹が、ぼくの隣に現れた。

「にゃうー!?!」

曆ちゃんは吃驚したらしく、ぼくの後ろに隠れた。

「なんだ、そいつは」だからエヴァさん。イントネーション……。まあいいや。

「ミスティッカーの一つだよ。生命体の召喚だね。ログハウスに誰かが来ても、こいつが守ってってくれるってやつさ。ね、クアール」

クアールの顎を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。おまいは犬か。

「どういう意味だ？」

「ほら、ぼくって殺人者でしょ？ ここの正義を気取ってる人になればたらどうなるか、わかったもんじゃない。だから、この子を置いとくんです」

そう言えば、クアール、少し元気になった？ ぼくの勘違いかもしれないけど、ぼくが最初に見たとき（つまりあの転生者に操られたとき）よりも生き生きとしている。うん、仮にも生命体だからね。生き生きとすべきだよ。

「に、にゃー」

「ガル……？」

クアールに慣れてきた曆ちゃんがクアールにお手の指示をした。いや、犬じゃないんだから。とか思ってたらクアール普通にお手してた。お前犬だったのか。

猫の様な豹と氷の豹。

……妙な組み合わせだ。

「殺人鬼……そう言われてもいるそうだが」
「なんですと？」

エヴァさんがぼくのことを少し詳しく調べてくれた。ネット環境は揃っているらしい。勿論まほネットの方。

「最初の犠牲者は、町に送りだした調査員」

既に隠蔽工作されている。

「次に立派な魔法使いと警備員を数名」

警備員は単数だったよ？ あれ、単数だったわけ？ 複数だった？ あれ、複数だったわけ？

いや、単数だったと思う。あれ？ でもやっぱり複（以下略）。

「最後に、一般人を惨殺。どうだ、全て正解か？」

「微妙に正解で完璧に不正解です」

「……つまりどっちだ？」

「つまり五分五分です」

当たってる所もあるし当たってないところもある。

さて、どうしたものかな……。まさか、殺人鬼とまで言われているだなんて。

「良いじゃないか。殺人鬼なメイドというのも、なかなかヤンデル感があつて良いと思うぞ」

なんだ。ヤンデル感って。病んでるって言わない所が特徴ですよ。みたいに言わないでほしい。

はてさて。ぼくは一体どうアクションすべきだろう。向こうでもうちよつと人殺しをするべきか。それとも……。ここで身をひそめるか。良いかもしれない。暦ちゃんには気の毒だけど、あの町の人以外、あの世界はどうだっていい。あの町の人達と野良猫小鳥くらいなら、麻帆良でも十分間に合う。

そんな……。実質どうでもよくない様な話をしながらも、ぼくは入浴へと向かった。

ちなみにエヴァさんは既に風呂に入った。さつき、氷塊を大量に作ってしまったからね。それらを《炎樂》で溶かした上に沸騰させてお湯にした。節水は大事ですよ。ええ。

エヴァさんが出た後は順番的に暦ちゃん……。なんだけど。

「愛華さんと一緒に入りたいです！」

の一点張り。仕方なしに一緒に入った。

ぼくにロリコンの気はなかったからね。変なイベントとかは発生しないよ。いや、幼女とお風呂っていうのが既にイベントなのか。

……なにか明記すべきことはないだろうか。

まあ、言うことと言えば、あれだ。暦ちゃんの肌は幼さゆえのキメ細かさがあった。髪質も良かった。耳は弱かった。

以上。

そして時間は十一時。もう寝よう、と言う時にぼくにメールが一通。

はろーん。お久だねークロキちゃん。

……なんであんたメールで？ てか携帯ぶつ壊す気ですか。

安心しなよー。爆発落ちはもうないから。

……なんか安心できない。てか信用できない。

今日言いたいことが一つだけあったんだ。

なんですか。

浮気はダメって言ったよね？ ほっぺにちゅーまでしか許さないって言ったよね？

……なんの話ですか。

ふん、いいよいいよ。クロちゃんなんて嫌いだー。

その呼び方止めてください。

やーよ。あ、それから仮契約は注意してね。

うるせえ。ツルギさんのときはなにも言わなかったのになんで…。

てか用件はそれだけか。それだけならこれでバイバイだ。

仮契約した相手、貴女と同じ存在にな

もうめんどくさいから話は後で。

そう言つて……というか思つて、携帯を閉じた。やばい、最後の文だけ少し気になった。まあ、いいか。

そしてまた、携帯がバイブレーション。いい加減にしろよ、と思つて携帯を手取る。

『これから君の警備員としての力を見せて貰いたい。すぐに世界樹前の広場に集合じゃ』

学園長がくえんちやうからだった。

* * *

エヴァさんに道案内を頼もうとしたら「嫌だメンドイ」と言われ、曆ちゃんに頼もうとしたけど曆ちゃんもあそこまでの道など知るすべも無し。とりあえず壁やら椅子やら天井やらに貼ってあるミステイツカーを回収。曆ちゃんは「疲れた時のためにどうぞ」とペットボトル水をくれた。

世界樹と言えば、あの大きな樹だ。今回ばかりは迷うこともない……あそこに着くまでの道のりなんて探してたら、やっぱり迷子になってしまったのだけれど。

「……肉体強化して屋根の上から行くか」

初めからこうすれば良かった、と思う。携帯で今の時間を見る。十一時三十分。随分な時間を彷徨っていた様だ。

それからは屋根を走っていったために三分ほどもかからずに広場に到着。見たこともない魔法先生と魔法生徒が大量にいた。

「む、やっと来よかったか」

「あ、愛華さん……さっきぶりです」

ん？ 聞き覚えのある声。

声の主を探すと、一人、確かにどこかで見た顔があった。綺麗な水色のツインテール。整った顔立ち。女の子らしく可愛い顔。着ている服は麻帆良中の制服。

「……………えっと、誰だっけ」

「ええ！？ えーっと……………じゃあ改めまして、貴女の席の前の坂城さかき紫恩しおんです。シオンって呼んでください」

「はあ……………。じゃあぼくも改めまして、黒木愛華です。愛華と呼んでください」

成程、ぼくのクラスにも魔法関係者はいたのか。だけでも一人だけとはね。いや、麻帆良中の制服を着てる人なら他にも数人いるけれど、大抵は先輩たちの様だ。

「シオンちゃんも腕試し？」

「はい、そうですね。入学初日に試験をするはずだったんですけど、その日はいろいろあつて試験を休んじゃいまして。その後予定が延びて延びて、やっと今日できるんですよ」

「……………敬語はなしでいいよ。ぼくも、敬語じゃないし」
「そ、そう？ じゃあそうさせてもらっね」

うん、良い笑顔だ。

「そろそろ始めたいのじゃが……………良いかのう？」

「あ、はい」

ぼくとシオンちゃんの声が重なった。シオンちゃんは何故かぼくの顔を見ながらニコニコ。なんですか。おっと、ぼくのほうが敬

語になってしまった。気を付けないと。

「では、まずは坂城シオン君からじゃ！」
「はい！」

シオンちゃんは返事をしながら三歩、前に出た。
魔法先生の一人が何やら呟きだした。

いくつもの魔法陣が広場に出現していく。そしてそこから、悪魔が這い出してきた。

へえ、てつきり魔法先生と戦うものかと思つてたけど……。まあ、實力もしれない様な生徒相手に先生が出てくる方がおかしいのか。

「では、始めい！！」

学園長の掛け声とともに、シオンちゃんは一枚のミスティッカーを取りだした。

「え……？」

もしかして、シオンちゃん、転生者？
いや、でも待てよ。何故、腕に貼らない？

「ウィル・ライル ラス・スキル マルキュレス 吹くは疾風、噴くは轟雷。雷統べる精霊三柱、我ここに契約の執行を命じる。出現せよ《万物穿つ雷の槍》」

シオンちゃんの背後。空中に三つの魔法陣が描かれていき、それらがバチバチと電気を帯び始める。その魔法陣から、雷の槍が、先程の悪魔のように這い出てきた。

「《射出》！」

シオンちゃんの掛け声とともに三本の槍が射出された。それらは血を求める様に、悪魔たちに吸いこまれる様に、駆ける。

シオンちゃん自身も、駆けていた。

雷の槍が一直線に穿つ。直線状にいた悪魔は須く消えていく。そして残ったのは、視界に入るだけで六匹。これからどうするのか。シオンちゃんは一体の前にたどり着くと、火のミスティックカーを悪魔の胸に貼り、なぞった。

「がああ！？ 熱！！」

自分の意思で貼ったミスティックカーじゃなければ、それはその効果を発揮するのみ。

なんかご都合主義な感じに神様の声が聞こえた気がした。

じゃあ、なんだ？ 自分で自分の身体にミスティックカーを貼ってなぞると死ぬか精神崩壊だけど、他人が自分の身体に貼ってなぞっても、或いは自分が他人の身体に貼ってなぞっても、それはただエネルギーを放出するだけってか？

ああ、だから悪魔が燃えてるのか。

燃えてる仲間になど気にもせず、悪魔はシオンちゃんを潰そうと迫りくる。

シオンちゃんはポケットから三枚、同じようにミスティックカーを取りだした。

「…………ブレイザーじゃ、ないのか？」

転生者のくせに、ミスティッカーを貰っただけでブレイザーにならなかった。

もしかして、転生者じゃない？

……思い出すのは《リカバリー》。あのミスティッカーは、本当に《ゲート》から出てきたのかもしれない。いや、だがしかし、なんのきっかけがあつてミスティッカーの使い方を知れる？
ダメだ、分からない。

「あのステッカー。奇妙ですね。あれ自体からはなんの魔力も感じられないのに、なぞると魔力が宿ります」

「見たこともないぞ。術式や魔法陣を使わないで、ステッカーをなぞつて炎を出すなど……」

魔法先生は今起こっている事態が飲み込めないらしい。

まあ、確かに奇妙極まりないだろう。ステッカーを張るだけで、炎を出すなんて。

そうこう話してる間にも、シオンちゃんは火のミスティッカーを使って三匹の悪魔を屠っていた。

「ウィル・ライル　ラス・スキル　マルキュレス　抉り殺せ。《一刃の雷》」

短い呪文スベルだな。

だけでも、シオンちゃんの手には一本の剣が宿っていた。《断罪の剣》の雷版みたいなものだろうか。

「はぁあー!」

残りの二匹を、一刀両断。
悪魔は全滅した。

「なかなかの実力じゃな。中学生でここまでの速さであれ等を全滅させるとは思わなかった。実力十分じゃ」

「ありがとうございます」

どうやらシオンちゃん、魔力容量は少ない方らしい。既に息切れしている。

こちらに歩いてきたシオンちゃんは、ぼくの隣に來ると同時座りこんでしまった。

「は、緊張したー……」

「お疲れ様」

ここに来る前に曆ちゃんから貰った水（ペットボトル水）をシオンちゃんに渡した。

「あ、ありがとう」

一口だけペットボトル水を飲んでから、「生き返る」と、水を恍惚の表情で眺めていた。……そこまでか。

「では、黒木愛華君。始めい！」

いつの間にか悪魔の召喚が終わっていた。

……なんか、数多くない？

学園長の顔を見た。なにも読みとれない顔だった。あの人類最長、なにを企んでいやがる。まさか、早速ばれたか？

まあいい。なら、ネクロマンサーを使わなければいいだけだ。

「ミスティックカードライブ」

《神立》と《風燕》を重ね貼り、なぞる。

腕に雷を孕んだ風が纏われる。

「え……嘘……」

シオンちゃんの声が聞こえたけど、気にしないことにする。後で説明とかめんどくさそうだ。

まあいい。まずは手始めに……。

腰を捻り、ボクシングの構えで、一発パンチの放つ。

勿論そこには悪魔はいない。拳が虚空を殴る。だが、腕に纏った簡易版《雷の暴風》はきちんと発動した。

たった一発。一発だけで、目の前にいた大半の悪魔を還した。

「馬鹿な！ 呪文詠唱なしで、あそこまでの威力の《雷の暴風》を放てるわけがない！」

頭の硬い先生たちだ。

まあいい。一度風と雷を止めさせ、右上に《氷縛》を貼りなぞる。パキパキバキンと音を立てて、ぼくの腕は氷で出来た巨大なかぎ爪が生える巨腕となった。まあ、イメージ的にはあれかな。エクソシストとAKUMAの戦争アニメに出てくる主人公の初期武器。

そんなどうでもいいことを（誰に説明してるわけでもないのに）説明していると、悪魔が一齐攻撃を仕掛けてきた。と言っても、前線に立っていた悪魔たちだけ、後ろの悪魔は棒立ちだ。

「ふん」

右腕の一振りで襲いかかってきた全ての悪魔を薙ぎ払った。

がばっ。

そんな効果音が似合うだろう感じに口を開いた悪魔たちが、後ろで控えていた。

「ちっ！」

石化か？ あり得ないでしょそれ……。生徒を殺す気ですか。

「おいどうなってる！ 悪魔の制御はどうした！」

「そ、それが ！」

等と後ろから聞こえてくるあたり、悪魔の制御ができていない様子。ちゃんとしてくれ先生。

「『『『石化』』』」

わーお、前面からぼくに向かって一斉射撃的な？ それも見た目極太レーザー銃だぜ、笑えねえ。

「くっ……！」

右手の氷で石化を防ぐ。見た目レーザー銃が止むのと同時に石化した氷の腕を一時破壊。もう一度氷の腕を作り直す。そうしないと腕にまで石化魔法が到達してしまう。

「《石化》！」
「っ！」

時間差？

もう一度氷の腕を翳す。だが攻撃が来る気配はない。

……………っ、後ろか！

「クッソ……………」

跳躍して目の前にいた悪魔たちの上を通過。空中で身体を捻って方向転換。地面に着地するが、急ブレーキがかけられる訳でもない。靴から焦げくさい臭いがした。ていうかぼくってこんなに身体能力高かったっけ？ あ、さっきの《戦いの旋律》がまだ効果上発動しっぱなしだ。

どうやらぼくの予感は的中、ぼくの後ろに悪魔が一体いたらしい。石化の名残だろう煙が地面を覆っていた。

「…………オマエ」

「なんだ、悪魔？」

「オレ達ト、同じ臭イガスル」

「あつそ。そいつは名誉だ。だが、低級悪魔なんかと同じにされたくはないかな」

《神立》と《風燕》を展開。

乖離剣が如く風が回転する。本来なら風圧で腕が吹き飛ぶだろうけど、ミスティッカーは術者には一切の干渉がない。つまり自滅する心配がないのだ。

「エヌマ……」

腰をもう一度捻り、パンチの構え。

パンチを振るう前に瞬動で悪魔たちの真上に立つ。空中に立つ、なんていう表現。適用されるとは思えないけど。あれ、空中に足場作ればいいのか思ってたけれど、浮遊術みたいなものって足場を作ってるわけじゃないんだよね。単に魔力で浮かせてる様なもんだし。つまり、踏ん張れない。

……威力が足りない、かも。まあいいや。やっちゃえ。

「エリシュ！（今命名！）」

どっかの筋肉だるまみたいな感じに今命名してみた。

勿論名前の元は『天地乖離す開闢の星』ですよ、はい。まあ、雷を少し抑えた感じの、ただの風圧で押し殺したただけなんだけどね。後で『鎌鼬』かまいたちも試したいな。旋風ってどうすれば起こせるかな。

そんなことを考えながら地面に着地。

見れば、悪魔は全滅。うん、威力が少し不安だったけど、低級悪魔にはこれで問題なかったらしい。

「ふう……終わったか」

少し安心。なるほど、確かにある意味で緊張する。

「暦君は……来ないのかの？」

なんか人類最長が言いました。

「学園長、それはかわいそうってもんですよ。まさか、曆ちゃんみたいな小さな子を戦場に立たせるなんて非道中の非道なんて、『正義』を振りかざす人達がするわけありませんよね？」
「む、むう……まあいいわい。では、今日はこれにて解散。新入り警備員として二人には明日から働いてもらう」

その言葉が最後となり、魔法先生と魔法生徒は消えていった。転移でもしたのかな？

残ったのはぼくとシオンちゃん。

「……………ねえ、愛華さん。あの……………今のって……………」

「……………ミスティッカー。シオンちゃん、一つだけ聞いていいかな」
「う、うん」

「君は、転生者なのかい？」

貴女にとって死んで良い条件はありますか。(後書き)

戦闘が低描写？ 知ってるよ。

私を殺してください。

「転、生者……?」

シオンちゃんはきよとん、とぼくの顔を見た。あれ、読みが外れた。あの神様のことだから新しく転生者を送り込んできたのかと思っただけれど。

「転生者って、なに?」

「……転生。つまり、一度死んで、また産まれた。ループの一種だよ。輪廻転生っていう言葉くらいは分かるよね」

「あ、うん……」

「ぼくは、一度死んでいるんだ」

あ、やばい。頭がおかしい変な人って言われるかも。言ってから後悔。しかもう後には退けまい。

「一度、死んでる……?」

「そう。トラックの轢かれて即死だった。打ち所が悪かったんだね。そして、転生する際に、これを貰った」

そう言っって見せたのはネクロマンサー。ミスティッカー。シオンちゃんはそれを興味深そうに見ていた。

「ねえ愛華さん」

「愛華で良いよ」

「じ、じゃあ愛華。そのステッカー、自分の身体に貼って使ってた

わよね。あれって私でもできるかな」

「……試さない方が、良いと思うよ」

「え?」

「適性がないと、死ぬから」

「……………」

事実を言うと、シオンちゃんは表情を固めた。まるでコンクリートで固められた仮面のように、固まった。信じられないものを見る目でぼくを見ていた。

「死ぬ様な危険を冒してまで、貴女は…………?」

「あ、いや。ぼくは…………、うん、まあそんなところかな」

神様とか言っても恐らく信じてはくれない。表面上で信じてくれない、心の奥底から信じてくれる人なんて、まずいない。

「とにかく、君は転生者じゃあないんだね」

「うん」

「…………なら、少し教えといてあげるよ。ミスティッカーってやつを」

ぼくはネクロマンサーを指先でなぞり、いつも通りに大剣を出現させた。

「こいつは所謂武器系ミスティッカー。そして、君が使っているそれがエネルギー放出型のミスティッカー」

「エネルギー…………。この火のこと?」

「そう。君は火のミスティッカーしか持っていないの?」

「うん…………それに、これはコピーみたいなものなのよ」

「コピー?」

果て、どういうことだ。ここにNEXT社はない筈だが。

「私って昔から見た物をそのままにコピーする能力があるの。専門家には魔眼だつて言われたんだけど……。私が見たのはこれ一枚だけ……。貴女その剣も、たぶんコピーできる。勿論、オリジナルに比べれば力が劣ってしまうって言っから、あまり意味はないんだけどね」

そいつはまた……。面妖な能力だ。

魔眼か……。それも、劣化コピー。劣化と言えど、それは絶大な能力だろう。

成程、なんとなくだけど分かってきたぞ。

これはぼくの推察だけど、シオンちゃんは一度だけ火のミスティッカーを持ったことがあった。それをどこかに貼って、空気を抜いてちゃんと貼ろうとしてそのミスティッカーを無意識になぞってしまった。結果的に、燃えた。そう言うわけなのだろう。そしてその魔眼を使って劣化コピーを生み出した。なんでコピーしたのかは分からないけど。

「良い能力だね」

「そうでもないよ。須く劣化しちゃうんだもの」
「それでも良い能力さ」

でも、そうなるかどうかなのだろう。

それはミスティッカーと言えるのだろうか？

「その能力ってさ、コピーするのは良いけど、どっせやってコピーするんだい？」

「ああ、あのね、まずは左目を使うの」

左目？

両目が魔眼なのか？

「うん、両目だよ。左目は解析の眼。右目が劣化コピーの眼なの」

なるほど。能力に恵まれていると言えよう。

左目で解析したものを右目でコピー。強運過ぎる程の能力だ。

しかしこれは使えば使う程に応用も利いてくるだろう。見た物を幾つも複製できるというのだから。

「……………」

「ん？…………」。なんかシオンちゃんがじろじろ見てきた。

「いや、なんでも、ない。ただ、似てるなーって思っただけ」

「なにに？」

「殺人鬼の特徴。かな」

つ…………。シオンちゃんにも話が廻っていたのか。

少し油断しすぎた。

「はは、何言ってるの。ぼくが殺人鬼なわけないじゃない」

「うん、そうだよ。あはは、何言ってるんだろ私。…………あー、そろそろ帰ろっか」

「うん。ぼくもそろそろ帰らないと。じゃあ、ばいばい」

「あれ？ 愛華って寮じゃないの？」

ああ、そういえば忘れてた。

学生は皆寮に泊ってるんだっけ。

「うん、ぼくはエヴァさんの家に泊ってるんだよ」

そんな会話を最後に、ぼく等は別れた。それぞれの家路についた。

* * *

ログハウスに帰る前に、少しだけ寄り道することにした。今日は良い天気。雲も少なく、星が良く見えた。月も、今日は満月だ。写真に収めたいに綺麗。額縁に収めれば、賞を貰えるかもしれない。そんな夜空。静寂。こんな日に仕事なんてしたくもない。明日から仕事で良かった。

夜空が見れる丁度良いポジションを探した。結果として、世界樹の一番上に座ることにした。ログハウスに帰ろうとしてからまたここに戻ってきた、ということだ。少し足が疲れた。

考える。思考する。

ぼくは、どっちに行こうかと。

魔法世界の崩壊。ぼくは、フェイトの手助けをするべきなのか。それとも、止めるべきなのか。どちらが正しいかなんて分からない。だけでも、フェイトも、『立派な魔法使い』と同じだと思う。

自分の思考を頑固として曲げない。『魔法世界リライト計画』を止めさせると言えば『戯言を言うな』と言われるだろう。実際止めようとするれば、ぼくは恐らく消えるだろう。消される。今の身体は『死神』という幻想で象られているのだから。

「まあ、どっちでもいいんだけどね」

ツルギさん達を何らかの理由でこちらに来させればいいのだ。ぼ

くの言う『組織』。形としては『何でも屋』だ。請負業とも言う。その実質的リーダーはぼくだ。代行としてツルギさんとアドニス君がリーダーと副リーダーとしているわけだし。その二人を動かせるのは、ぼくだ。町の人を全員とは言わない。あの酒場に集ってた人だけでもいい。学園長に許しを請い、こちらに来させればいいのだから。

「さて、……明日も授業があるんだっけ。あれ、今日ぼく授業出てないな……まあいいか」

エヴァさんとの雑談はなかなか楽しいし。

* * *

登校初日から既に一週間が過ぎた。やはり教室で机に着いて黒板を見ながらノートに写していく、なんていう行動は少し吐き気がする。そのせいで一度保健室に行ったくらいだ。

そんなわけで、今日も屋上でサボタージユ。

エヴァさんと一緒に寝ると時間も早く流れていく。そして早くもお昼休みなわけなんだけど……。

「おい、なんで一人増えた」

「嫌だなー、エヴァさん。私、ここに来てからもう一週間くらい経ちますよ?」

「そうですよ、エヴァさん。今更なことを言わないでください」

「あ、愛華ー。これちよーだい」

「うん、いいよ」

ぼくの持つてる弁当の中身からミートボールを取って口に頬張る。美味しそうに食べてくれる。作ってる側としては、喜ばしいことこの上ない。

「おい貴様等。変にらぶらぶワールドを展開させるんじゃない」

「何言ってるんエヴァさん。私達らぶらぶワールドなんて展開させてませんよー」

「それをらぶらぶと言わずして何と言う。お弁当を二人で分け合うなど……」

「エヴァさん、後で膝枕してあげますから嫉妬しないでください」「嫉妬なんてしとらんわ!!」

それにしても、学校の大抵の時間を屋上で過ごすって言うのはどうなんだろう。まあ、学園長がフォローしてくれてるみたいだし、留年は絶対がない。更に言うなら、ぼくは中学を一年で辞めるつもりだ。エヴァの世話と警備。既にこの二つだけでも大変なのだ。ああ、早くあの何でもできそうなロボットとか来ないかな。この際あの未来から来た青いタヌキでもいいんだけど。その内「君は実に馬鹿だなあ」みたいなこと言われるかもしれないけど。ロボットに馬鹿って言われても仕方ないよね。なんせあつちは高性能AIなんだから。せ。

昼飯が食べ終わるとシオンちゃんは授業に戻る。シオンちゃんは普通の学生としてここにいるからね。警備も最小限だけなんだってさ。まあ、学業を頑張れということだ。

一方僕は大概の時間を家事に費やす。最近じゃあ日常がパターン化してしまった。この前の日曜なんかエヴァさんとCDシヨップに行ったこと以外平日と殆ど変らなかつた。

そんなこんなで放課後になる。エヴァさんと一度ログハウスに帰り、夕ご飯の下拵えを終えると、ペットショップに行き猫用缶詰を数缶買う。

「あ、愛華ちゃんだ！」

そんな声と共に子供達が集まってきた。ぼくは何故か小さい子供たちに好かれるらしい。暦ちゃんと言いこの子供達と言い。疲れることこの上ない。

更に、ここに来ると集まってくるのがもう一種類。

「にゃ〜」

まあ、猫だね。

猫は良いよ。癒される。肉球とか毛並みとか。

「愛華ちゃん、肩車してー！」

「今はダメだよ。あ、こら。勝手に乗るな」

この年頃の男の子は好き勝手ばかりだ。ぼくは……どうだったかな。過去は振り返らない主義だから、あまり覚えてない。

「愛華さーん！」

お、この声は……。

「暦ちゃん、お帰り」

「ただいまです！」

「あ、暦ちゃんだー！。見て見てー、ネコちゃんたちに新入りが来た

「んだってー」

小等部の同級生らしい。暦ちゃん、ちゃんと学生やっている様で少し安心。

それにしても、暦ちゃん、最初は猫たちに警戒されていた。同じネコ科なんだから少しは仲良くしろよーと猫たちの方をしつければ警戒心も解けたけど。

猫たちの餌やりが終わると無理矢理子供達に振り回される。子供だから怒ろうにも怒れない。泣かれたら面倒だし。しかし本当にどうしよう。時間的にもうすぐ夕飯にしないと……。

「で、また子供達に振り回されていたのか」

「はい、そうです」

「愛華さん優しいんですよー。エヴァさんと違って」

「なにをう？ 私だってお前に優しくしてるだろー！」

「ふーん」

「く……貴様、早くクロキの肩から下りてこい！ 八つ裂きにしてやるー！」

あーあー。また始まった。なんでこの二人はこうなのだろうか……。

ちなみに今、暦ちゃんはぼくに肩車されている。ぼくが肩車を強制されたと言った方が良いのだろうか……。

夕食は簡単なチャーハンにしておいた。勿論、エヴァさんのためにニンニクなどは抜かれてるけど。ニンニクを入れるのがぼくの主流だったんだけど……。まあいつか。

夕食はいつも通りの流れだった。暦ちゃんがエヴァさんの所からエビを取って行ってエヴァさんがキレて二人が騒いでぼくが席に座らせる。なんだか疲れる。

その後は、「従者なら主の体くらい洗え」というエヴァさんと「愛華さんに入るー！」と言って聞かない暦ちゃんとで入浴。元から一人用だったバスタブはエヴァさんと暦ちゃんの小さいペアが入るだけで隙間がない。故に二人がバスタブ入ってる間にぼくは自分の体を洗い、エヴァさんが出るのを待つのである。暦ちゃんはぼくと一緒に入らないとずっとバスタブを出ないと言って聞かないので（ここまで来ると大層な我儘だ。原作での暦ちゃんはもつと我欲が小さい子だったと思うのだけれど……）、ぼくと十秒だけ一緒に入ってから出る。

エヴァさんのベッドを新しいベッドに取り換え、ワインを飲んでるエヴァさんに終わったことを伝える。そしてそのままぼくもワインを少し飲む。アルコール度数が限りなく小さい物を飲ませて貰ってるから、あまり酔うことはない。いや、酔うけどさ。

程良いところまで酔うとエヴァさんは就寝する。

それを見届けてからぼくもベッドに入る。そのときの時間が、確か二時。エヴァさんはお酒に強い方なので、なかなか寝てくれないのだ。

それから、ぼくとエヴァさんが寝るのを何気に待っている暦ちゃんを寝かしつける。どうも、なるだけぼくと密着していたらしいな。なぜだ。まあ、親がない戦争孤児とかだったはずだから、人肌恋しいのかもかもしれないな。

そして六時きっかり、眼が覚める。暦ちゃんを起こして寝巻きから制服へと着替える。暦ちゃんはずっとしていてなかなか着替えようとしなから、大半はぼくが着替えさせる。既に親子の様である。

それから朝食を曆ちゃんに手伝ってもらい、朝食の合間に弁当の中身を作っていく。

朝食が作り終わると、エヴァさんを起こしに行く。

「エヴァ、起きてください。もう時間……」
「うー」

とまあこの通り、ワインを飲んで寝るせいなのかどうかは定かではないが、寝起きが曆ちゃんレベルなのだ。ずっとぼーっとしてる。だからエヴァさんの着替えも大半がぼくがやる。ぼくが来る前ってどうやって着替えてたのか、すごく気になる。

最初に曆ちゃんが家を出る。それを見送ってから朝食の片付け。次に弁当を二つ鞆の中に入れてエヴァさんと家を出る。

そしてまた学校へ行く。

ここ一週間で出来た大体の流れはこんな感じだ。

休日は掃除や曆ちゃんとエヴァさんで出掛けることで暇つぶし。

この前のCDショップが良い例になってくれるだろう。

生前良く聴いていたSee-therの「Truth」のCD。更にCDプレイヤーも買ったのは僥倖だった。と言っても、聴く時間などそうそうないのだけれど。

代わりに貴方は死んでくれますか。

「鬼が出るんだって」

「鬼？」

「そ、鬼」

学校に来て一番にシオンちゃんによる突然の「鬼が出るんだって」発言が待っていた。

「なんでも、ここ最近鬼がこの麻帆良中近くで目撃されたんだって。私的に西の関西呪術協会が怪しいと思ってるんだけど……」

いや、それもどうだろう。

今、近衛木乃香はまだここに来ていないはずだ。いや、どうだろう。後で曆ちゃんに調べさせようかな……。まあ、西洋魔術に染まったっていうのが関西とのいざこざの始まりだったはずだから、木乃香ちゃんがいようがいまいが関係ないんだけどね。

実際鬼を従えるのなんて関西くらいだしね。

「警備を厳しくするって連絡行ってない？」

「うん、来てない」

「嘘。携帯光ってるよ」

「……来てみたいだね」

「ダメだよ、ちゃんと見ないと」

「ここのお姫様のお世話が忙しくって警備どころじゃなかったんだ」「づぐ……」

エヴァの頭をぐりぐりと撫でる。

そうそう。いちいちエヴァさんエヴァさん言われるのはあまり好きじゃないらしい。だから呼び捨てにすることにした。正直五百年以上歳が離れてる人を呼び捨てっていうのには少し抵抗があった。だけでも呼んでみるとしっくりする。きっとこの外見のせいだろう。

「なんだ。警備なんて事足りてるだろ」

「ダメだよエヴァー。そもそもエヴァだって警備員じゃん」

「うるさい。私はそういうのは嫌なんだ」

呪いはどこ行った。『登校地獄』には学業よりも警備をすることを優先にしてあると、エヴァ本人が言っていたのだけれど……。原作はどうだったのかな。

まあ、少し出歩けば警備したことになるとか本人が言ってたし、案外簡単な呪いなのかもしれない。解く解かないの問題は別として。

鬼、か。鬼と言えば、思い出すのは原作の修学旅行に出てくるリョウメンスクナノカミだが……。しかしあんなでかいのがいればすぐ分かる。ともなれば霊格はそんな高くなさそうだな。

「でも、なんのために鬼を？」

麻帆良を落とす為ならとつくにぼくの眼にも見えてるはずだ。

「さあ？ それが分からないからこそその警備強化なんじゃないの？」

「ふうん、そっか」

と、そのとき。

「ねえ、シオン。もうホームルーム始まるよ。席ついて」
「あ、裕子。嘘、もうそんな時間？ うわ、マジだ。席戻らなきゃ
ー……って、私もう席ついてるよー！」
「うん、まあそうなんだけど」

えっと……。確か、野之裕子。「のゆうこ」、ではなく「やの
ゆうこ」。黒いロングヘアはとても綺麗。大和撫子はこの人のた
めにある言葉だと思ってしまっほどの美少女である。ぼくが男の頃
だったら確実に惚れていただろう。

ちなみに、シオンちゃんと一緒にいるのをよく見かける。

「まあいいや。とりあえず、席に正しい姿勢でいた方がいいよ」
「らじや」

了解しちゃったよ。まだ話の途中だったんだけどな……。まあい
いか。この話ならエヴァが知ってると思うし、後で屋上で話を聞こ
う。

それより気になることがあるし。

「ねえ、シオンちゃん」

「ん、なに？」

「いや、なにも無理に姿勢正して話聞かなくても良いと思うけど…

…」

「そう？ じゃ、お言葉に甘えて」

姿勢を崩してこちらに顔を向ける。顔が近くなって少しくらっ
と。いやー。ぼくにもまだ男の心があったのか。はは。

「さっきの子とシオンちゃんって仲良いの？」

「うん。小学校の頃からずっと一緒なんだ」

「あれ？ シオンちゃん、小学校は……」確か麻帆良じゃなかったはず。

「うん、元は東京の学校だったよ。だけどほら……魔法使いの家系で生まれたから、中学くらいはこっちで過ごさせて、お母さんがさ」

苦笑い。

シオンちゃんはシオンちゃんでもんどくさい日々を送っていたそうだ。

「それは分かるけど、裕子ちゃんも一緒に来たの？」

「私も吃驚したよ。入学式の日裕子がいたの、本当に涙が出るくらい嬉しかった」

……ぼくには少し分からないな。そんなストーリーカー染みたことさ
れたら、逆にひいちゃうかも。エヴァもぼくと同じことを感じたのか「ふん」と鼻を鳴らして居眠りの体勢に入ってしまった。

「よし、ホームルーム始めるぞー」

おや、先生が来てしまったようだ。

* * *

シオンSide

お昼の休み時間。いつも通りに愛華がいるだろつ屋上に行こうとした。したのだけれど、それを裕子に止められた。

「ねえ、どこ行くの？」

「え、えつと……屋上だけど」

「あの愛華つて人のところ？」

「……まあそうだけど……」

分かっているのならなんで訊くんだろ？

そう怪訝な目で裕子の顔を見た。

裕子はどこか寂しそうな目で私を見ていた。

「なんであんな人と一緒にいるの？」

「え？」

「だって、あんな、暗いし……。……それに……」

殺人鬼だし」

「……え？」

裕子が、何か言った。でも何を言ったのかは分からない。まるで理解するなというように、分からなかった。分からない、分かりたくない。

「と、とにかく……シオンは、私の友達だよね？」

綻る様な目で裕子は私を見る。私は、私は……。

「うん。そうだよ。私達は友達だよ」

そう言うことしか、できなかつた。

* * *

くクロキSideく

放課後、今日は警備の日なので、夕食は曆ちゃんに任せてある。あれでも家庭的な子なのだ。まあ、ぼくがこの一週間で仕込んだんだけどね。女の子なんだから、料理くらいできなくちゃ。

そんなわけで、携帯をいじりながら学園をめぐるわけですね。鞆の中に入ってるCDを聴いたりもする。え？ 警備する気はあるのか？ …… あんまないかもね。まあ、これでも給料貰えるって話だし、いいんじゃないかな。

麻帆良の桜通り。ここはこの時代でも存在するらしい。桜色はどこにもなく、鮮やかな緑が木を覆っている。

「……そろそろ、出てきても良いんじゃないかな」

ぼくは誰もいないはずなのに、そんなことを言った。其処に本当に誰もいなければ、客観的に見たぼくは少し変な人に見えるだろう。だけでも、ぼくは変な人なんかじゃない。

ぼくが呟くように言った後、それは姿を現す。

「……………」
「……………」

そいつがなにか言った様な気がしたけど、なにを言ったのか聞き取れなかった。だから、ぼくも相手が聞き取れないだろう小さな声で答えた。

そこにいたのは、鬼だった。正しく鬼。

殺人鬼でも吸血鬼でもなく、紛れもない鬼だった。

* * *

「え、鬼に会ったの!？」

「うん、会ったよ。想像してたのより随分小さかったから興奮めしたんだけどね」

「まさか倒しちゃったの？」

「いんや、戦ってすらない。なんか気付いたら消えちゃったから」

「さつきから何の話をしているのだ？」

「愛華が噂の鬼を見たって話」

お弁当を食べながらする話でもないんだけどね……。けどまあ、仕事の一環として鬼退治はしなくちゃいけないのかもしれない。少しめんどくさい。

あの大きさ……木に丁度隠られるサイズの鬼なら、それほど強いというわけでもないのだろう。ただ、気になるのは術者の方だ。幼い声だった。どこかで聞いた気もするけど、とても幼い声だった。

「西洋鬼と東洋鬼の違いってすごいよね」

なんとなく思ったことを言ってみた。

「は？ なにが言いたい」

「吸血鬼と鬼のことを言ってるんだよ。吸血鬼はこんな可愛いのがいるけど、鬼って須くゴツイじゃん」

「あー、確かにそれはあるよねー。こんな可愛い子が鬼だなんて思えないもんね〜」

そんなことを言いながらエヴァに抱きつくシオンちゃん。何気に

シオンちゃん、エヴァと普通に接せている。ガンドルフィーニ先生だかガングロフィーニ先生だかここに来たら対立しそうだな。

一方抱きつかれたエヴァの方は鬱陶しそうにしている。と言うのは建前で、本当は嬉しいんだろうね。ずっと一人だったんだろうし。エヴァと普通に接してくれてるのなんて、かの英雄であるナギや学園長くらいだし。後はお人よしの先生かな。

「それにしてもエヴァはいいよね。毎日こんな美味しいお弁当作ってもらえてさ」

「ん？」

「ふん、当たり前だ。こいつは私のメイド的なものだからな！」

「おい」メイド的なものってなんだ。下僕か？

「メ、メイド！？ そ、そんな……既にエヴァに取られていたなんて！」

「おいこら」取る気だったのか。

「ふはは！ 私がこんなロボットみたいになんでもできる奴を放っておくなんてするわけないだろう！！」

「誰がロボットだ」ぼくはそこまで高性能じゃない。少なくとも某国の「先行者」並の性能だ。

「た、確かに！ 愛華ならロボットパンチもできそうだ！」

「できねえよ」てかロケットパンチの間違いだろ、それ。

はあ……。まったく。

なんだか最近流されてるなあ、ぼく。《高校野球最後の夏「甲子園」突入、ただし全員熱中症》みたいな？

ダメだ、意味分からん。

「それより、鬼というのはどういう鬼なんだ？」

「普通の鬼だよ。そこら辺に召喚される雑魚中の雑魚。だけど、術者に問題が……」

「なにかあったの？」

「……外見は見てないんだけど、なんか小さい女の子の声みただった」

昨日は鎌掛けて「さつきぶりだね」とか言ってたけどさ。本当は誰なのかなんて木っ端微塵も分からないんだよね。

「まあ、良いじゃないか。魔法先生共に任せておけば」

……まあ、それもそうなんだけどね。

あの鬼なら幾らここの人でも倒せるだろうし。

「ふあ、あゝあ……」

「ん？ どしたの愛華、眠いの？」

「うん……最近四時間しか寝てないから」

まあ、某執事は二時間しか寝てないから、まだマシンだけけどさ。でもこれはなかなかきつい……。

「ふふん、愛華。こんなときは私に任せんしゃい！」

どこの方言だ。

「ほら、愛華」

膝の上に広げていた空になった弁当を片付けて、手招きしてきた。ぼくにどうしろと？

まあ、とりあえずは従ってみよう。水の如く流されることがぼくの売りですよ。

「で、どうしろと?」

「ひ・ざ・ま・く・ら、してあげる」

なにをそんな楽しそうに言っているんですかシオンちゃん。

膝枕つて……。良いのだろうか。ぼくのような男……否、女がして
も。

「良いから早く!」

「あぶ……!」

無理矢理に寝かせられた故に変な声が出た。……虻?

膝枕を(強制的に)してくれと頼まれることなら何回かあったん
だけど(曆ちゃんとか曆ちゃんとかエヴァとか)、膝枕を(強制的
に)させられるのは初めてかもしれない。シオンちゃんの水色の髪
の毛がぼくの肌をくすぐった。

……膝枕か。確かに、良い寝心地だ。ふにふにしてて、暖かくて
……。変態的な意味じゃなく、心地が良い。

ああ、寝てしまいそうだ……。

* * *

シオンSide

「寝るの早!?!」

まだ膝枕して十秒も経ってないよ!?! 近未来ネコ型ロボットが
世話してる某小学五年生並に早! かなり疲れてるんだらうな……

…。
曆ちゃん……だったけ。その子の親代わりみたいな感じになって
るって言うってたし、更にはエヴァのメイドさん。他にも警備や学業
(学業は殆どサボってるけど)。その内この子倒れちゃうんじゃないの？

「私だって、倒れるまで仕事をさせる気はない」

お？ 意外とエヴァって優しいんだ？ もっと鬼畜かと思った。

「だから警備を止めさせるようにジジイに言っているんだが、どうも退いてくれん」

そっち！？ エヴァのメイド役は撤回しないの！？

エヴァの傲慢っぷりを見た瞬間、視聴率五パーセント！

……我ながら意味の分からない発言が多いなあ。

* * *

↓麻帆良学園都市、とある校舎の一室↓

そこに、男性が一人と制服を来た少女が一人。少女は窓を見ながら、男性は少女から一番離れた位置にある席に座りながら、話をしていた。

「どう？ 《子》の調子は」

少女は問い掛ける。男性に向かって。窓を見ながら。その眼は窓しか見ていない。光景など、眼中にない。

「なかなか、育たないもんだよ。あいつに、随分と怖れを削がれてしまったみたいだね。君こそ、《子》を操れる自信はあるのかい？」

男性は問い返した。少女に向かって。机を見ながら。その眼は木目を数えてるが如く机から離れない。少女は窓から目を離し、男性を見遣った。しかし男性は動かない。ここには諸行無常等と言う概念は存在しないという程に、変わり様がない。まばたきすらしない男性には、少しばかり恐怖を感じる。

「勿論、《あの子》くらいなら私でも手懐けることはできるわ。…貴方こそ、本当に《計画》を遂げることができるの?」「無論、ここのジジイ共に後れをとるつもりは一切ないよ。…それと」

男は突然、眼を鋭くして少女を見た。少女は少し臆する様に数歩後ずさった。

「ルールは守れよ」

「……承知してるわよ、先生」

少女はそれだけ言うと、影の中に吞まれていった。影を使ったゲート。

一人残った男性……否、獅子谷教員は、呟いた。

「……………死ね」

その眼に、一つの思いを。

その目に、一つの殺意を。

その瞳に、一つの願いを込めて。

* * *

くクロキSide)

さて、今日はどうしようか。本当に警備が強化されているらしく、なかなか忙しい。と言っても、鬼を見たという魔法生徒も魔法先生もいない。皆は少し『噂話なんだろうな』というレベルにまで油断しているだろう。ぼくという一存在とシオンちゃんを残して。

「昨日は、ここだった」

「……ふう、ん……。じゃ、やるっか」

「うん、お願い」

ぼくはこの前鬼にあった場所をシオンちゃんに教えた。ぼくは魔法と言うものに乏しい。知ってるのも大抵攻撃魔法だ。アインさん自体、攻撃魔法以外は乏しかったらしい。……後で師匠と呼べる人を探そう。

「《^{オプ}解析》」

シオンちゃんをここに連れてきた理由がこれだ。シオンちゃんの《解析能力》は万物に通用し、なにより魔力探査までできるらしい。本当、能力に恵まれている。原作でシオンちゃんが出てきていたらかなり便利な感じに使われていただろう。

「……うん、確かに。魔力は感知できるね。それも、まだ結構残留してるっぼい」

「そう？ 残留した魔力くらいならばくも感知できると思うんだけど」

ぼくがシオンちゃんを連れてきたのは、魔力が誰のものなのかを調べるためだし。

「うづくん、まあ、確かにこの魔法先生でも探るのは難しいくらいしか残ってないし」

「結構残ってるって言ったよね」

「残ってる方だよ、これ。だって鬼を見たのって一昨日でしょ？」

ここを通った人の魔力なんて殆ど消えてるし、それが普通。だけでも、ここでは残ってる。これって一応異常なんだよ？」

うづむ……。そんなものなのか。

「そんなものなの。で、この魔力の持ち主が通った道なんだけど……」シオンちゃんは、とててと小走りに木の影があるところまで近寄っていき、指を指した。「……ここで途切れてる」

途切れてる？ どういうことだ。転移でもしたのだろうか。

「多分転移だね。けども転移の形跡はもう見当たらない。ここに残ってる魔力は鬼の物で、術者は普通レベルなんじゃないかな？」

逆にそれが仇となったね……。術者がとてつもない魔力の持ち主なら鬼同様ここに残っていただろうに。

けども、それを言っても仕方がないのだ。とりあえず、警備に戻ろう。

桜通りから離れて、一つの校舎の前を歩く。

無言で歩くのは心地が良いけど、少しでもシオンちゃんと話をしたい。随分前までは、ぼくが嫌われる要因でもあった会話。

「ねえ、シオンちゃん」

「ん？」

「君は人殺しを許容できるかい？」

「……………突然どうしたの？」

シオンちゃんは目を丸くしていた。まるで信じたくないものを見る様な目で。

このリアクションは、少しでも新鮮だった。

「いや、別段これといった理由はないよ。ただ聞きたいだけ」

それだけ言うと、何故かほっとした様な顔を見せるシオンちゃん。なにかあったのだろうか。学園長辺りに「黒木愛華は殺人鬼の疑いがある」とか言われてそうだ。エヴァでも調べがつく程に、ぼくは有名人らしいからね。それも、いろいろ捏造されている。どうやらメガロの下部組織の親馬鹿は、どうしてもぼくを捕まえたらしい。息子を追い出されたくらいで殺人の捏造までするとは、あまり良い心地はしないねよね。

「うん。人殺し……………殺人かあ。まあ、許容はできないと思うな」

「……………なんで？」

「なんでって……………犯罪じゃん」

「犯罪なら、全てが悪かい？」

「そうは言わないけど……。なんて言えばいいのかな？」

うん、と唸りながら考える。言葉を探しているらしい。

「じゃあね」

言葉は探せなかったらしい。急に話を方向転換させてきた。

「愛華はどうなの？」

「ぼく？」

「うん、許容できる？」

まあ、予想はしていた。この切り返しの仕方はぼくの逃げ道でもあったし。

「できないね」

「へえ……。やっぱりそうなんだ」

「うん。殺人をしたものは須く地獄の底辺にまで突き落ちるべきだよ」

「そこまで言うか……」

「どこまでも言うよ。殺人者は、須く地獄の底辺に墜ちて業火に焼かれ死ぬ必要がある」

シオンちゃんは少し怯える様な目でぼくを見ていた。

どうやら親友関係はここまでらしい。やっぱり、こういう話はすべきではなかったんだね。ていうかぼくが嫌われた理由ってこれ？

なんてくだらない。

なんて意味のない。

なんて滑稽な理由なんだろう。

「……でも、身を守るための殺人だってあるでしょ。ああいうのは許されて然るべきなんじゃないかな」

「正当防衛、自己防衛かい？」

「うん」

「相手を殺して自分が生き延びる。それを、許すのかい？」

「あう……。そう言われると……。……。なんだか難しいね、この話」

苦笑い。その苦笑いは、もう見慣れている。

「難しくなんかないさ。ぼくがいたのはね、シオンちゃん。この正義がムカつくって言う話さ」

「ムカつく？」

「正義のためなら殺人もやむを得ない。そんなことを言うのに、殺人を許容しないんだ」

なんて矛盾。いらいらする。いらいらいらいらいらいら。

「なんか気持ち悪いね、そういうの」

「そう。気持ち悪い。内容物全部吐き出したくなるくらいに気持ち悪い。まるでダンボールの上を靴下を履いて歩くくらい気持ち悪い」

シオンちゃんは俯きながらぼくの横を歩く。ぼくは上を向いて歩く。

「……果たして、《立派な魔法使い》になることが、魔法使いの美德であって良いのだろうか」

「私は、……私は《立派な魔法使い》になりたい」

「ふうん？」

「その為の治癒術も手に入れてるし……」

へえ。随分とマシな立派な魔法使い見習いだ。
いや。

「シオンちゃんはもう立派な魔法使いだよ」

「え？」

「そうやって、誰かを治癒することを優先的に習うだなんて、偉い
じゃないか。もう十分立派な魔法使いだよ」

少し上から目線で言ってしまった。するとシオンちゃんはぼくの
顔を見た。驚いた様な顔だった。

「……初めてだなあ。そんなこと言われたの。そっか、もう私は立
派な魔法使いだったのか。……じゃあ、もっと勉強しないとね」

「……うん、そうだね」

目標を持っている彼女が、少し羨ましい。

だから、微笑んだ。そんな妬みを隠す様に、ぼくは、微笑んだ。
歪な微笑。

きつと目は、死んだ魚のままだろう。

「っー」

突然、シオンちゃんは上を向いた。シオンちゃんの視線の先には
既に使われていない古い木造建築の校舎。確か、元々は中学校だっ
たはずだ。

「どっかしたの？」

「……誰かが魔法を使った。多分、^{ゲート}転移だと思っ」

「……そんなことも分かるんだ」

「うん、基本魔法なら大抵分かるよ」

しかしゲートか……。

「シオンちゃん、追跡は……」

「できるよ。一応追ってみよ。愛華、手を」

右手を差し出してきた。ぼくもそれに従って右手をシオンちゃんの手を重ねた。

「《追跡》」

ぼくとシオンちゃんは、水に包まれた。

* * *

転移で出てこれた場所は……、暗くてなにがなんだか分からない。どうやらここはどこかの物影……そして気付いたけど、ぼくはしゃがんでいるらしい。立ち上がる気はない。なぜならすぐそこに気配があるから。

「(……シオンちゃん?)」

シオンちゃんが、変だ。

左目の魔眼を発動させているのは色で分かる(シオンちゃんの魔眼は使用中、金色に染まり、赤い六芒星が描かれる)。それは分かるのだが……、何故か口を押さえて、震えていた。

「（気持ち悪いの？）」

もしかして魔眼の使いすぎなのではないだろうか。魔族でもないシオンちゃんが魔眼を使うには副作用があるとか言う話があっても不思議じゃない。

だけでもシオンちゃんは首を横に振って、水色の髪を振り乱しながら全力でそれを否定した。

「（……信じたく、ない、の……）」

「（……？）」

シオンちゃんの口から出た声はしかし、消え入る様に小さい声だった。それでも聞き取れた。信じたくない？

「（……裕子が、魔法を使ったなんて……）」

「……え……？」

思わず、声を小さくするのを忘れた。急いで口を塞いだが、時既に遅し。

「だ、誰!？」

……確かに、この声は聞き覚えがある。シオンちゃんの、一番の友人。

野之裕子。

代わりに貴方は死んでくれますか。(後書き)

まだまだ駆け足気味。どうやら無意識の内に「早く原作へ……」と
なっているようだ。

貴方を私は知っていますが貴方は私を知っています。(前書き)

サブタイを滅茶苦茶にしたかった。後悔はしているし反省もしている気になっている。

貴方を私は知っていますが貴方は私を知っています。

お腹が熱い。ジンジンする。

あれから、ぼくらはゲートを使って脱出した。その経緯をちよつとした回想でお送りします。

* * *

「……………え……………？」
「だ、誰!？」

野之裕子ちゃん。彼女が、魔法を使った？ 彼女は魔法使いだったなんて情報、ぼくは知らない。それどころか、シオンちゃんすらも知らない。何故隠した？ 一般人にならまだ分かるのに、何故魔法関連者で親友でもあるシオンちゃんにも？

こつん、こつん。

足音が近づいてくる。だけでも、シオンちゃんは未だショックで動けない。ならどうするべきか。

「……………」
「……………っ！ 黒木、愛華……………さん？」

姿を現した。シオンちゃんだけでも逃がすべきだろう。存在を隠しておく必要もある。親友であるシオンちゃんに魔法を隠していたのだ。なにかしらの理由があるはずだ。

「……知ってるわよ」

突然、裕子ちゃんが不敵に笑った。そしてぼくを嘲るように、喋り出した。

「貴女、殺人鬼なんでしょう？ それもメガロの関係者を殺したって言う性質の悪い犯罪者」

「……肯定はしないよ」

「そして否定もしないんでしょう？」

「……そうだね、否定もしない」

本当は全力で否定したい。

それにしても、なんだろう。裕子ちゃん、いつもとキャラが妙に違う。

「ふふ、貴女のことを学園長に差し出したら、さぞかし喜ばれるでしょうね」

裕子ちゃんは指輪をはめた。あれが魔法発動媒体か。

「……それで、どうするつもりだい？」

「……さあ？ どうしましょうね。……そうね、少しお話ししましょうか」

「……（シオンちゃん）」

「（な、なに……）」

「（ゲートの準備、今ならできろっ）」

「（……うん）」

よし、なんとか大丈夫そうだ。

「お話……、なにか話したいことがあるのかい？」

「貴女、私のシオンにくつつきすぎなのよ」

「っ……」

シオンちゃんの肩が震えた。

……なにか心当たりがあるのかな。

「私とシオンの間に入ってこないで！」

「自分勝手なことを言わないでほしいな」

「いちいちいちいち、貴女ほんとにウザいのよ！」

「君にそんなことを言われる筋合いはないよ、裕子ちゃん」

女の子特有のねちねちした言い争いになりそうだ。

ぼくは一人称以外完全に女になってる感が否めないからなあ……。

「私のシオンから離れないと、私は貴女を殺す。絶対に。その四肢を？ぎ取って！ その首をへし折って！ その心臓を貫いて！ これまでにないくらいの惨劇を！」

それは少しまずい。ここに来て、原作が始まっていないどころか一年もたっていないのに死ぬのは勘弁だ。だから肩を竦ませるだけで済ました。突然、目の前の裕子ちゃんが消えて、目と鼻の先に裕子ちゃんが現れた。なんとも表現し難いものがあるが……つまり裕子ちゃんが瞬動を使ってぼくに近づいた。

「っ……。痛いよ」

「貴女、なんなの。ナイフで刺されてそんなリアクションしかとれないなんて、壊れてるんじゃないの？」

「ぼく実はロボットミーなんだよ。ウィーン」肩腕を上げながら効果音。

「馬鹿にしないで！」おうまいがー。ナイフをぐりぐりしないで。マジ痛い。

ちょ、まって。洒落にならん。ワイシャツに穴が空いた上に腹にも穴が空くとか。血がシミになる。それだけは避けたい。てか死んじゃう。ぐりぐりしないで。ホントはロボットミーじゃないから。

ぎりっ、と。噛みしめた奥歯が変な音を立てた。噛みあわない。歯と歯が削れ合って、鳥肌を立たせる。

「（っ……………《転移》！）」

シオンちゃん、少し、遅い。

* * *

というわけで、ぼくは今シオンちゃんによる治療が行われてる状況なわけですねはい。

「馬鹿！ なに挑発してんの！？」

「泣きながら言わないでよ。後結構力んでて痛い」

「ああ、ごめ！」

いつ以来だろうか。誰かに泣かれながら治療を受けるのは。なんだか、自分が情けない。原作が始まる前に死んだなんて冗談にもな

らない。「冗談になったとしても笑えない。

「と、とりあえず応急処置だけはしたから……。救急車は……。ああ、どうしよう！　なんて説明する!？」

「い、いいよ。このままで」

「良くない！　内蔵ぐちゃぐちゃなのよ!？」

マジですか。

「で、でもほら。ここの治療師に説明しようにも……。辛いでしよう。シオンちゃん」

「それは……」

さつきまで怒鳴るようだったシオンちゃんの声から気迫が消えた。やっぱり、裕子ちゃんのこととはまだ整理がついていないらしい。取り敢えず、この場でぼくがすべきなのはシオンちゃんの心の整理を手伝うことだろう。

「……ねえ、シオンちゃん。膝枕してよ」

「へ?」

「へ、じゃなくて、できれば肯定の言葉が欲しいな」

心の整理で一番良いのは、関係のない他人とのスキンシップだ。整理と言うより、忘れさせるって言う方がしっくりくるね。心の整理は一人でするものだから……。

「で、でも……」

「ダメかな?」

「ダメ……じゃない」

「うん、ありがと」

よかった。ダメだと言われたらどうしようかと……。頭を起こそうとお腹に力を入れて激痛が走った。

「ちよ、本当に大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃない本人が大丈夫って言ってるんだから大丈夫だよ」
「今さらつと本音を言ったよね……?」

果て、なんのことやら。

* * *

〈野之裕子Side〉

くっ……。まさか、あの女が校舎の近くにいたなんて、予想もなかった。最初に人の気配はなかったから……。

追跡された……。でもあの女、ゲートを使える程の魔法使いには見えない。教えて貰った殺人鬼の情報から察するに、逃げる方法は単純な瞬動。ゲートは使っていない。追跡されないために使っただけかもしれない。けれど、私に魔力を感じさせない程の追跡使用……。そんなことができるのなら、追跡されない様なゲートを使えば良いだけなのではないか? ……待つて。もしかして追跡なんて使っていないで、始めからあそこにいた?

いや、あの女がどこにいたのなんて関係ない。問題は逃げ方。私が見ただけでも、彼女はゲートを吐かる程の手練れじゃない。

……ともなれば、推測はついた。

木造の校舎。その教室のドアを、こんこんとノックした。

「獅子谷先生」

「どうかしたのか」

疑問符のない応答。それを聞いてから木造の教室に入り、私はいつものポジションについた。

「黒木愛華に気付かれたわ……。まだ真意には気付いていないと思うけれど、気をつけた方が良い」

「気を付けるのは君だ。《あの場所》には頻繁に行くと言ったはずだぞ」

……。反論の余地もないわ。これは完全に私の落ち度。

「それと、黒木愛華に強力なバックアップがいるかもしれないわ」「エヴァンジェリンか？」

「いいえ。今の彼女の魔力ではゲートも追跡を使えないし、それに彼女は影を使うはずよ。あのゲートは水だった。……魔力運用がかなり上手な人が……いるはずよ」

ふと、シオンを思い出す。

そんなわけない。シオンは私だけのものだ。あんな女にとられるはずがない。

「兎も角、私も十分に警戒していくわ。貴方も……」
「言われずとも」

彼は動かない。まるで人型の通信機器か何かのように。けども目は動いている。机の木目を数えている様に。

「坂城紫恩に対する私情から、なにかを見逃したりしていないだろうか？」

「え？」

「そのバックアップのことだ。水を使ったゲートは麻帆良の教師には少ない。だがそいつらは俺の《子》に見張らせている。無論動きなど無い。」

それに、魔力運用の上手さ、水を使うゲート。それらから推察するに坂城紫恩が一番怪しい」

……。反論の余地もない。私から見たあの子は将来有望な魔法使い。だけでも、彼女を《立派な魔法使い》にさせるわけにはいかないと、ずっと邪魔してきた。あの子は私だけの……。

「兎も角だ。彼女にも俺の《子》を」

「いいえ。私が行きます」

「……………口答えか？」

「うっ……………」

鋭い視線が私を抉った。だけど、もし本当にシオンがバックアップだったら……………。

殺される。

* * *

シオンSide)

愛華が…………殺人鬼。愛華は肯定しなかった。けれど、否定もしなかった。まるで諦めている様だった。この私の膝の上で寝てしまっている子が…………。想像もつかなかった。いや、想像は、ついてた。

特徴が、一致してたから。だけど、一致しすぎているが故に現実味も薄れていた。それが、私の逃げ道となってくれた。

「ねえ……どうして……なの？」

いつの間にか視界がかすんでいた。腕で、拭う。それでも、視界は霞んでいて……。もう、嫌だよ。

「泣いてるの？」

「っ……」

寝てると思った愛華が、話しかけてきた。見れば、私の涙は滴り落ちていて、愛華の頬を濡らしていた。ずっと、愛華が私の頬を拭ってくれた。

「ね、愛華」

私は、愛華の頬に落ちてしまった自分の涙を拭った。

「ん？ どうかした？」

「……正直に、答えてほしいの」

そつだ。まずは答えを聞くしかない。

それから判断するしかないんだ。

彼女と私の……関係……。

「貴女は、例の殺人鬼なの？」

「……………」

愛華は驚くほどになんのリアクションをしなかった。ただぼーっ

と……。どこか虚ろな目で、私を見ていた。

「……そう、だよ」

……。なんで、こんな気持ちになるんだろう。

嘘だよ。だって、こんな……。こんな子が……。殺人鬼だなんて……。

「貴女は、私に言ってくれたよね」

否定したかった。

「私に、言ってくれた」

理解したくなかった。

「殺人者は」

だから。

だから、この質問をした。

「地獄の底辺にまで突き落ちるべきだって……言ったよね？」

「……言ったよ。その意見を曲げる気もない」

「なんで、そんなこと言えるの……？」

そんな、自分は地獄に落ちるべきだなんて……。だって、愛華は

……。

「言えるよ。何度だって言える」

だって愛華は、エヴァのお世話をめんどくさそうに、だけでもサ

ボること無くしてあげてる。

「確かな確信を、確かな意思を持って言える。殺人者は地獄の底辺にまで突き落ちるべきだと。……だからぼくは」

警備の仕事だって嫌嫌ながらしてる。私と話をしてくれる。私を、《立派な魔法使い》だって言ってくれる。

「ぼくは、地獄の底辺にまで落ちる覚悟をして、ある人達を護ろうとしたんだ」

……え……？

「護る……？」

「うん。本当は、護る必要もない程強い人達だったんだけどね。ぼくの所為で変に怪我を負わせたくなかった。だから、あの町を出て、ぼくはもうあの町にいないと示した。それが、初めての殺人だ」

愛華は。

まるでナニかを思い出している様に、微笑んでいた。

まるで思い出を思い出している様に、満足していた。

これから死に逝く様な表情だと思った。

愛華の傷口に、私は手を添えた。痛くない程度に。けども、愛華は少し身体を震わせた。手が、冷たかったのかもしれないし、痛かったのかもしれない。だけど、謝れなかった。嗚咽が邪魔をして、謝れなかった。

「黒木、愛華」

「……………」

「貴女を、殺人鬼の疑いで、拘束します……」

そんなことを言うと、愛華は「やっぱりか」みたいな顔をした。そして諦めている様に、希望など疾うに忘れたという様に……咳いた。

「君に逮捕されるなら、ぼくはそれでいいかな」

なん、で……。

「……んで……よ……」

「え？」

「なんで、……なんでそんなこと言うの!？」

愛華は、逆になんで私がそんなことを言ったのか分からない様な顔をした。彼女の眼が、はっきり開いてるところを、私は始めてみた。

綺麗な、紅眼だった。

「私が！ 貴女の友人である私が貴女を拘束なんてできないの……分かってる、くせ……に……うっ……」

* * *

くクロキSide

どうしよう。なにやらシオンちゃんをマジ泣きさせてしまった様子。いやそんなの見れば分かる。どうするべきなのだろう。いや、

ぼくからすればなににもできない様な感じなんだけど。

「えっと……シオンちゃ」

とにかくシオンちゃんの名前を呼ぼうとした時、ごくごくそとすぐ近くの茂みで音がした。

もしかしたら鬼か？ それとも裕子ちゃん？

「なにをしているのだ？ 貴様等」

エヴァだった。

なにをしているのかなんて悟ってくださいよ。そう切実に思った。シオンちゃんなんて泣いてんだからさ……。

* * *

「はあ……貴様はホント、なんというか……馬鹿なのか？」

「それさつきも言われました。シオンちゃんに」

「言われて当たり前ですよ愛華さん。挑発した上に自滅だなんてウルトラマンもやりませんよ」

ウルトラマン基準なのは何故なのだろう。

そんなわけで、エヴァに治療してもらった。不死だからそういうのは不慣れだったりすると思っていたのだけれど、それは魔法に限った話らしい。年の功を感じた。

「まあ、あと数日すれば傷も塞がるさ。それまでは絶対安静だ。学校も休め。弁当は私と暦で作る」

「……うん、ありがとう」

ところで、先程からそこにいるはずのシオンちゃんの声が聞こえない。

そう思って部屋を見回したら部屋の隅で丸くなっていた。

「泣いてるところをエヴァに見られた……」

どうやらエヴァに見られたのがショックだったらしい。

しかしそれにしても、絶対安静とは……。なんだか無理な気がする。なんせ、ぼくの主はエヴァだ。こう言う時に限って、妙なボケをやらかすんだよね。

これから起こるだろう災難に、ぼくは気を滅入らせた。

シオンちゃんは寮に戻るようになった。当たり前だ。時間が時間だった。

そして今は夜。曆ちゃんが怪我人であるぼくと寝る訳にもいかず、エヴァと一緒に寝てくれるらしい。ぼくは絶対安静なわけで寝返りもうてない。うてばその瞬間腹部に激痛が走るだろう。そんな予想と恐怖でぼくはずっと仰向けでCDを聴いている。

「……………織月か」

窓の外に見えた月は満月ではなく、細い織月だった。それがどうした、という話なのだが……。

つまりそれほどにぼくは暇なのだ。いつもならエヴァの世話に忙しいし。「休めれば良いのに」とか思ってたけど、休みなんてなくて良いと思った。動いていないと、なんか背中の中が痒い衝動に苛まれる。

疲れきってるはずの身体は、なかなか眠りへと誘わせてくれなかった。

* * *

あれから数日。意外にも何事もなく過ぎていった。
うん。お粥の中に油と間違っつて洗剤が入ってたこととか、掃除かなにかしてるのか、下から何か割れる音が聞こえることが何事も無いというのなら、無事に何事もなく過ぎていったというべきだろう。

「あー……」

そんなこんな、お腹の傷も完璧に閉じた……と思う。まあ、寝返りうっても痛くないし、身体を捻っても痛くない辺りもう大丈夫なのだろう。

というわけで今日から学校なわけなんだね。

「なんかぼーっとしてるけど大丈夫？」

「多分大丈夫。でもなんか、長時間じっとしてたから身体の動かし方が分からない。あれ、腕が上がらない」

「それお医者さんに診て貰った方がいいと思うよ……」

そんな感じに話をしていたらホームルームが始まった。

「鬼、だかんだか噂として飛び交ってるらしいけれど……。職員会議の結果、それは不審者の仕業と判断された。外出するときなるべく一人にならない様に」

ふむ、なるほど。そう言う風に判断されたわけか。まあ、妥当だな。

「ああ、そうそう。黒木さん、放課後残ってもらえるかな」

「はい」とは言うものの本当は残りたくなかない……。

ログハウスの掃除とか、夕食の買い物とか（朝冷蔵庫を見たら空っぽだった。弁当は仕方ないのでコンビニ弁当）。今日は警備がないから、これまでにできなかったことをやるうと思っていたのだ。まあ、呼びだしとあらば出向くほかあるまい。

* * *

放課後。

「えっと、獅子谷先生。なにか話でしょうか？」

「ああ、うん。少しね。風邪はもう大丈夫そうだね」

「え？ ああ、はい」

どうやら風邪と言う話で通っていたらしい。

教室に残ったのはぼくと、獅子谷教員と……裕子ちゃん。シオンちゃん、裕子ちゃんと一緒に帰るから気にしないで、って言ったけど……どうなんだろう。

「いやー、悪いね。こんな時期だつて言うのに残らせちゃって」

「いえ、別に……。あの、裕子ちゃんは……」

「ん？ 彼女は……さあ？ なにか探してるんじゃないかい？」

確かに、こつちには目もくれず……。机の中を漁っている。

「まあ、それよりさ。ほら、このプリント。坂城さんに渡そうとも思ったんだけど、君は寮じゃなかったからね。同居人のエヴァンジエリンさんも、どこでサボってるのか……」

ああ、そういうことか。この数日分のプリントを配りたかったわけですか……。ぺらぺらと適当にめくりながらプリントを見ていく全部で九枚。その内七枚が『鬼に注意』を促すプリントだった。他二枚はどうやら二学期の大型イベントであるらしい『サバイバル校内!』だそうだ。なんだそれ。まあ、後で良く見てみよう。

「……鬼に関する話が多いんですね」

「ん？ ああ、そうだね。僕も、疲れちゃって……困ったものだよ、不審者には」

「本当に不審者なんでしょうかね」

「……まさか、本当に鬼がいるとでも？」

「そうは思いませんけど……」

「でもま、いたら素敵じゃないかい？ ……タイトル。『鬼が彷徨う近代都市』」

「……？」

「ああ、少し恐怖系の芸術の方を齧っていてね。すっかり魅入られてしまって……それからはいろんなものにタイトルを付けるのが趣味なんだよ」

変わった趣味だ。

「もしかしたら、君が喰われるかもしれないぞ？ 鬼は、人を喰らうんだ。人に成りたいから、ね」

「……それこそまさかです。鬼は人を喰っても鬼のままだ。単なる戯言ですけどね。用はこれだけですか？」

「ああ、うん」

「それじゃあ。さようなら、獅子谷先生」

教室を出て、壁に寄り掛かった。溜息が出た。

裕子ちゃん、か。どの立場にいるんだろう。魔法関連者ではあるけど、鬼とは関与する気がないのか。それとも鬼退治か。はたまた、鬼を操る側か……。まったく……。

「ほんと、最高の戯言で最悪の傑作だな」

ぼくはそれだけ呟いて、買い物に行くべくその足を動かした。

* * *

〈裕子Side〉

「どっ？」

「……分からないな。なんであんな奴に恐れを持っていかれたのか」

やっぱりか……。

私も分からない。まるで魔法使いなのに魔法使いじゃないみたい。魔力は感じられないし……。怖い……。まるで幽霊ね。

「とりあえず、注意すべきではあるな」

この発言はつまり、自分の《子》を張らせるといふことなのだろう。……ごめんね、シオン。お願いだから変なことしないで……。

貴女が死んだら私は……。

* * *

くクロキSideく

「あれ、シオンちゃん？」

「ん、やーつときた。つたくー……」

え、なんでそんな御立腹？ ていうかそんな頬を膨らませてても可愛いだけだって。

「裕子……やっぱり誘えなかった」

「……そう。まあ、そうだよね」

彼女が魔法使いだと知ったシオンちゃんの今の心境、か。何故教えてくれなかったのか。何故あの場所にいたのか。そもそもあの場所はどこだったのか……。見た感じ、教会っぽかったけど……。こちら辺にある教会と言えば、聖ウルスラ辺りかな？

「ね、愛華。これから買い物って言ってたよね。私もついてって良い？」

「え、でもつまらないよ？」

「つまらなくてもいいの。それに、一人で出歩くなーって獅子谷先生が言ってたじゃん」

確かにそうだけど……。……まあ、いつか。

「あ、ちょっと待って……」

つかつかと先に歩く。どうもシオンちゃんはぼくに拒絶されたと思っただらしく、どこか捨てられた仔猫……いや、捨てられた猫の様な顔をしていた。

「シオンちゃん、いかないの？」

「……いく」

どうやら馬鹿にされたと分かったらしく少し拗ねてしまった。小走りではくの横に来たシオンちゃんの頭を少しだけ、軽く乗せる様に撫でた。今にも「にゃー」と鳴きそうな顔になった。

* * *

「じゃあね」

「うん、また明日」

買い物を終え、ログハウスに到着。そこでシオンちゃんと別れ、ログハウスの中へ入る。中は異様な程に静かだった。いつもは曆ちゃんとエヴァがうるさくしてるんだけど……。

まあ、静かなことが良いに越したことはない。さつさと夕食の準備に取り掛かった。

後は煮込めば終わり。あ、今日は肉じゃがにしてみました。どうもエヴァが『日本食』を食べたいって言ってね。ビーフシチューでもないんじゃないかのセレクションだが、まあいいじゃないか。肉じゃがも立派な日本食だよ。

「お、肉じゃがが？」

階段を下りてくる音と共に、エヴァの声が聞こえた。

「あ、エヴァ。二階でなにを？」

「ちよつと、暦を苛めてきた」

ニヤニヤすんな。

はあ……。後で助けに行かなきゃ。

そう思いながら、ぼくはソファに横になった。

「どうした？ 久しぶりの学校は疲れたか？」

「うん、かなりね」

ソファにうつ伏せで寝る。少々無理がある体勢だった。その上、足をバタバタさせる。必然的に埃が舞うが、今は気にしない。どうせ吹いても拭いても、埃は積もるんだから。

そんなどうでもいいことを考えながら、ぼくは思考の中に入った。

裕子ちゃん。獅子谷教員。シオンちゃん。

実は言うところ、ぼくが睨んでいるのはこの三人なのだ。シオンちゃんは《魔眼》を持つてるし、《コピー》すれば鬼なんて簡単に出せるだろう。一度でも鬼に会ってれば、だけれど。

裕子ちゃん。彼女は魔法使いであることを魔法使いにも隠している。必然的に怪しい。

獅子谷教員。あいつの中には、ぼくと同じようななにかが見えた。ひた隠そうとしてたけど、同類であるぼくには簡単に見破られる。

「……最低だ」

友人と。

ぼくのことを友人と呼んでくれた、あの子を。

ぼくは。

ぼくは犯人だと思いこんでいるのだ。最低最悪、下劣にして、下種。

「何か言ったか？」

「なにも」

「そうか……」

即答したからか、怪訝な目で見られた。まあ、どうでもいいけど。

「あう」

足をパタパタさせてたら床に落ちた。

「う〜」

足のパタパタを止めずにその場で唸りだす。我ながら奇行すぎる。

「どうかしたのか？」

「……自分の最低さに打ちひしがれてるだけです」

「……そうか」

エヴァはそれだけ言つと部屋を出ていった。お風呂だろうか？
いや、お手洗いな。

その日はいつも通りに過ぎていった。

縛りあげられてる曆ちゃん（それも亀甲縛り。エヴァ、マニアックな子）を助け、いつの間にか席についていたエヴァと共に夕食である肉じゃがを頬張る。お風呂もいつも通りだ。

ただ、最後だけは違った。ある意味で。

「久しぶりの愛華さんの温もりムハー！」

という具合に曆ちゃんがテンションマックス。誰か助けて。ヘルプミー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786y/>

ネギま！ ～魂狩り～

2011年11月26日01時54分発行